平壌の逸話と伝説

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
チュチェ111（2022）

平壌の逸話と伝説

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
チュチェ111(2022)

まえがき

5000 年の悠久の歴史と輝かしい文化を誇る朝鮮の首都平壌には、数々の多様な逸話や伝説が残されている。

そこには、外国の侵略軍を相手取って平壌を守り勇敢に戦った平壌人民の愛国心と、平壌が朝鮮民族発祥の地であり、民族最初の国家古朝鮮の国都であったということ、平壌の人たちの道義心、美風良俗を語る逸話や伝説もある。

本書には、古代以来近代に至るまでの平壌にまつわる逸話や伝説の一部が紹介されている。

目　　次

逸　話……………………………………5
温達将軍……………………………………5
鹿足夫人と2人の息子……………………13
鳥　灘………………………………………16
桂月香と「義烈祠」………………………19
平壌城の鐘を打ち鳴らす…………………20
大同江の水を売る…………………………26
平壌で慟哭した詩人………………………30
大同江の詩人………………………………33
王城灘を守った朴多知……………………35
練光亭の扁額「天下第一江山」…………39
綾羅島で行われた武科の科挙……………41
『箜篌引』を作り、歌った麗玉…………44
西道雑歌の創始者許得先…………………46
愛国婦人白善行……………………………49

伝　説……………………………………52
平壌の悠久な歴史…………………………52
檀君の王宮――柳宮………………………52

「天地の総領宮」……………………………53
紅　山……………………………………56
檀君湖……………………………………60
阿達泉……………………………………64
馬の墓……………………………………68
阿達山の山鳴り…………………………70
興富洞の由来……………………………74
東明王陵で両班にひと泡吹かせた百姓…………76
大城山の古墳を守る蛇…………………81
神秘な普通門……………………………84
漂流してきた綾羅島……………………90

美しさで聞こえた平壌…………………93
牡丹峰に降りた天人……………………93
扇子岩……………………………………95
脱衣を余儀なくされる一隅……………97
大同江の錨………………………………102
清流壁……………………………………104

平壌人民の愛国心………………………105
大城山城南門の花壇……………………105
梅の花を守った娘………………………111
乙密将軍と乙密台………………………115
白銀灘……………………………………120

乙密台の松…… 122
王城灘…… 126
斧勇士…… 128
ネズミのほこら…… 135

平壌人民の道義心…… 136
于稜と小緋…… 136
幸福の門——七星門…… 145
王の婿となった武士…… 148
応国橋…… 152
酒岩山…… 158
子鹿を救った娘…… 160
恩返しをしたノロと蛇…… 163

逸　話

温達将軍

温達は高句麗を守る侵略軍との戦いで勇名をはせた名将で、彼についての逸話は、平壌に残るもろもろの逸話のうちで最も広く伝えられている。

平壌城外のある村に、温達という名の若者が、盲目の母親に仕えて一緒に暮らしていた。

母子の生活はたいそう苦しく、日に三度の食事もままならぬほどだった。

極貧の中でも、体が丈夫で心だてのすなおな温達は、母親にひもじい思いをさせまいと、食べ物の切れたときは、村中を巡って物乞いをしてでも、きっと母親にだけは食事をさせた。

破れ衣をまとい裸足でほっつき歩くとして、人々は彼を「馬鹿温達」と呼んでからかい、いつしかそれが通り名となり、平壌城内全体に広まってしまった。

当時、高句麗は平康王の治下にあった。

王には3人の娘がいたが、末娘は大変な泣き虫で、あきれた王は冗談に、「お前はいつも泣いてばかりいて、このお父さんでさえ聞きづらいほどだから、今に大きくなって

もまっとうな人のお嫁さんになるのはむずかしいだろう。どうもお前は馬鹿温達の嫁に送るしかないわい」と冷やかしたものだった。

娘は成長し、16の歳を迎えた。

王はある貴族の御曹子を彼女の婿に選んだ。

娘は父王に向かって言った。

「お父様はいつも、お前はきっと温達の嫁にやるとおっしゃっておられましたのに、今日はどうしてそのお言葉に背くようなことをおっしゃるのです。並みの人たちさえ嘘や偽りをはばかって言わないのに、まして一国の王たる方がどうして前言をおひるがえしになられるのです。今おっしゃったお言葉はお間違いですから、従うわけにはまいりません」

王は愛娘の言葉を冗談とし笑って受け流していたが、やがてそれが本心からの拒絶だと知って怒り、声を荒らげて叱りつけた。

「お前が父親の言い付けにどうしても従えないと言うなら、わしの娘だとどうして言えようか。だからわしの側に居ようなどと考えるんじゃない。もうお前はわしの娘ではないのだから、ぐずぐずしないで宮殿から出ていくがよい」

王女は父王の厳命もさることながら、早くから固く決心していたこともあり、思い切って宮殿を出ることにした。

彼女は普段愛用していた金の指輪と銀の指輪、それに数個の金の腕輪を持って城を後にした。
　これまで宮殿内にほとんど閉じこもって暮らしてきたので、城外の世界のことは何も分からずにさまよい歩き、通りすがる人たちに尋ね尋ねて、やっとのことで山の谷間の温達のあばら家を探し当てた。
　家には盲目の母親だけがいた。
　王女は温達の母にうやうやしくお辞儀をし、訪ねてきたわけを話した。
　盲目の母親はびっくりし、あわててかぶりを振った。
「娘さんのお体からはさわやかな香りが漂い、お言葉には優しい人情味が感じられます。どう考えてもお国の高貴な家柄の娘御さんです。それなのに誰からとんでもない話を聞いて真に受け、見当違いも甚だしい私どもの家へお足を運ばれたようです。わしのせがれは飢えに耐え切れず、松の内皮をはぎに近くの山へ行っていて、今にはおりません。こんな貧乏者が尊い御身分の娘御さんと一緒になることなど、夢まぼろしに過ぎませんから、どうかこのままお引き取りになって下さいませ」
　王女は彼女の荒れた両手を取り、温達の帰りを待つと言ったが、彼はなかなか姿を現さなかった。待ち切れなくなった王女は、温達が出掛けたという山に向かい、谷間を上がっていった。

危なっかしい足取りであえぎあえぎ歩いていると、背負い子をしょった若者が木々の間をふらふらと下りてくるのに出会った。

ぼさぼさの頭髪、破けて肌の見えるチョゴリ、石につまずいたらしい血のにじんだ足、ごつごつした火掻き棒のような手……。どう見ても温達に違いない。王女は若者の前で立ち止まり、一礼して自分を紹介した。

不意に目の前に現れた美しいあでやかな娘を見て、目を見張り、あっけにとられていた温達は、気を取り直して一喝した。

「ここは女が一人で現れるような所ではない。だからお前は間違いなく人間ではない。狐の化け物だ。おれに一歩も近づくな」

こう言い残して温達は振り向きもせず、谷を下りていった。

王女は悲しくうつろな気持ちを抱いて、遠くから彼の後を追い、その家の軒の下で夜を明かした。

翌朝、部屋に上がった王女は、心をこめて切々と言った。

「わたしにはこの世に頼りにして暮らせる方があなたお一人しかおりません。お母様に心から仕え、温達様に力の限りを尽くしますから、どうかわたしの願いをお聞き届けになって下さいませ」

しかし、温達は決断を下せなかった。いつまでも押し黙っているその気持ちを察した彼女は、目を伏せて静かに

言葉を続けた。
「昔から、一升の穀物でも一緒に搗いて分け合って食べ、一尺の麻も縫ってともどもに着ることができるということわざがあります。お互いに気持ちさえ合えば貴賤にかかわりなく一緒に過ごせないはずはありません」
王女の切実とした言葉に、温達と母親は深く心を動かされ、こうべを垂れた。
こうして王女はその家に迎え入れられ、日中は仕事に励んで盲目の母親に孝養を尽くし、日が暮れると、温達に読み書きを教えた。
月日は流れ、温達は王女の熱心な指導を得て学問に習熟して兵書を物にし、世に聞こえた師の下で武術の修業に励み、ひとかどの武芸者に成長した。
日に日に上達する温達の武芸に喜びを抱いていた王女は、彼に駿馬を１頭求めて与えようと決心し、宮殿を出る時に持ってきた金の腕輪を売って馬を買った。
高句麗は、毎年３月３日、楽浪が原で狩猟競技を催し、入賞者を将帥に抜擢することを慣わしにしていた。
この日は、時には国王も自ら狩猟に参加し、臣下や５府の武士もみなこれに加わった。
百姓仕事のかたわら、馬術や弓術、剣術の練習に励んできた温達は、王女に勧められて馬にまたがり、狩猟競技に参加した。

全国の我こそはと自負する武士や民間の腕に覚えのある若者が競って出場するこの競技で、頭角を現すのは決して生易しいことではない。

けれども、俊敏、頑強、勇敢で、武術に特別秀でた温達を陵駕する者はいなかった。温達はこの競技で誰よりも多くのけものを捕った。

目の前に出された熊やノロ、鹿を見て、王はいたく喜び、そちはどこの誰かと聞いた。

温達はいささかも臆せず、ぐっと胸を張って答えた。

「それがしは平壌城外の村に住む温達という者でございます」

王は驚き、わが耳を疑った。

「今なんと言った？それではあの馬鹿温達なるものなのか？」

「さようでございます」

温達はこうきっぱり答え、王女をわが家に迎え入れ、そのおかげで読み書きを習い、武芸にも励んだ一部始終を語った。

王はなんと言ってよいか分からず押し黙っていた。じっとはるか空のかなたを見つめていた王は、やがて口を開いた。

「本日の狩猟競技の優勝者はその方だ」

競技の観覧者たちは、ドラや太鼓を打ち鳴らして優勝者温達を祝福した。

その後、侵略軍が大兵力で高句麗に侵入した。

この侵略軍との戦いに先鋒長として出陣した温達は、敵兵数十名を斬り伏せて侵略軍をおののかせ、配下の軍勢を率いて敵陣を次々に崩し、高句麗軍の勝利に大きく寄与した。

侵略軍を撃退し、軍功者の推薦がなされる時、軍勢一同はこぞって温達をその第一に名指しした。

王は彼の手柄を大いにたたえ、礼を尽くして彼を正式に婿に定めた上、大兄という位を授けた。

こうして王の寵愛と信任はますます厚くなり、彼の威風と権勢はいよいよ強まった。

ある日、温達は王に進言した。

「今新羅はわが高句麗の領土を奪い、自国の郡県として治めており、当地の住民はこれを悲しみ、憤りを抑え切れずにいます。それ故に願わくば、私を愚かな思慮不足の者とお考えなさらず、軍勢をお任せして下さるならば、一度の出陣で失地を回復して御覧に入れます」

王は温達の愛国心を大いにたたえ、大勢の軍隊を任せた。

戦場では軍の後ろに立って指揮するだけでなく、自ら馬にまたがって白刃を振るい、新羅兵を手当たり次第になぎ倒した。

血潮をもって失地を一歩一歩回復していた温達は、戦いがいよいよ終わりに近づいた矢先に思いもかけず致命傷を負って倒れた。

武人の名に恥じず、戦場で息を引き取る温達将軍を取り巻いて、高句麗軍の全将兵はこうべを垂れて弔意を表した。

古くからのしきたりと礼儀をもって葬礼を終え、棺を持ち上げようとしたところ、国の優れた武人を失った悲哀が大きかったせいか、棺は動かなかった。

十数人の担ぎ手が力を合わせたがどうしても持ち上げることができなかったので、やむを得ず、温達の夫人である王女にその事を知らせた。

夫の最期を聞かされて、王女は取る物も取りあえず、戦場に駆け付けた。

王女は愛してやまなかった大事な夫の死に驚愕し、とめどもなく涙を流した。彼女は棺を撫でさすり、「常に死につきまとわれている武人の生をここで終えてしまわれましたのね。ああ、なにとぞお安らかに」と呟いて慟哭した。

こうして王女が立ち上がると、棺を持ち上げることができたという。

平民出の優れた将軍を失って全国が悲哀に沈み、空も温達の戦死をいたんでか、雨を降らせた。

なかでも温達将軍の生い立ちを知る平壌城の人たちの胸の痛みは大きかった。

温達将軍についての話は、平壌城の住民たちにより代々語り継がれている。

鹿足夫人と 2 人の息子

昔平壌には、足の形が鹿のそれとそっくりだとして鹿足夫人と呼ばれた女性が住んでいた。

ところが、その 2 人の息子もまた鹿足だったので、遊び友だちにからかわれいじめられもしていた。

たまりかねた母親は、外でよその子たちと遊ばないで、家の庭で兵隊ごっこなんかでもするようにと言った。けれども 2 人の子は、一日中家の中に閉じこもっているのがうっとうしくて、ときどき外へ出て遊んだ。

そんなある日、自分たちの足を見てあざ笑った地主の家の子を腹立ちまぎれになぐりつけたが、打ち所が悪かったせいで、その子は死んでしまった。

大変なことになってしまったと思った母親は、地主にどんな目に合わされるか知れないと恐れて、その夜のうちに子たちを連れて逃げ出し、遠くの海辺にまでやって来た。

親子 3 人は小舟を見つけてそれに乗り、あてどもなく漕ぎ出した。

ところで、あわてふためいて逃げてきたので、途中の食べ物を準備していなかった。それで鹿足夫人は舟をある小さな波止場に着け、子どもたちを舟に残して、食べ物を求めようと、もよりの村へ向かった。

やがて食べ物を手に入れ急いで波止場に戻ってみると、小舟も子どもたちの姿も見えなかった。その間強風が吹い

て舟は沖へ流されたのである。

　このようにしてわが子を失った母親はほかにどうしようもなく、平壌の大城山麓にやって来て、鹿の群れを飼って悲しみをまぎらわせながら暮らした。

　歳月は流れ、鹿足夫人の髪にも霜が降り始めた。

　そうしたある日、侵略軍が高句麗に侵入してきた。この戦いを指揮したのは乙支文徳将軍であった。

　鹿足夫人は乙支文徳将軍を訪ね、侵略軍と戦う非常時にたとえ女の身ではあってもじっとしているわけにはいかない、軍人たちの生活に役立ちたいと願い、将軍の麾下に入った。

　侵略軍を撃滅する作戦を練っていた将軍はある日、敵軍の内情を探るべく、単身敵陣に乗り込んだ。

　鹿足夫人は将軍の身を案じ、秘かにその後を追った。

　敵将はこの機会に乙支文徳将軍を抑留しようとして待ち横えていた。彼は自国の王から出兵に先立って、高句麗の名将乙支文徳を適切な機会を見つけてきっと捕らえてくるようにとの指示を秘かに受けていたのである。

　ところが乙支文徳将軍をじかに目の前にしてみると、将軍の泰然自若たる態度、りりしくも豪放な威風に圧倒され、その理路整然とした論理に対応する言葉を知らず、あえて抑留する考えも忘れて、将軍をそのまま送り出してしまった。

　しかし我に返った敵将は、乙支文徳将軍を捕らえんものと、配下の軍勢に彼の後を追わせた。

この危機一髪の瞬間、川岸に舟を着けて待ち構えていた鹿足夫人に助けられて、将軍は無事に帰ることができた。

その頃、敵中には戦いに長けた兄弟がいたが、ともに鹿足将軍と呼ばれていた。

2 人の噂を耳にして驚いた鹿足夫人は、年老いた老婆の姿に身をやつして敵陣に入り、2 人の鹿足将軍に会った。

夫人は黙って二将軍に自分の足を見せ、彼らにも履物を脱ぐようにと言った。

2 人は言われるままに足を出して見せた。彼らの足も夫人の足と同様、鹿の足だった。2 人は彼女が自分たちの母親であることを知り、親子は抱き合って喜んだ。

鹿足夫人は彼らと別れ別れになってしまった後の話をしてから、2 人に厳しく言った。

「お前たちはこのわたしの子なんだから、当然高句麗の子じゃないか。それなのにこのお母さんに槍を向け、自国の人たちを殺そうとしているのだから、そんな親不孝者はどこにおり、そんな逆賊はまたどこにいるのよ」

母親を送り返した後 2 人は、母親のことを忘れ、自分たちが生まれた祖国のことを考えもしなかった恥ずかしさに身もだえし、夜が明けはじめた頃、高句麗の陣中に移ってきた。

2 人は母親に会って、国に背く行為を働いたことを深く詫び、乙支文徳将軍には、自分たちが祖国に背いた罪をす

すげるよう、高句麗軍に加えて戦えるようにしていただきたいと願った。
　その後、鹿足夫人の息子たちは侵略軍を高句麗の領土から駆逐し、勝利を成就するうえに大きく尽くした。

烏　灘

　綾羅島を通り過ぎて一筋に流れていた大同江の流れは、羊角島に至り二筋に分かれる。
　現在の平壌大劇場側の岸に沿って流れる辺りに烏灘と呼ばれている浅瀬がある。
　この浅瀬が烏灘という名を持つようになったのは、壬辰祖国戦争時期、日本侵略軍との平壌における戦いの最中だとされている。
　日本軍は平壌城の対岸まで押し寄せたが、平壌の守備軍が大同江の船をすべて隠してしまっていたので、渡河することができなかった。手分けをして浅瀬を探したが、どこも人間の背丈を越え、馬に乗っても渡れようがなかった。
　困り果てた敵将は、土手に腰を下ろして大同江の清い流れをぼんやり眺めていた。
　ところがである。
　日が西に傾き、夕焼けに染まった空の下をどこから飛んできたのか、不意にカラスの一群が円を描いて現れ、羊角島の先の川中に降りたのである。

そんな様子を何心無く見ていた敵将は、はっとして立ち上がり、まぶたをこすり凝視し、膝を打って叫んだ。
「そうか。あそこだ、あそこ」
　鴨でも雁でもないカラスが水面に降りて歩き回っているのは、その一帯の底が水面すれすれに浅いからではないかと感づいたのである。
　大喜びした敵将はすぐにもその浅瀬を渡って攻撃を掛けたかったが、対岸の城壁から監視の目が光っているだろうだから、そうもならず、暗くなるのを待って数人の斥候を出した。
　水は膝を越えないという報告を受けた敵将は、朝鮮兵が熟睡しているはずの早暁に奇襲を掛けた。そしてすぐにも対岸の城壁から勝どきが上がるだろうと待ち構えた。
　果たしてその城壁からは、天地を揺るがすようなときの声が上がり、閃光が次々にひらめき始めた。ところがそれらの光は城内に向かっているのではなく、川の方に走っているのである。それは平壌城の守備兵が撃つ銃砲であった。
　川を渡っていた日本兵はたじたじとなり、後退し始めた。
　あわてた敵将は引き返すなと号令し、予備の軍勢をさらに出動させた。
　次々に押し寄せる敵兵に力強い反撃を加えていた守備軍の応戦は夜明けを迎えて静まった。

そろそろ平壌城の攻略は成ったろうと思った敵将は、すっかり明るくなった城壁や大同江の流れを眺めて愕然とした。

変わりなく巨然と立つ城壁の前には一兵の影もなく静まりかえり、川の上には部下の屍体が浮き沈みしているのである。

「一体どうしたわけだ。カラスが歩いていた浅瀬はどうなったのだ」

思いもかけぬ意外な光景に茫然自失し、敵将はなすすべを知らなかった。

彼は、大同江には満ち潮と引き潮の影響が大きく及び、水の深さが全く変わってしまうことを知るよしもなかったのである。

カラスの群れが降り立ったのは引き潮の際であり、深夜川を渡り攻撃を開始した頃は満ち潮が始まり、川が次第に深くなっていく時であったから、防御軍の強力な反撃に加えて水に溺れる者が続出し大敗したのであった。

兵力の半ば以上を失った敵将は、不可思議な大同江の流れに恐怖を覚え、改めて渡河作戦を断行しようなどとは決心しかねた。

こんな出来事があってから、世人はこの浅瀬を、カラスが日本軍を惑わして大敗させることに一役買ったとして、烏灘と呼ぶようになった。

桂月香と「義烈祠」

壬辰祖国戦争で平壌がしばらく日本軍に占領されていたある日、平壌の名妓桂月香は当地の高達夫という人と図り、暴虐無道な敵将の一人を殺して日本軍の士気をくじき、わが軍の反撃を有利に進めうるようにしようとした。

彼女はこの目論見を果たすべく、敵将がしょっちゅう姿を現す練光亭前の柳の木の下をそぞろ歩いて機会を狙った。

思惑は違わず、そこを通りかかった敵将が彼女に目を止めて、連れていった。

敵陣内に入ることに成功した桂月香は、日本軍の内情を探り、部将たちが乙密台で酒宴を張っている際に、情報をしたためた密書を凧に着けて、城外にいる金応瑞将軍に送った。

その数日後、しめし合わせて城内にひそかに潜入した金応瑞将軍は、彼女に導かれて敵将の寝首を掻くのに成功した。

桂月香と金応瑞将軍が敵将の首をかかえて走っていた頃、早くも東の空は白み、もはや敵兵の目を避けて城外に抜け出すことは困難になった。

桂月香は金応瑞将軍に向かい、自分はしばらく他所に身を避けてから後を追います、今は将軍お一人で脱出して下さいと言い残して、追っ手たちを他方へ誘引した。

彼女は敵兵に捕らわれ、あくまでも愛国の衷情を曲げる

ことなく、無残に殺害された。

無事城を抜け出した金応瑞将軍は、麾下の義兵を指揮して武将を失って混乱している敵軍を襲撃し、平壌城を奪回した。

平壌の人たちは、侵略軍の撃破に大きく貢献した桂月香を追慕して、「義烈祠」を建て、祖国のために惜しみなく一命を捧げた彼女の愛国の衷情を世々伝えた。

平壌城の鐘を打ち鳴らす

鳳伊金先達についての物語は朝鮮人の間に広く知られている。

金先達がある年漢城に出掛けて、思いがけない時刻に号鐘（大都市で朝晩または国家大事の際に鳴らす鐘）を打ち鳴らして、漢城市内と宮城内を大騒ぎさせ、王の前に引き立てられ尋問されながらも、無事解き放されて平壌に帰ってしばらくたった時のこと。

噂を伝え聞いた常民は痛快な思いをしていたが、両班たちは、国の厳重な掟を公然と破りながらも一切とがめられなかったことに気を悪くして、金先達がまた面白半分に自分たちを愚弄するのではなかろうかと戦々恐々とした。

彼らはつどい集まるたびに、どうすれば金先達をとっちめることができようかと話し合った。

そんなある日のこと。彼らは大同門のかたわらの柳の木

陰で酒を汲み交わしながら、金先達をこらしめる相談をしていた。そんな時、たまたま話題の主がかたわらを通りかかった。
　彼を呼び止めて、一人が言った。
　「お前は漢城で号鐘を得手勝手に鳴らしながらも無事だったそうだな。それなら今度は、あの平壌城の鐘を好きな時に打ち鳴らしてみないか」
　大同門のすぐ近くには番人が守る鐘閣があったが、彼がその中の号鐘を指さしてこう言うのに、金先達は快く応じた。
　「両班の皆様方が是非ともとおっしゃるなら、どうしてあえてお断りできましょうか。けれども、その値はたっぷり頂きたいものです」
　「値だと？一体何が欲しいのじゃ」
　「私風情がお金や財産を集めてみても何になりましょうか。ただこの乾いた喉をうるおせるほどにお酒を5樽頂戴したいものです」
　「5樽だと？よし承知した。じゃあ、いつ鐘を鳴らすことにする？」
　「そうですな。いつだと今直ちに約束することはむつかしいですが、なんとか時間の都合はつけましょう」
　「うむ、分かった。お前の好きな時にやればいい。わしらは毎日ここへ来て待つことにしよう」

こうして話し合いがまとまると、金先達は彼らが注いでくれる酒を飲み、ほろ酔い機嫌で座を辞した。

遠ざかるその後ろ姿を見やりながら、彼らは笑い合った。

「ふふふ、間違いなくあやつはわれわれのわなにはまりましたよ」

「あれがいかに悪知恵にたけた男でも、このわなから抜け出すことはできますまい。ははは」

「そうですとも。国王は金先達の正体を見抜けず、むざむざ奴の甘言にあざむかれなさったが、ここ平壌監司を手玉に取ることはなるまい」

「そうしてみると、われわれはまたとない妙案を考え出したものですな。ははは」

両班たちはすこぶる満足し、この「妙案」を肴にして遅くまで酒にうつつを抜かした。

翌日から彼らは、毎日のようにこの大同門のかたわらにやって来て、金先達が約束を違えて現れないということはなかろうと考えて待ち構えたが、ひと月が過ぎふた月が経っても姿を見せなかった。

他方、金先達は両班たちと約束した次の日、中和郡に向かった。

平壌の鐘は、朝夕城門の開閉を知らせ、そのほか国家に変事が生じた時や、国王の特別の指示があった時に打ち鳴らされていた。

中和で金先達は、平安道にやって来る御史（王の使者）の到着を待った。

３カ月近く経った頃、平安監司への国王の指示文をたずさえた御史の一行が現れた。

金先達は御史の従者を通じて、一行が平壌城に到着する時日を確かめ、彼らに先んじて大急ぎで平壌に向かった。大同江に到着し、渡し船を降りて城門内に入ろうとしたところ、両班たちが彼との約束を忘れず、その場に来ていた。

「おい先達、どこへ行ってきたのだ」

「はい、その間お変わりありませんでしたか。私の友人が病気だと聞いて見舞いに行ったのですが、病気が重くて、ずっと付き添っていたのです」

「まあ、それはともかく、友人の病床のかたわらにずっといたせいで、われわれとの約束を忘れたとは言えまいだろうな」

「約束ですって？」

「なんだ、忘れてしまったのか。あの鐘閣に吊るされた号鐘を打ち鳴らすようにして見せると言ったではないか」

「あっ、そうでしたね。約束は守りますとも。ところで、その値に５樽のお酒を頂くことになっておりましたがね」

「ふうむ、そうだったな。お前も今やっと思い出したらしい。じゃあ、いつ鐘を鳴らすことにする」

「あすなりとも、すぐに打つようにしましょう」

「よし、分かった」

「何時に打ちましょうか。午後の3時にすればいかがでしょう」

その時刻は御史の平壌城入門が予定されている時であった。

このように時間の打ち合わせまでしたので、両班たちは約束の酒を運んできて与えた。

酒を手に入れた金先達はそれをわが家に持ち帰り、貧しくて普段酒も飲めないでいる近隣の年寄りや友人を招いて、夜遅くまで酒を飲みながら楽しく遊んだ。

翌日の午後3時が迫った頃、金先達は両班たちの督促に耐えられないというような足取りで現れて、彼らと一緒に大同門の前へやって来た。

彼は横目で川の対岸を眺め、御史一行の現れた様子に気づくと、急いで鐘閣に入り、大声で叫んだ。

「号鐘を打ち鳴らせいー」

「号鐘を打ち鳴らせいー」

たちまち静かな平壌城内に鐘の音が轟き渡った。

ところが、大同門の辺りにひそんでいた捕吏たちが、鐘閣から出てきた金先達を取り囲み、得手勝手に号鐘を打たせたとして、監営に引き立てていった。

前日、金先達が漢城の号鐘を打ち鳴らして国王を翻弄したことに味をしめて、またもや平壌の鐘を鳴らさせようと

企んでいるとの報を、くだんの両班たちから受けた平壌監司が、捕吏を差し向けていたのである。

「もはやいかに悪知恵にたけていようと、奴はにっちもさっちもいかず、これでお陀仏だわい。ははは」

「あの野郎、おれたちのわなに見事にはまって、もはや抜け出す手はなくなった。ふふふ」

彼らは頭痛の種であった金先達がつかまって行く後ろ姿を見やりながらほくそ笑んだ。

白州にかしこまった金先達をねめつけて、監司は詰問した。

「おいっ、貴様はいかなる理由で法を無視し、時間外に号鐘を打ち鳴らさせて城内の人心を騒がせたのだ」

「法を無視したとはもってのほかです。御史様の到着をいち早く知らせるべく、鐘を打つことを催促したにすぎません」

「なにっ、御史？はっはっは、嘘もほどほどにするがよい。貴様が5樽の酒欲しさに賭けをして、鐘を打たせたことを知らずにいると思っているのか。

わしはこの監営にじっとしていても、外の世界の出来事をすべて見､聞いておる。貴様は国王をあざむいて釈放されたが、ここではもはや重刑を免れないことを知るがよい」

「監司様のお見通しが明るいのか、この平民の見通しが正しいのかが判明した上で、刑罰が通用されるべきではないでしょうか」

「な、なんだと」

その時である。

一人の役人が息を切らして駆け込んできて注進した。

「一大事です。今……御史が大同門に到着され、なぜ監司が見えないのかと、たいそう腹立されております」

「何？御史が？」

そんな所へ監営の外で「下にー、下にー」と叫ぶ露払いの掛け声が聞こえた。

監司は驚き、あわてた。

「いやはや、なんたることだ……」

監営内が一大騒動に巻き込まれているのを尻目に平然として立ち上がった金先達は、監司に向かって訓示でもするかのように、「こんな出来事が生じたのは、監司様の目や耳がこの平民の目や耳より明るくなかったせいでございましょう」と言い残し、悠然と監営の外へ出ていった。

大同江の水を売る

昔、平安道の農村に住んでいるある金持ちが銭をいっぱい詰めた袋をロバの背に乗せて、平壌にやって来た。

百姓たちをしぼり金をしこたま儲けて気を好くした彼は、もっと多くの財を築こうと思い立ち、都市で商売をしようと平壌城にロバを引いて入ってきたのである。

彼は小さい手元で大金を儲ける商売はなかろうかと、平

壌にやって来た日から処々を歩き回った。

田舎富者のくせに平壌人相手に一儲けしようとはなんたる男だと、人々は顔をしかめた。

人々のそんな気持ちを察した鳳伊金先達は市場へ出掛けてみた。ここで彼は顔なじみの商人に１袋分の銭を借りて、大同門一帯の家々を訪ねて回り、その家の主に１銭ずつ持たせて、こう言った。

「明日の朝、川へ水を汲みに来たら、そこでわたしにこの銭を返して下さい」

こう言われた人たちは、金先達が誰だか金儲けに目がない男にひと泡吹かせようとしているのだろうと思い、みな快く応じた。

翌朝、例の田舎富者は大同江のほとりを散歩し、赤い日の出を眺めながら大同門の辺りに来た。その時、銭の袋を広げて座っている金先達の姿に目を止めた。

ところがなんと、城内の大勢の人たちが大同江の水を汲んでは、大同門のかたわらに座っている金先達の袋に銭を入れて帰って行くのである。

袋はわずかの間にどんどんふくれていく。彼は目を見張り、ごくりとつばを飲んだ。

（あんな金儲けの方法もあったのか。銭の夕立に遭ったも同然だ。大同江の水は年がら年中一日も休まずに流れているんだからな。

城内の人たちは誰であれ、大同江の水なしには生きていけないのだから、あれこそ元手いらずに大金を稼げるすばらしい商売だ)

彼の口からは、よだれが流れていた。

銭の袋がなおもふくれていく様子を見つめていた彼は、金先達の前に近づいた。

「あんた、この大同江をわしに売らんかね」

金先達はこの時を待っていたのだが、こいつはまたどこの馬の骨だと言わんばかりの顔つきで、かぶりを振った。

たっての言葉に答えて彼は言った。この大同江は先祖代々受け継いできたわが家の宝だ、ここで生じたお金は百を超える一家親族の命の綱なのだ、それをどうして手放せようか、と。

するとますます欲が強まり、要求する額は１銭たりとも駆け引きせず、全額払おうと言い、ついには自分が持ってきたお金を全部出そうとまで言い出した。

駆け引きは昼過ぎまで続き、金先達はとうとう相手のしつこい要求を呑まざるを得なくなったという風を装い、それなら持ってきたお金を袋ごと全部出せば大同江を売ろうと言った。

こうして大きな銭の袋をロバに乗せて持ってきて大同江を買った男は、大喜びし、天にも昇ったような心地にひたった。

早くも大金持ちになった気分で浮き浮きし、その夜一睡もせず夜を明かした彼は、朝早く起き出し、袋ならぬ大きな行李を持って大同門のかたわらに現れた。

ところがである。

昨日に劣らず大勢の人たちが大同江の水を汲み、大同門を通り抜けて城内に入っていくのだが、自分の行李に銭を入れる者は一人もいない。

男は、城内の住民がまだ自分が大同江を買ったことを知らないらしいと思って、彼らに声を掛けた。

「みなさん、ここへお金をお入れになって下さい」

ところが誰一人振り向きもしないで通り過ぎていく。頭にきた男は、水を汲んで帰る人たちの前に立ちはだかり、腕をつかんで言った。

「みなさん、今日からはわたしがこの大同江の主なんですよ。水を只で汲んでいっちゃなりませんよ」

呼び止められた人たちは、なんだこいつは、変な野郎もいるものだと顔を見合わせた。

「大同江の持ち主だって？」

「そうですとも。わたしゃ昨日この大同江を買ったんですぜ。だから、これからはわたしに水の代金を払わなくちゃなりません」

「なんだって？妙な人間もいるもんだ。大同江の主人はわれわれ城内の住人だよ。それなのにいつわれわれから

売ってもらい、先祖代々誰もがみな只で汲んで使っている水の代金を払えなんて、おかしな人もいるんだ」
男はいきり立って叫んだ。
「人を馬鹿にするのも程がある。それじゃ、あんたたちは昨日、水の代金を払わなかったとでも言うのか。袋に入れたお金は水の代金じゃないと言うんじゃな」
彼の言い分を聞いてはじめて、金先達がこのけちな田舎者をなぶり者にしたものだと気づき、みな腹をかかえて笑った。
平壌城の金先達に一杯食わされたとやっと悟った男は仰天し、へなへなとその場にくずおれたが、大きな行李のふちに尻が掛かってひっくり返り、両足を上に突き出してばたばたさせた。
大金持ちになる夢を抱いて平壌に現れたこの田舎者の金持ちは、鳳伊金先達と城内の人たちにひどい目に合わされてからは、二度と平壌に現れなかった。

平壌で慟哭した詩人

金黄元（1045 ～ 1117）は高麗の有名な詩人であった。彼は全国各地の名勝に遊び、秀麗な自然の風景をいろいろと詠んでいる。
ある年の夏、平壌の麗しい山や川が一目で見晴らせる牡丹峰の浮碧楼に立った彼は、清流壁と平壌城を巡り流れる

青く澄んだ大同江の流れと、薄いもやに包まれてはるかに広がる川向こう、東大院の沃野を眺め、それらの絶景に酔いしれて立ちつくしていた。

「ああ、世にはこのような絶景もあったのか」

有名な詩人が平壌を訪れ牡丹峰にいると知った官吏や文人たちが、金黄元にひと目会おうと、浮碧楼に集まってきた。彼らは一様に、平壌の絶景を歌った詩１首を残して頂きたいと詩人に懇望した。

金黄元は、浮碧楼の柱や梁に幾つも掲げられた額を見渡して、顔をしかめ慨嘆した。それらはどれ一つとして平壌の風景を生き生きと表現しえないでいたのであった。

金黄元は、自分が平壌の絶景をたたえる詩を残すことにするから、あれらのつまらぬ額をすべて下ろしてしまうようにと言った。

浮碧楼の柱に片手を当てて詩想を練っていた詩人はやがて、筆を用意するようにと言い、人々の注視するなか、力強く筆を起こした。

長城一面溶溶水
大野東頭點點山
長城の一面水は溶々と流れ
沃野の東方山は点々と立つ

こう一気に進めた筆が、ここでぴたりと止まってしまった。詩人は筆を握ったまま浮碧楼の下にしばらく目をこらし、やがて絹布の上に後の句を記そうとしたが、手は震えて動かない。

浮碧楼から見下ろす大同江の青く澄んだ流れを見ていると、あたかも海上に浮き上がった龍宮のあずまやに立っているような思いがし、遠くもやにかすむ東大院の沃野を望見すると、空の上に浮く天宮の欄干に立っているような気持ちになる。

見れば見るほど新たな感慨にとらわれるその風景を、わずか数聯の詩句にこめることはどうにもできなかった。

金黄元が2句の詩を書き起こしたまま、空しく筆を上げたり下ろしたりしているうちに時間は流れ、その額から滴り落ちる汗のしずくが絹布を濡らしている有様を見かねて、待ち構えていた人たちは、一人、二人と静かに立ち去った。

日が沈み、たそがれに包まれた浮碧楼に一人残った詩人はやがて筆を折り、床を叩いて慟哭した。

「ああ、平壌の絶景を歌うにはわしの詩才が貧しすぎる！」

こう慨嘆し、彼は夜遅くまで涙に暮れてその場に座っていた。

その後平壌の人たちは、書き起こしたまま筆を折った2句の詩を浮碧楼の柱に掛けて世々伝えてきたが、額は今は

練光亭に移されている。

　このように未完成の詩が後代にまで伝えられるようになったのは、その2句の出来栄えが優れていることもさることながら、世に広く知られた詩人ですら詩語不足で結句を良くなしえなかったほどの麗しい平壌の素晴らしさを、いついつまでも誇り続けようとの願いによるものである。

大同江の詩人

　鄭知常（？～1135年）は平壌生まれの詩人で、幼少の頃から詩才の片鱗を示していた。

　彼は3歳の時、洗濯する母親の背中におぶさり、大同江の上空に飛び交うカモメを見て、次のような詩を詠んだという。

ふわふわ飛び舞う白いカモメ
頭は空を見上げて歌うたう
真白い羽毛を水に浮かべ
赤い足で清い水を踏んでいる

　鄭知常が成長し、詩人の名声を博すると、当時文豪として自負心の強かった金富軾（1075～1151年）はひそかに彼をそねみ憎んだ。

　鄭知常への憎悪心が特に激しくなったのは、2人がある

山の寺を共に訪れて遊んだ際、互いに詩を詠み合った時であった。

　その日、鄭知常は次のような詩を詠んだ。

寺にて念仏を唱えてみるに
空はガラスのごとく澄んでいる

　金富軾はその詩に感嘆し、それを自分に譲ってくれまいかと言った。鄭知常はかぶりを振った。

　金富軾はむらむら怒りがこみあがり、自分よりはるかに詩才にたけた鄭知常を、なんとか亡き者にしてしまわなくてはと思った。

　それからしばらく経った1135年、妙清の乱（僧妙清ら以下西京都（平壌）地方の両班たちが起こした政変）が鎮圧された際、金富軾は鄭知常が妙清と内通していたとの濡れ衣を着せて、彼を死に追いやってしまった。彼はこれで自分を圧倒するに足る詩人は世にいないと胸をなでおろし、おごりたかぶった。

　そんなある日、1首の詩を詠み、彼は天下の名句だとしていい機嫌になった。

千本の柳の枝は青々
万点の桃の花は赤々

その夜、金富軾は上機嫌で詩をそらんじているうちに眠りに落ち、夢を見た。

夢に死んだ鄭知常が現れ、金富軾の横っ面を張って叱りつけた。

「千本だの万点だのというのは実際に数えてみたのか。こんなものを詩だと言ってうぬぼれているとはな」

彼は金富軾がぐうの音も出せぬほど怒鳴りつけて筆を取り、詩を書き直してやった。

一枝一枝柳の木青々
一輪一輪桃の花赤々

直された詩を詠んだ金富軾は一言もなくうなだれた。

その後の言い伝えによると、金富軾は自分よりはるかに優れた詩人を死に追いやったとして不安と恐怖にさいなまれた末、天命を全うできず、かわやで急死したという。

王城灘を守った朴多知

朴多知の本名は朴億であるが、優れた知恵の持ち主だとして多知と呼ばれていた。

彼は壬辰祖国戦争の際、平壌城を守る戦いで大いに活躍した10勇士の一人で、この戦いでもさまざまに知恵を働か

せて多くの手柄を立て、いよいよその名を高めた。

1592年6月、日本軍が平壌に迫ると、守備軍と義兵は、敵の進撃を阻止すべく、何よりもまず大同江の浅瀬を守ることにした。平壌10勇士の率いる義兵は浅瀬の一つ王城灘を守ることになった。

彼らは戦いの準備がまだ出来ていなかったので、朴多知が先発隊を率いて浅瀬の岸辺に陣を構えて待機するようにした。そして高春明、金自沢、玄守白ら残りの勇士は、城内で弓矢と槍、剣を用意してから後れてやって来た。

ところが、先発隊は指定された場所に陣を張っていたのではなく、王城灘からかなり離れた深い川のほとりに旗を立て、陣地を築いていたのである。

「朴兄！一体どうしたわけだ？」

「なに？陣地の位置を間違えたとでも言うのか」

「そうだとも。われわれが守ることになっている王城灘はここではなく、ずっとあの先の方じゃないか」

「平壌っ子のおれがそれを知らないとでも思って教えてくれているのかね」

「じゃあ、どうしてこんな所に陣地を築いたのだ」

「もちろん王城灘を守るためさ」

「何だって？王城灘を守るなら、その川辺に陣を構えるべきであって、敵兵が渡ろうともしないこの深い川の岸辺

に陣地を築いてなんの役に立つのだ」
　直情径行で無鉄砲とのあだ名を持つ玄守白が勢い込んで問いただした。
　普段から冗談好きで、おっとりしている朴多知は笑って答えた。
「敵もわれわれと同じように考えるだろうから、ここを陣地に選んだわけさ」
「なんだって、敵も同じように考える？」
　この問いに答える間もあらず、日本軍が現れたという声が四方で上がった。
　見ると、対岸の彼方から白い土煙を上げながら、数百の敵兵が押し寄せてきている。
　もはや陣地を王城灘の前へ移すゆとりはなかった。やむを得ず朴多知の築いた陣地に依って戦うほかないと観念しいらいらしていると、なんと敵軍は王城灘の方は見向きもせず、彼らの陣地の対岸で立ち止まり、わが軍の旗を目標にして火縄銃を撃ち始めたのである。
　義兵たちは朴多知の命令一下、対岸の敵兵めがけて矢を放った。敵兵は妙な叫び声を上げながら銃を前にも増して激しく撃ってくる。
　戦いの成り行きを見守っていた朴多知は、矢をあまり多く射ず、弓勢を弱めて川の上に落ちるようにせよと指図した。敵の猛撃に恐れをなし、浮き足立っていると見せかけ

ようというのである。
　敵兵はしめたとばかりに一斉に川の中へ入り、ときの声を上げながら渡河し始めた。
　敵兵の大半が川の深みに入り泳ぎ始めたのを見計らい、朴多知は、強力な射撃をもって敵兵を射殺せよと命じた。川を泳いで渡る敵兵は応戦もならず、次々に放たれる矢の餌食になり、一人、二人と水の底へ沈んでいった。
　川の中ほどにも至らず、味方の兵が消え失せるのを見て、後に続いていた敵兵は恐怖に駆られて退却したが、その数は幾人にもならなかった。
　戦いは義兵たちの快勝に終わり、彼らは一斉に勝ちどきを上げた。
　朴多知は喜び勇んで万歳を叫ぶ玄守白の肩を叩いた。
「どうだね。敵兵は考え違いをし、わが軍が浅瀬の前に防御陣を布いているものと見たのさ。さもなかったら、守ってもいない本物の浅瀬には行ってみもせず、われわれが陣を張っている前の深い川の中へ突入するわけはなかったろう。ははは」
「なるほど。今度も日本軍は朴多知にしてやられたわけだ。ははは」
　10勇士ら義兵はみな、日本軍を翻弄し、見事に撃破した朴多知の知謀に感嘆して止まなかった。

練光亭の扁額「天下第一江山」

平壌の練光亭から展望する大同江の風致が格別に優れ、古くから関西八景の一つに数えられており、第一楼台、万和楼などの名もあった。

現在の建物は、1670年に建て直されたものである。

練光亭には、壬辰祖国戦争の際、金応瑞将軍が愛国名妓桂月香の助けで敵将を刺殺した快挙についての物語がこもっている。

風光明媚の大同江のほとりに爽快な姿を見せてたたずんでいる練光亭に立つと、梁に掛かった「天下第一江山」と書かれている扁額が目に付く。

この扁額が練光亭にかかげられたのには、次のようないわれがある。

16世紀のある年、朝鮮を訪れ、平壌に一時滞留した明国の使臣がある日、練光亭に立ち、眼前に広がる麗しい風光にいたく感嘆して、それ以来毎日のようにここへやって来た。

帰国を目前にした使臣は市場に出かけ、ある細工師に金を差し出して、立派な額縁を一つ作ってくれるよう頼んだ。出来上がった額縁に、自筆の「天下第一江山」という文字を入れて練光亭を訪れた彼は、そこに集まった人たちにこう言った。

「私はこの世に生まれ、頭に霜が降りるこの歳まで、数

多くの土地を見てきましたが、こんなにも麗しい景色を見たのは初めてです。この山紫水明の土地をどうして天下第一の山河と呼べないわけがありましょうか。私の切実な願いをお容れになり、この扁額をここ練光亭に掛けて下されば幸いです」

こうしたいきさつで、「天下第一江山」なる扁額が練光亭の梁に掛けられた。

それからかなりの年月が経った夏のある日。

朝鮮に不意に侵入した隣国の軍隊が平壌を一時占領した。

練光亭に立った敵将は、「天下第一江山」の扁額を見てせせら笑い、「あの扁額を下ろしてしまえ。この広い世界の片隅にある小国に、どうして天下第一の山河があると言えようか」と命じた。

彼は、部下が扁額を下ろすのを見届けた上で、改めて練光亭の周囲に広がる風光を見渡し、目を見張った。

しばらく四方の風光にみとれていた彼は我に返り、気まずい思いをしながら、下ろした扁額を持ってくるようにと言い、剣を抜いて中の文字のうちの「天下」を切り取り、「第一江山」の文字を残した額を元の位置に掛けるよう指示した。

部下たちは訳が分からず、ぐずぐずした。すると彼は、「天下という文字は気に食わないが、当地が第一の山河だ

ということは否定のしようがない」と言い訳した。

部下たちも、もっともだとうなずき「第一江山」という文字が残った額を元の位置に掛けた。

侵略軍を駆逐した後、平壌の人たちは、残念な思いをしながらも、「天下」という2字のなくなった額をそのまま保存した。たとえ「天下」なる2字が削除されたとはいえ、朝鮮を敵視した侵略者たちさえ平壌の美しさを否定しえなかったそのことが平壌の誇りだと考えたのである。

とはいえ、その後長い歳月、人々は練光亭を訪れては、「第一江山」なる扁額を見て、遠い昔に無くされた「天下」という文字を思っては残念に思った。

そうした気持ちが生かされ、実に深い意味のこもる「天下」という文字は、現代に至って復元されたのである。

昔の人たちが平壌の絶景をたたえ、ここに扁額を掛けて伝えた「天下第一江山」の真の意味は、今日、様相を一新した大同江一帯の絶景により、輝きをいっそう増している。

綾羅島で行われた武科の科挙

15世紀中葉のある年の秋、国王世祖は平壌におもむき、綾羅島で武科の科挙を実施した。

平壌在住の武芸者たちは喜び勇んだ。それもそのはず

で､それまで武科の科挙は首都の王宮内でのみ行われ､応試者は主として南道在住の者に限定されていたからである。

科挙が平壌で行われることをとりわけ喜んだのは、大城山道場の主、朴道士であった。他の追随を許さぬ武芸の達人で、数十年もの間あまたの弟子を育成した平壌生まれの朴道士は、この絶好の機会に卓越した弟子を科挙に応試させ、壮元（首席）及第者を出して、師匠の誉れを輝かせたいものだと思った。

科挙が実施される日､朴道士は多くの弟子を従えて大同江綾羅島の試験場にやって来た。試験場は早くも応試者や見物人であふれていた。

ところが、ここで朴道士の興奮は冷まされてしまった。

王が科挙の実施を宣した際､応試の資格者は平安道の人間に限る、もし、他地方の者が偽って参加すれば極刑に処すると付言したからである。朴道士の弟子の中に誰よりも大きな期待をかけている咸鏡道生まれの劉という若者がいたのである。

試験が開始されると劉某は剣を地面に突き刺して痛嘆し、朴道士も胸がつぶれそうで悄然としていた。

最初の組の試験が終わり､第２の組が出ることになった。

「先生、私はどうにも我慢がなりません」

こう言い残した若者は死を覚悟して馬にまたがり、第２組の応試者の中へまぎれ込んだ。

馬術と剣術、弓術で抜群の腕を見せた彼は満点の成績をあげた。

応試者の成績順位が発表され、壮元及第を果たした彼は、王の前へ呼ばれた。

朴道士はいらいらした。彼が咸鏡道の者だと知れたら、極刑は免れなくなる……。

王は若武者の名と家族関係、出身道について聞き、彼が咸鏡道の人間だと知ると、激怒した。

「貴様は平安道外の者が応試すれば極刑に処せられるということを知らなかったのか」

「いや、存じておりました」

「そうと知りながらも応試したと言うのか」

「私は咸鏡道の者ではございますが、ここ平壌の大城山の道場で武芸を鍛えた者であり、今日、国王陛下が平壌城の武芸を親しく御覧なさると知っては、どうして一命を惜しんで尻込みしておられましょうか」

「では極刑は覚悟の上だと言うのじゃな」

「私の師朴道士は、真の武士たる者は、武術や兵法に先んじて、国のために一命をなげうつ心構えを固めるべきだと教えております」

「心構え？」

「さようでございます。それゆえ私は今直ちに死をたまわっても、後悔は致しません」

王はつと立ち上がって若者の両肩を取り、「朕は今日、真の武士に出会ったわい」と嘆じた。そして、彼を壮元及第者として正式に登録するよう命じ、武官に登用した。

科挙後しばらく経ったある日、大城山道場の朴道士の家宅に大勢の従卒を従えた大臣が現れ、朴道士を首都の訓練都監に任命するという王の勅令を伝えた。

けれども朴道士は固辞し、引き続き大城山の道場で弟子を教え、あまたの武芸者を養ったという。

『箜篌引』を作り、歌った麗玉

古朝鮮時代、平壌大同江の渡しで夫の霍里子高と睦まじく暮らしていた麗玉は、叙情歌謡『箜篌引』（箜篌の歌）を作り、13 弦の箜篌に乗せて歌ったことで後世にまで知られた民間の有能な女流音楽家である。

彼女はしがない渡し守の妻に過ぎなかったが、そんな貧しい暮らしの中でも音楽を愛し、箜篌を弾き歌うのを楽しみにしていた。

そんなある日、この日も麗玉は箜篌を弾きながら夫の帰りを待った。

朝早く大同江の渡しに出掛け、終日働いて帰った夫は、次のような悲劇的な話をした。

「今朝、渡しから舟を漕ぎ出した時、ある気の狂った白髪の老人が髪を振り乱し、手に瓶をつかんで、荒れる水の

中へ飛び込み、川を渡り始めたのだ。その妻が後を追ってきて、川を渡っちゃいけないと叫んでいるのに、老人は振り向きもせず渡り出し、結局水に溺れて死んでしまった。すると、老女はあんたなしにわたし一人でどう生きていけるのよと箜篌を抱いて歌いながら嘆き悲しんだ末、自分も川に身を投げて死んでしまったのだ」

　その夜、夫から大同江に身を投じて死んだ白髪の狂人とその妻の痛ましい最期を聞いた麗玉は、老夫婦の死を悼み、老婦が嘆き悲しみながら歌った唄をもって『箜篌引』を作った。

　麗玉の作詞、作曲になる『箜篌引』はこうして世に生まれるようになった。

　彼女が箜篌を弾きながら歌った『箜篌引』は涙なしには聞けないほど悲哀に満ちていた。

　だが、この曲は後世に伝わるまでに至らずただ漢詩として翻訳された歌詞のみが知られている。

　その歌詞を現代のことばで訳してここに紹介する。

渡るでないと止めたのに
聞きもしないでなぜ渡り
水に溺れて死んだのよ
あたし一人を世に残し

西道雑歌の創始者許得先

許得先は、朝鮮封建王朝末期、平壌を中心とする西道地方で活動した代表的な西道名歌手であり、西道雑歌の創始者として民族音楽史に名を留めた才能豊かな民間音楽家であった。

彼は若くして父に死なれ、盲目の母親の下で暮らす苦しい生活の中でも歌を熱心に学んで歌唱法とその形象法に習熟し、剽軽滑稽な身振りをもって歌に彩りをつけもして、名歌手の名をほしいままにした。

彼は、都市の庶民層の中に基礎を置いて発展していた歌詞を、民謡調メロディーの濃厚な手法をもって歌って西道雑歌を創始し、それを広めた。

彼は時々漢城へ行き、舞台に立って西道雑歌を歌い、斯界で西道雑歌の祖と認められるようになった。

彼は歌の内容に合わせて手振り、身振りを自在に添え、時にはせむし踊りも披露して観衆の喝采を博した。

そんな中で彼の舞台活動にはいろいろな逸話が残されもした。

その一つに「王孫は万々歳」というものがある。

1868 年の景福宮の再建後、景福宮では音楽会が催され、西道名歌手許得先もこれに呼ばれた。

封建支配層はこの音楽会に全国の名だたる歌手を呼んだが、地方差別の観念から、西道の歌手を蔑視し、排除して

いた。しかし、さすがに名歌手の名の高い許得先は無視できず、一度聞いてみようかという心算で呼んだのである。

この日の音楽会では国王以下文武百官の見守る中、全国各地から参集した名歌手たちが次々に舞台に立った。

やがて許得先の順が回ってきた。

彼の特技である西道雑歌の豪気・闊達な歌声と彼特技のせむし踊りとが巧みに溶け合って、音楽会の興趣はそそられた。

それに人一倍大きい耳が歌声と調子を合わせて上下に動き、頭にかぶったマンゴン（網巾）が上がったり下がったりして観衆を笑わせ、王も大臣たちも腹をかかえて笑いこけた。

こうして音楽会は漢城や各地の名歌手を押しのけて許得先の独り舞台に変わり、観衆はもとより、他の歌手たちもアンコールを要求し、彼の歌は続いた。

そんなさなかに許得先が「王孫は万々歳」という奇抜な知恵を働かさなかったとしたら、たちまち首をはねられずにはおかない危機一髪の事態が持ち上がった。

即興的な歌やメロディーをもって歌い踊っていた許得先の唇が不意にこわばった。

それはある古い書の詩句にメロディーを付けて歌い始めた時である。

そこに「春の草は年々緑なるも、王孫は一度去れば帰ら

ず」という語句があり、彼は「王孫は」と歌って、はっとした。

民衆の間で歌い踊っていた時は、国王以下封建支配層を恨む彼らの気持ちに合わせて、王の代も時が至れば終わるという意味のこの句を元気一杯歌っていたものだが、今上機嫌で歌い踊っているうちに、自分が王の前で歌っていることをつい失念したのである。

「王孫は一度去れば帰らず」中の「王孫」は、と言ってしまったが、「一度去れば帰らず」と続けたら、たちまちその場で首をはねられることになる。

いかに機知に富んでいるとはいえ、彼はしまったと思った。それまで笑い興じていた臣下たちもはっとして、王の挙動と許得先の口を凝視し、今にあの西道道化師の首がどの隅に転がり落ちようかとして、かたずを飲んだ。

この時、許得先の口から「王孫は」という語が再び飛び出した。と思うと、歌声はぴたりと止まり、彼はせむし踊りを踊り始めたが、踊り終わるや彼の口から「万々歳」という大声が発せられた。

その声に、かたずを飲んでいた観覧者の口から「ふうっ」という吐息が漏れ、一斉に拍手喝采が湧いた。それはあたかも観衆の危惧心を誘発した上で、めでたし、めでたしのクライマックスを演じた巧妙極まる芸術的な機知だった。

王は、王の代がいついつまでも続くという歌の締めくくく

りに大満足し、許得先を自分のかたわらに座らせて、酒を注がせさえした。そしてその要望通り彼を地方軍の中堅級官吏である総巡に登用した。

物々しい武官の出で立ちで、腰に剣まで下げて故郷平壌に帰った許得先を見て人々は目を見張った。

けれども彼は実際に官職に就いて働こうという気は毛頭なかったので、わが家で官服を脱ぎ、たんすにしまってしまった。

彼が王に総巡に任じて欲しいと要望したのは、ある日愛する盲目の母親が市場で雑兵どもに訳もなく痛めつけられたことで腹の虫がおさまらず、彼らをおどしつけて二度とそんなことをしないようにするためであった。

平壌の人たちはそれ以来、許得先を許総巡と呼ぶようになったという。

愛国婦人白善行

平壌市の中心部を流れる大同江の岸辺に立つ練光亭の程近くに、3階建ての石造建築白善行記念館がある。

白善行（1848.11.19 ～ 1933.5.8）は、80数歳で世を去るまでわずか2年間の婚姻生活を除いて独身生活を続け、勤勉でつつましやかをむねとし、倹約に努めて財を築き、そのすべてを国と民族のために使った愛国婦人であった。

貧乏儒生白志用の長女として生まれ、7歳の時に父に死

なれ、貧乏に苦しんだ末、14歳の年に嫁にやられたが、16歳に夫は病死した。

夫が最期を前にして苦しい息をついているのを見かねて、彼女はわが指を切り、その血を飲ませたが、夫は5日間持ちこたえただけで回復はせず世を去った。夫の生命をなんとか救おうと願った甲斐がなく、虚弱な夫は空しく落命したのである。

それ以来白後家と呼ばれるようになった彼女は、国が日本帝国主義の植民地支配下に置かれた暗たんたる世の中でもうまずたゆまず働き、金を貯めていった。麻や木綿を織り、もやしを育てて売り、豆腐を作って売り、豚飼育用の残飯を集めて売り、花を売り、豚を飼うなどと数十年もの間せっせと働いた。

こうして蓄えた金をもって当時誰一人見向きもしなかったある岩山を安い値段で買った。それは石灰岩の山だった。

その後のある年、小野田という日本人財閥がこの山に目を付け、彼女に売れと持ち掛けた。彼女は駆け引きの末、元値の数十倍で売りつけた。

それは膨大な金で、彼女はたちまちにして平安道一帯の屈指の財産家になった。けれども彼女は贅沢も享楽も一切避けて真面目に働き、質素に暮らし、蓄えた金は民族のため、貧しい人たちのために惜しみなく投げ出した。

近隣の村のある川の橋が洪水に流され、村人たちが難儀していると知ると、彼女は早速私財を投じて石橋を建てた。

感動した村人たちは彼女を白善行と呼び、橋を「白善橋」と名付けた。

その後彼女は、平壌市内の光成小学校、彰徳学校、崇義女学校などに広い土地を寄贈して民族の啓蒙と青少年の教育に寄与し、さらに平壌の中心部、大同江のほとりに立派な公会堂を建て、朝鮮人のみが利用するようにした。

この公会堂は今日白善行記念館として大切に保存され、朝鮮人民の愛国心を育む重要な教育施設の一つとして利用されているだけでなく、国宝に登録され、国家的な関心のもとに管理されている。

伝　　説

平壌の悠久な歴史

檀君の王宮——柳宮

朝鮮民族の始祖檀君についてのさまざまな伝説はすべて、檀君を神聖視した古代朝鮮人により作り出されたものである。

『檀君の王宮』もそうした伝説の一つである。

檀君が古朝鮮国を建てて平壌を国都に定め、国王に推戴された日のこと。

その時はまだ国王の居住すべき王宮はなかった。そういうわけで即位後のその日も王は住み慣れた麗しい牡丹峰の明るい山腹にあるわが家で夜を過ごすことになった。

その夜、臣下たちは、檀君が国を建て、国王となったのだから、華麗な宮殿を大きく建てなければとして協議し、翌朝、そのことを建議すべく、檀君の住居を訪れた。

ところがなんとしたことか、大同江の岸辺から檀君の住居に通じていた小道はなくなって、幅の広いすっきりした長い土の階段が牡丹峰の中腹まで作られており、元の住宅は消えてなくなり、その場に柳の木に囲まれた壮麗な宮殿が建ち、周辺の

草原にはオノオレカンバの樹林が広がっているのである。
　夢かとばかりに驚き、目をこすりつつ階段を上がりながら見ると、オノオレカンバの樹林の中に虎や熊、鹿、ノロ、牛や羊が見え隠れし、しかもそれらは仲良く遊んでいるのである。
　檀君もその樹林の中で、何か深い考えにふけりながら散策していた。
　臣下たちは檀君に近づき、「これは一体どうした訳ですか」と聞いた。
　檀君は、餌を求めて近寄る鹿の首をなでながら答えた。
「わたしも訳が分からない。夕べ夢の中に天神が現れ、国の王になったからには、それにふさわしい宮殿がなければならんではないか、と言って姿を消したのだが、朝目が覚めてみると、みすぼらしいわが家は影も形もなく、こんなにも立派な宮殿が建っていたのだ」
　訳を知った臣下たちは天に向かってひれ伏し、「有難うございます。有難うございます」と繰り返し、自分たちが前もって宮殿を建てなかった非礼を詫び、天神が自分たちに代わって宮殿を贈ってくれたことに深く感謝した。

「天地の総領宮」

　檀君の宮殿については、今一つの似たような伝説がある。
　檀君は建国後、たびたび騏驎にまたがって天界に昇り、国を治めている状況を天帝に奏上していた。

そうしたある日も檀君は、天界に昇っていたが、その日、檀君の居住地であった錦繍山の牡丹峰は深い霧に包まれていた。

ところでその霧濃い檀君の住宅の辺りでは、人夫たちの何か重量物を運ぶ「よいしょ、よいしょ」という掛け声や石を加工する音、木を切る音などが夜遅くまで続いていた。

翌朝。

牡丹峰の山腹に思いもよらぬ華麗な宮殿が建ち、朝日に照らされてまばゆく輝いていた。

檀君の臣下たちが驚いて駆けつけてみると、高さ 30 メートル余の青い石造りの宮殿が建っており、門楼には青い石造の壁体に「天地総領宮」と刻字された銀色の扁額が掛かっていた。

華麗壮大な宮殿が忽然と現れたことに目を見張り、大喜びしながらも、彼らはあえて宮殿に入ることをはばかり、門外にたたずんで檀君がいっときも早く天上から帰り、宮殿に入るようにと待ち望んだ。

その時、宮殿の中から檀君の侍従が現れ、早く中へ入るようにとの檀君の指示を伝えた。

「え？王はいつお帰りなされたのだ」

二度びっくりした臣下たちは、侍従の後に従って宮殿に入った。

殿内の柱も壁も床もすべて、すがすがしくもまばゆいば

かりの青い石で造られていた。彼らを迎え入れた檀君の衣冠束帯も明るくきらめいている。
一同は天上の宮殿にいるかのような錯覚にとらわれて目をこすり、檀君の前にひれ伏し、しばらく呆然と王を見上げていた。
やがてその一人がこの驚くべき出来事がどうして起きたのかと尋ねした。
「王は天上からいつお帰りになり、この宮殿はまたどのようにして生じたのでしょうか」
檀君は大様らかに笑い、長いあごひげをなでながら言った。
「昨日、天上に参上した時、天帝がもう国を建て、国王になったのだから、宮殿を建てないでは国体も立派に保たれないだろうと申されて、わたしをある所へ連れていかれたのだ。その一帯には宮殿が立っていたが、それらのうちの気に入ったものを一つ選ぶようにと申された。それでこの宮殿をと言うと、天帝は直筆の門札を宮殿に付けて下さったのだ。その後、宮殿の中へ入ってみるようにと申されたので、扉を開いて中に入り、内部を見て歩いていると、いつの間にか宮殿ごとここへ下りてきていたのだ」
この話を聞いた一同は感激し、再び檀君の前にひざまずいて歓声を上げた。
「天上におられる天帝様がお助け下さっているのです

から、わが国は永遠無窮に繁栄を続けることでしょう」

檀君の宮殿がこのように建てられてから国力はいよいよ強大になり、数百年の後にも周辺の国々は、世に二つとない檀君朝鮮のこの宮殿を見て驚き、あえて古朝鮮に手出しをしなかったという。

紅　山

紅山は平壌市江東郡の大朴山から西南方に伸びる山並みの端に立つ低い山である。遠い昔から草木がほとんど生えないはげ山だとして、紅山とか赤い山とかと呼ばれてきたのである。

この山がはげ山になっていることについては、次のような伝説がある。

檀君がパクタル族の首長の子に生まれ、いつしか10年の歳月が流れた年の早春のある日、父親は幼いわが子を呼んだ。膝を折り、かしこまって座っている檀君を見詰める父は喜びにあふれていた。どのように見ても10歳の子とは思えないほど大人びている。満足した思いで、紅顔のわが子の頬をなで、壮健なその体を強く抱きしめてやりたかった。

とはいえ、彼はそんな気持ちを一切おもてに表さず、きびしい表情で言った。

「男子10歳ならば小さい歳ではない。とりわけお前は将来大事を成し遂げるべき人間だから、それにふさわしい

文武を身に付けるために励まなければならぬ」

「はい、分かりました」

「それ故、これからは庭の中で弓術や剣術を鍛えてばかりしていないで、わしが選んだ場所で寝起きしながら修業するがよい。ただし、秋になって、修めた武芸がこの父親を満足させるほどのものでなかったら、家へ帰ろうなどとするではないぞ」

「良く分かりました」

檀君はわが子を伴い、あらかじめ選んでおいた修業場へ出掛けた。

そこは、こんにち紅山と呼ばれている山だった。背方には高い大朴山の山並みが屏風のように伸び、前方には清い水がくねり流れる、低い丘陵地帯をなす紅山は大して険しくはなく、武術の修業には打って付けであった。

この日以来、幼い檀君は、父親の深い志を胸に秘め、必ずやその期待にこたえるべく武芸を物にし、秋には父親をきっと驚かさずにはおかないとの覚悟を固めた。彼は人影一つ見えないさびれた山中で寝起きしながら、山や野に草が芽生えていない早春から緑の濃い夏季を経て、もみじの散る晩秋まで、うまずたゆまず修業に励んだ。

檀君の修業ぶりを見ようとして山へやって来た人たちは、彼の見違えるほどの上達ぶりに舌を巻いた。

秋の暮れ、彼は自信満々としてわが家に帰った。

「お父様、１年間に鍛えた腕をお見せしたくて参りました」

「じゃが、この家の庭ではお前の腕の上達ぶりを知るよしがない。修業場へ行って見ることにしよう」

現場へ来た父親は、まず修業場を見て回ろうと言い、黙々と山をずっと踏んで歩いた末、わが子を振り返った。

「お前はなんで修業に身を入れなかったのじゃ」

「……?!」

どうした訳かと首をかしげるわが子を、父親は厳しくとがめた。

「お前が最初ここへ来た時、草が生えていたのか」

その頃はまだ春先のことで、もちろん草は生えていなかった。

「生えておりませんでした」

「ならば、なぜ今ここに草が一面に生え残っているのじゃ」

膝の上まで草が伸びている修業場を指して言う言葉に、檀君は夏の間に生えたのですと無心に答えた。

「それなら、武術の修業を目指すお前の意志はこれらの草に及ばないということではないか。草はお前の馬のひづめに踏み付けられながらも、こんなに大きくなったのだから、お前が怠けはしなかったとどうして言えるのだ」

檀君は一言も返せずうつむいた。

「武術を修めるのは、その技を習得するためだけでなく、それを通して勇猛心と不屈の意志を養うためなのだ」
父親がなぜ叱責したのか、その真意を悟った檀君はうなだれた。
「お父様、私の考え違いをお許し下さい」
こうしてそのまま一人山に残った檀君は、何日もの間眠ることができなかった。
「結局ぼくは、草の伸びる勢いにも勝てず怠けていると言われる羽目になった」
彼は深く自らを恥じ、来年は修業場に一本の草も育たないようにしてみせると固く心に誓った。
こうして彼は、吹雪のすさぶ厳冬のさなかにも馬術の修練を続け、春の到来とともに、山の尾根やふもとに芽を吹き始めた草まで踏みしだきながら馬を走らせた。一日の訓練を終えて夜床についてからも、草が芽生えているのではと思っては、がばと跳ね起き、修業場に馬を乗り入れた。
こうした甲斐が功を奏して、春が過ぎ、青葉の茂る夏が訪れても、修業場には馬のひづめにしだかれ踏みにじられて一茎の草も見られず、赤茶けた土ぼこりと白い石粉が山の尾根に落ちて積もるほどになった。
いっときとして休まず続けた檀君の真剣極まる訓練は遂に実を結び、秋を迎えた修業場には一茎の草も見られなかった。

秋のある日、檀君の父親はわが子の上達ぶりをじかに確かめるべく、山へやって来た。

尾根の上に立って、そよ風に土ぼこりを上げる赤茶けた山を踏んでみて、父親は満足し、顔がほころびた。

「こんなに山が赤くなったのを見て、わしも嬉しい。今やお前の意気込みが少しは理解できるようじゃ」

父親は同行した人たちを見回した。

「わが種族の将来を担って立つ人材が育ったのを見て、これ以上の誇り、喜びがまたとあろうか」

檀君はその年も家へ帰らなかった。

このように檀君が不屈の意志を固め、大志を貫こうとして、何年もの間うまずたゆまず馬を駆け、馬術の練磨に励んだ結果、山はまったくのはげ山になってしまい、今日に至るまでも草木はほとんど生えず、赤い山とか紅山とかと呼ばれているのである。

檀君湖

檀君湖は江東郡にあるさして大きくない湖である。

湖底の岩のほらの中から湧き出る泉水によって出来た天然の湖で、夏場の水は清くてすがすがしいし、冬も凍らずに温かく、年中水量に変化はない。

遠い昔から清く深いこの湖には、大小さまざまの魚が群れ泳ぎ、また鳥やけものが水を飲みに湖畔につどい、四季

湖の景色に彩りを添えている。

　この湖が檀君湖と呼ばれるようになったのは、彼がここでしばしば舟に乗って遊び、ひいては、ここに集まるけもののの生態や生活を観察しては、領土拡大の奇抜な策略を編み出していたということに起因している。

　その一つに次のような伝説がある。

　近隣に住む魔鬼族を併呑する策略をめぐらしていた檀君はある日、この湖で舟に乗り、静かに櫓を漕ぎながら深い考えにふけっていた。

　水上にはカモの群れが降りて魚を捕って泳いでおり、岸辺の岩の上や森の中では鳥がさえずっていた。

　本道に通ずるその小道の際には檀君の思索を妨げるような人の出入りを取り締まるべく近侍が控え、そのかたわらには檀君の愛する猟犬がうずくまっていた。

　朝日はいつしか中天にかかって輝き、檀君の思索も深まっていく中、湖辺の静寂はいっそう増していき、向こう岸の草原ですだく名の知れない昆虫の鳴き声もかすかに聞こえるほどだった。

　その時、本道の方からひづめの音を大きく立てながら騎士が一人馬を走らせてきた。

　そのけたたましい音に驚いて、水上で泳いでいた数十羽のカモの群れが一斉に飛び立ち、のどかにうずくまっていた猟犬もさっと立ち上がり、近づく馬に向かって激しく吠

えたて、湖の静寂は瞬時にして破れてしまった。

あわてた近侍は両手を広げて馬を止め、騎士に怒鳴りつけた。

「なんたる無礼な振る舞いだ」

騎士は馬から下り、片膝を突いて言った。

「首長様に至急報告すべき事態が生じたのです」

「いかなる急用であれ、向こうの軍幕で待ち、さもなければ静かに歩いてくるべきではないか。ここがどこだと思い、恐れ気もなく馬を飛ばして現れ、騒ぎを起こすのだ」

「申し訳ございません。ただそれがしは首長様に至急報告せよとの上官の命令のみを考えていたもので……」

近侍が伝令を厳しく叱責している時、檀君が舟を岸に付け、何事かと尋ねた。

伝令は檀君の前に進み出て一礼した。

「魔姑城から伝えられた情報によりますと、わが軍が魔姑城を攻撃すると知った魔鬼族の軍隊が万端の準備を固め応戦の構えを見せているとのことです。このような状態で軍を進めるべきかどうか決断がつかず、首長の指示を受けてくるようにとして、上官がそれがしをここへつかわしたのでございます」

「うむ、やはり思った通りだ。わしはそれを見越して対策を練っていたのじゃ」

その言葉を聞いた近侍が伝令をなじった。

「どうだ？おぬしがどんな過ちをおかしたか分かったろう。首長がそのような事態を見越されて、今対策を練っていらしたのに、こんな騒ぎを起こして、大事な思索を乱してしまったじゃないか」
「はい、まことに申し訳ございません」
伝令は地に頭を付けて、平謝りに謝った。
「よい、よい。この伝令はわしの構想をぶちこわしたのではなく、素晴らしい妙策を思い付かせてくれたのじゃ」
訳が分からず自分の顔を見上げている両人を代わる代わる見て、檀君は言葉を続けた。
「その方がこの湖に向かって一散に馬を飛ばしてきた勢いに驚いて、カモの群れは自ら飛び立ってどの方へ逃げ、この犬は何に向かって吠えたのだ」
伝令は質問の意味が分からぬまま、自分の見た通りのことを話した。
「この犬は私に向かってまっしぐらに走ってきて吠え、カモの群れはひづめの音を避け、あの北の方へ飛んでいきました」
「うむ。それならこの犬をぶち殺すにはどうし、飛び立つカモの群れを射ち落とすにはどうすればよかろうか？」
やっと檀君の質問の意味を悟った伝令は、力強く答えた。
「襲い掛かるけものは後頭部を叩き、飛んで逃げる鳥どもは立ちはだかって矢を放たなければなりません」

「そう、その通りだ。それこそが正面から向かってくる魔鬼族を打ち負かす方略なのだ。だからその方がわしにそのことわりを教えてくれた訳ではないか」

「分かりました」

伝令は感慨無量の思いにとらわれ、近侍は檀君の奇抜な思い付きにまたしても感嘆して止まなかった。

こうして檀君は、気勢を上げて対抗する魔姑城の敵を正面から攻撃するように見せかけながら、不意に防備の薄いからめ手から攻め入り、たやすく城を攻略して、部族の統合を果たした。

この湖で静かに練った檀君の策略は、常に戦いの勝利をもたらした。

檀君の知略は湖底から湧き出る泉のように、枯れることを知らなかったとして、この大きくない湖を人々は檀君湖と呼び習わすようになったという。

阿達泉

阿達山のふもとに湧くこの泉には、檀君に関する伝説がいろいろと残されているが、その中には次のような話もある。

熱血の青年将軍であった檀君が都を平壌に定め、朝鮮（古朝鮮）国を建てて、領土を南北両方向に広げ国を治めているうちに、歳月は止むことなく流れて、彼の頭髪も白くなった。

ある年の夏、臣下に守られて南方の地を巡察して帰る途中江東に至り、ここでしばらく歩みを止めた檀君は、馬にまたがったまま辺りの山や川を感慨深げに見渡した。

北方に屏風のようにそそり立つ山並みを背にして立つ低いはげ山は、幼少の頃からここで武術の練磨に努めた懐かしい山であり、その南方に流れる清い水晶川は、夕方汗とほこりにまみれた体を洗った川である。

麗しい思い出の深い山河、そのいずこも幼少時代の追憶のこもらぬ所はなかった。若くして大志を抱き、国を建て、領土を広げていた多難な日々、一度として来てみることのできなかった故郷の地。

檀君は懐かしい思い出の地に心を奪われ、そのまま通り過ぎることができなかった。

いつまでも故郷の山河に見入っていた檀君は、やがて臣下たちに向き直り、「このたびの巡察の日程はそれほど急を要するものではない。だから、ここを素通りしてはこの気持ちがおさまらぬ」と言って阿達山に目を向けた。そして「あの阿達山のふもとに、すがすがしくて甘い泉があるはずだから、一口ずつ飲んでいくことにしよう」と言った。

檀君は馬首をめぐらして、阿達山麓の泉に向かった。

泉に着くや、一人の臣下がいち早く澄み切った水を碧玉の器に汲んで、檀君に差し出した。

だが檀君はそれを受け取らず、「泉の水は元来本人が自

分の手で汲んで飲まないではその旨味が分からない」と言って馬から降り、泉の前へ歩み寄った。

幼い頃、何かにつけてやって来ては、かがんで飲んでいた思い出の深い水は、当時と変わりなく澄み切っていた。

水を汲もうと片膝を突いて泉をのぞいた檀君は、目を見張った。昔この泉の水をすくって飲む時は、汗に濡れ若さにあふれている紅顔が水面に映っていたが、今そこに見られる顔は白髪の老人である。その老人がほかならぬ自分であると知った檀君はわびしげに吐息をもらした。

「ああ、わしもずいぶん歳を取ったものだ。今や重要な国事を覇気に富む太子に任せ、世を去らなければならない時が来ていることにどうして気付かなかったのか」

こう心に繰り返しながら都に帰った檀君は、その夜一睡もできなかった。自分の死後の国事が気がかりだったのである。とりわけ、王位を太子に譲ってからも、これまでと同様、国が栄え、人々もみな睦まじく暮らし、誰もが国のために熱心に働くだろうかと考え続けた。

こうして夜を明かした檀君は、翌日から、わが死後の国事を思って眠れない夜は、起き出して卓に向かって座り、後の世の人たちが国の隆盛繁栄をはかって守るべき条項を一つ一つ作り始めた。

檀君はこのように心血を注いで書き上げた文を臨終を前にして全国に告示するようにしたが、これは彼が後世に

残した遺書だとされている。
遺書の内容はおおよそ次のようなものであった。
人間の心中はみな同じである故、自らの心を正しく保って、人々の心に照らし、もろびとを導くべきである。
自分を生み育ててくれた親に心から仕え、その心をもって国に尽くすのがほかならぬ忠孝である故、この道理を十分にわきまえ、国を支えるべきである。
十指のどれを噛んでも痛くない指はない故、みな差別なく愛し、互いにいがみ合うことがないようにし、家庭は睦まじく、国は泰平を保たなければならない。
牛と馬のまぐさが別々に分かたれている故、人もおのおの譲り合い、互いに奪い合うようなことをせず、一家の暮らしを豊かにし、国の富強をはかるべきである。
飛ぶ鳥もつがいがある故、男女は放蕩な生活を避け、一度結んだ配偶者を生涯変えることなく暮らすべきである。
力の弱い者も地位の低い者もみな同じ国の民である故、みくびりも、さげすみもするべきではない。
他人がいてこそ自分が生き、自分がいてこそ他人も生きる故、邪心を起こさず、人を敵視せず、いわんや殺意を抱くべきではない。
山川草木の中に人間が食べ、使うものが生じ、人間が使役する家畜も生きる故、万物を愛するべきである。
以上のような内容をしたためた檀君の遺書は、何千年も

の間湧き続けている阿達泉とともに、子々孫々人々の心を温めながら語り伝えられたと言われている。

馬の墓

大朴山の清渓谷には、馬の墓と呼ばれている大きな土まんじゅうがある。

この墓は、檀君の愛馬の墓だと言い伝えられているが、そこには次のような伝説がある。

檀君の死後、そのなきがらは遺言により、江東の地に埋葬された。

臣下たちが数日間にわたる葬儀を済ませて帰った日の夜、宮殿内で大きな騒ぎが持ち上がった。

檀君の死後、一切まぐさを口にせず、しょんぼりしていた檀君の愛してやまなかった騏驎が、葬儀を終えたその夜姿を隠してしまったのである。

檀君の後をついで即位した夫婁は驚愕した。

（その馬はただの馬ではない。父王に仕えて建国に尽くした功績は言うに及ばず、世にも稀な名馬、国の宝である。それを失うとは……）

騏驎の管理役を呼んだ夫婁は、どんなことがあっても馬を見つけてくるようにと命じた。

王命を受けた役人は、国の各地に部下を送り、自分自身も捜索に奔走した。

ある日、江東に騏驎らしい馬が現れたという情報が入り、彼はすぐ当地へ駆け付けた。

村人たちの話によると、馬は日中人の目を避けて山中にひそみ、日が暮れると、人々の寝静まる深夜檀君の陵に現れ､前足で土を掻きながら悲しげにいなないているという。

あるじを捜す騏驎の鳴き声を聞くと､自分たちの胸も掻きむしられるようだと語る彼らの話を聞いて心を痛め､陵のかたわらに馬の仮小屋を建てたが､何日経っても馬はそこへ入らなかった。

その数日後のある夜､また馬の悲しげな鳴き声がしたかと思うと、檀君陵の上に青白いひとだまが漂い、夜明けまで消えなかった。そんな出来事があってから、檀君陵のかたわらで鳴く馬の声はもはや聞かれなかった。

また馬の行方を捜し始めた役人たちは､陵の東の阿達山のふもとで、騏驎のくつわと鞍を発見した。

彼らは､馬を見つけて連れ戻すことは出来なくなったとして嘆き悲しんだ。

そんな有様を見かねて、村の年寄りが慰めた。

「それは､今となってはどうにもならぬことと思えますわい。檀君陵に現れたひとだまが消えた後、あの阿達山の頂に毎晩それが見られるようになったのは､山の神になられた檀君大王様に､その騏驎が仕えていることを語るものではないでしょうか」

この言葉に気を取り直した役人は宮殿に引き返し、その間のいきさつを夫婁王にありのままに報告した。

「私どもは職務を怠り、国の大事な宝を失ってしまいました。この罪は万死に値します」

じっと押し黙り、彼らの持ち帰った馬具を見つめていた夫婁王は、やがて顔を上げ、静かに言った。

「これはその方たちのとがではない。死んでも大王に仕えようというその馬の至誠をどう妨げえようか」

続けて夫婁は、檀君陵の近くに大きな墓穴を掘ってこのくつわと鞍を埋めるようにと命じた。

こうして檀君陵からさして遠くない清渓谷に麒麟の墓がつくられることになった。

墓が出来上がってから毎晩その上にひとだまが漂っては、次第に阿達山の頂にまで届くのが見られたが、それは馬の魂が夜毎、墓から抜け出して阿達山に昇り、山神となった檀君を乗せて、国の隅々まで見て回れるようにするためだと信じられた。

阿達山の山鳴り

檀君を天が下した偉人としてあがめていた古朝鮮の人たちは、檀君が死後も山の神となって国のまつりごとを助け、人民の安全を守ったと語り伝えた。

昔、阿達山に近い村に、小作をもって暮らしを立ててい

る朴という姓の老人が暮らしていた。

　実直で気丈夫な彼は、苦しい野良仕事に精を出しながらも檀君陵と阿達山が汚れるようなことがあってはと、毎日のように見て回り、手入れをしていた。

　ある日の夜中、床が不意に揺れぎしぎし音を立てるのに目を覚まされて、彼は起き上がった。けれども部屋のどこでそんな音が鳴っているのか、まるで見当がつかず、外へ出てみた。

　耳をそばだてながら暗がりの中を一歩一歩進んでいくと、なんと阿達山のふもとにまで来ていた。

　怪音は山鳴りで、そこでは地面が揺れ、茂みの巨木もざわざわ枝を鳴らしている。

　不思議な事もあるものだと思い、そこに立って様子をうかがっているうちに夜が明けた。すると山鳴りは止み、辺りは静かになった。

　老人はこの時になって、当地方に阿達山が山鳴りを起こすと、侵略軍が攻め込んでくるという言い伝えがあることを思い出した。

　老人は早速村の長老に昨夜の山鳴りの話をし、侵略軍が押し寄せるに違いないから、防備対策を立てようと言った。

　他の老人たちも不思議な音を聞いたとして、朴老の意見に賛成し、ひとまず村の若者たちを武装させて邑城に送ろうということになった。

村中がこの事で立ち回っている時、黄地主が現れ、日があんなに高く昇っているのに、なぜ野良へ出ないのか、早く出て働けとせき立てた。

朴老は、昨夜阿達山が揺れ動き山鳴りがしたとして、詳しい説明をしたが、地主は耳を貸そうともせず、「山鳴りがどこでしたのだ。お前たちが陰謀をたくらんでいることを知らずにいるとでも思っているのか。けしからんことを考えず、今すぐ野良へ出て働かないと、畑をみんな取り上げ、お上に訴えて牢獄にぶち込んでくれる。いいか」

地主の強圧に抑えられて、村人たちはその日防備対策を立てることができなかった。

ところが、その夜も阿達山の山鳴りが繰り返されて、村人たちは眠りを覚まされ、心配しいしい夜を明かした。

朝、朴老は再び村人を集めて、「われわれが土地を取り上げられて獄につながれるとしても、それは次のことで、何はともあれ侵略軍を撃滅することが第一だから、みんなして邑城へ行きましょう」と訴えた。村人たちは男女老若を問わずみな武器をたずさえて城に向かった。

彼らはこのように守りを固めたおかげで、侵略軍をたやすく撃破することができた。

この出来事があった後、黄地主の心中は穏やかでなかった。自分は山鳴りを聞かなかったのに、小作人どもはなんでその音を聞いたなどと言ったのか。

心のねじけたこの男はどうにも我慢がならず、郡守（郡の長官）を訪ね、朴某の行動がどうも怪しい、明らかに敵軍と通じている、さもなければ外国の軍隊が攻めてくることをあの無知な百姓がどう知り得たろうかと、もっともらしく訴えた。

こうして朴老は直ちに監営に引き立てられた。

「お前は敵軍と内通していることに相違ないんだ」

「なんとおっしゃられます。野良仕事以外のことは何も知らない私ごとき者が、どう敵軍とつながりを持つことができましょうか」

「では敵軍が攻めてくることをどうして知ったのだ」

「阿達山が何日も夜中に山鳴りをして知らせてくれたのです」

この時、かたわらに控えていた黄地主が口を挟んだ。

「こやつ、ありていに申し上げろ。わしには耳がないとでも思っているのか」

朴老は、国が危険にさらされた時、そのことをなんら気にもかけずにいた男が、自分を罪におとしいれようとしていると思うと、むらむら怒りがこみ上げた。

「あんたが両耳を持ちながらもそれが聞こえなかったとしたら、きっと檀君様はあんたをご自分の子孫だとは考えておられないのだろうと思えますわい」

「な、なんだと？」

「じゃあ、どうして檀君神は私どもの耳には聞こえ、あなたの耳には聞こえないようになされたのでしょうか」

朴老のこの反駁に傍聴に詰め掛けていた村人たちは快哉を叫び、黄地主をあざ笑った。

いかに財産が多く、権勢を誇っている地主も、顔を真っ赤にして口をもぐもぐさせるばかりだった。

この物語は、国が戦雲に急を告げるたびに、阿達山の山鳴りが起こるという伝説として語り伝えられてきた。

興富洞の由来

牡丹峰の最勝台に立って北側のふもとを見下ろすと、牡丹峰から伸びる低い屋根の下方の大同江のほとりにこぢんまりした村が見えるが、これが今の興富洞である。

この村には、次のような伝説が残されている。

高句麗がその首都を鴨緑江中流のほとりの国内城（現中国の集安）に置いていた頃のこと。国王は一人の臣下を呼び、次のような指示を与えた。

「わが国の首都を南方に移すべきだが、言い伝えによると、平壌はかつて朝鮮国の都であり、国土の地脈の骨幹をなす土地であるばかりでなく、山河は麗しく地味は肥沃で、人々の暮らし良い所だったという。しかし長い歳月が流れて、今ではそれがどこにあるのか知りようがない。その方が南方を踏査し、平壌の位置を確かめてくるがよい」

臣下は直ちに旅の支度を整えて国内城を後にした。鴨緑江を渡り、清川江を越え、険しい山々を見て歩き、広い野をさまよいもした彼は、ある日、小高い山の上に立って汗を拭い、前方を見渡した。その眺めの素晴らしさに、彼は目を見張った。

青々とした大河が滔々と流れ、北方に山の峰々が延々と連なり、その前には広々とした平野が横たわっている、国都として打って付けの地勢である。

（この地が平壌ではなかろうか？）

こう思って山を下り、人家を訪ねて川のほとりを歩いた彼は、少し先に一軒の農家があるのを見て、案内を請うた。

「この一帯の地名はなんと呼ばれているのですかな」

「ここは昔から平壌と呼ばれています」

「ほう。やはり平壌だったわけだ。とうとう平壌を探し当てることができたわい」

彼は大喜びし、いぶかしげに自分を見つめる家のあるじに、平壌をなぜ探し歩いたかと、その訳を話し、今やっとその平壌を探せたのだから、こんなに嬉しいことがまたとあろうかと言った。

彼はあるじに器に一杯の水を所望した。あるじは部屋へ入り、大杯を手にして戻ってきた。

「そんなにも貴いお客様をおもてなしできるほどの財力はありませんが、この杯であの泉の水なりともお飲みに

なり、喉をさっぱりおうるおしになって下され」
　杯を受け取った王の臣下は、家の前にあるきれいに澄んだ泉の水を汲んで飲んだ。
　ところがなんと、それは水ではなく香りの良い酒だった。しかもその一杯の酒により、全身に爽快な気運がみなぎり、旅の疲れがすっかりいやされた。
　その後の数日間、平壌の地勢を見て歩いてから国内城に帰った彼は、国王に具体的な報告をした。
　王は、平壌の農家のあるじが出してくれた杯で泉の水を汲んで飲んだところ、それが香りの良い酒だったという話を聞いて驚嘆し、喜びにあふれた。
「うむ。平壌こそわが国都に最もふさわしい土地だ」
　こうして高句麗の都は平壌に移されたが、平壌の農民が王の臣下に大杯を与えて泉の酒を飲ませたとして、その村の名は興杯と呼ばれ、時代の流れの中で、いつしか興富洞と称されるようになった。

東明王陵で両班にひと泡吹かせた百姓

　平壌にある東明王陵は高句麗の始祖王高朱蒙の墳墓で、昔から当地の住民は陵の手入れと管理に最善を尽くしていた。
　ところが、朝鮮封建王朝時代に至り、事大主義に色濃く染まった朝廷をはじめ両班ら支配階級は、祖先である高句麗

始祖王の陵の管理を次第におろそかにするようになった。
　そのことで誰よりも心を痛めていたのは、陵の付近に住む農民たちであった。
　ある日、一農民が陵に近い畑で草を取っていた。
　昼時、馬にまたがった両班（貴族）が幾人もの下僕を従え、陵の前を通りかかった。
　これを見た百姓は袖をまくって働いていた格好そのままで、手鍬を片手に握り、両班の方に向かって歩き出した。
　下僕たちが止まれ、止まれと制止したが、百姓は彼らには見向きもせず、馬の近くまでやって来て馬上の両班をにらんだ。
　百姓の突拍子もない振る舞いに唖然として、両班は顔を青ざめ、口をもぐもぐさせるばかりだった。
　無理もなかった。当時、両班が馬に乗り、仰々しく従者を引き連れて道を行く時は、賎民は道のかたわらに避け、土下座するのが世の習わしだったのである。
「者ども、あれを引っ捕らえろ」
　下僕たちは、通り過ぎていく百姓を追って捕らえ、両班の前へ連れ戻した。
「こやつ、貴様は岩の裂け目から生まれた男かっ。どうして礼儀も道徳もわきまえぬのだ」
　両班は顔を真っ赤にして怒鳴った。
「わたしが礼儀も道義もわきまえていないとおっしゃ

るのですか。ならばあなたはそれをわきまえておられるのですか」
　百姓は平然として、なじるように反問した。
「なんだと？両班の通行にもかかわらず、道を避けもせず、平然とそれもこのわしの顔をにらみながら通り過ぎるのが平民の礼儀だと存じているのか」
　両班はかんかんになった。
「じゃあ、始祖王陵の前を馬にまたがって通り過ぎるのは、両班の礼儀だと心得ていられるのですか」
「始祖王陵？」
　両班は辺りを見回した。
「とくとご覧なされ。あれは大高句麗の始祖王、東明王の陵ですぞ。虫や蟻にも劣りながら、礼儀などをうんぬんするとは何事です」
「こやつ、わしが虫や蟻にも劣ると？なんたる無礼な男だ」
　両班は馬から飛び下り、躍り掛からんばかりにして百姓に詰め寄った。
「こいつ、今なんとほざいた？もう一度言ってみろ」
「あなたが虫や蟻よりも礼儀正しい人間だと、どうして言えるのです。虫や蟻までこの陵が始祖王陵だとして一匹も近づかないのに、あなたは馬を下りもせず、陵の前を平然として通り過ぎようとされている。そんな人が虫や蟻よ

りもまさっていると言えましょうか」

「……？」

両班はぐうの音も出せなかったが、下賎な百姓風情になめられたと思うと、はらわたが煮え繰り返った。けれども相手をとっちめるに足る適切な言葉が浮かばず、その目を避けて、東明王陵に視線を向けた。

陵は青々とした芝に覆われていたが、かたわらの楼や碑のまわりは人間の丈を越すほどの草が茂り、さらにその周辺はうっそうたる松の原をなしている。

あの草の茂みなら虎さえ棲みそうだし、松の木の下の枯葉の中には赤蟻が幾らでもいるはずなのに、そんな所に虫けらや蟻が一切寄り付かないなどとどうして言えようか。これは両班を愚弄する無知な百姓の出まかせに違いないと判断し、こう怒鳴りつけた。

「やい、あの草原や松林に虫けらも蟻も一匹としていないと言うのか。いいか。今あそこで蟻をたとえ一匹でも捕ったら、貴様は両班を愚弄した罪の報いで八つ裂きの刑に処せられると覚悟しろ」

百姓は顔色一つ変えず、平然として答えた。

「いいですとも。けれども一匹も捕れなかったら、どう致します」

「そんなことになったら、貴様の言葉通り、この両班が虫や蟻にも劣ると認めよう」

両班は下僕たちに向き直り、陵の周りで虫と蟻を一握りずつ捕ってくるようにと命じた。

彼らは陵の周りに散らばり、懸命に探し回ったが、一匹の虫も見つけることができず、みなしおれて帰ってきた。

「この馬鹿者どもめ。虫や蟻の一匹も見つけることができなかったと言うのか」

頭に来た両班は、自ら袖をたくし上げて草原の中へ入り、松林の中へも入って地面を掘り、枯葉を掻き回した。まげがほどけて髪がばらばらに乱れ、衣服の白い裾が千切れ、土に汚されながら、汗まみれになって探し回ったが、一匹の虫けらも見つけることができない。

「不思議なこともあるものだ」

疲れ果ててぐったり地面にへたばった両班は、ぽつりと言った。

「何も不思議なことはありませんよ。虫や蟻にも道義心があり、あえて陵を汚そうとはしないのですよ」

両班は返す言葉がなく、すごすごとその場を後にした。馬の手綱を引いて遠ざかっていく下僕たちの姿も哀れっぽかった。

やがて以上のような話が世に広がると、東明王陵を一目見ようとしてやって来る両班たちの数が次第に増え、朝廷においても事態を捨ておけず、陵の官吏役を任命して常駐させ、国の祝祭日には祭祀を執り行うようにした。

今日も、東明王陵の周辺には虫も蟻も見られないという。

伝えられている話によると、高句麗が平壌へ遷都した際、東明王陵もここへ移されたが、平壌の人たちは始祖王陵をより良く保存すべく、周辺の土を掘り出し、他地で掘った新鮮な土を蒸してそこへ敷き、蟻や害虫が棲みつけないよう、毒草を植えたという。

大城山の古墳を守る蛇

昔、大城山の近くの村に強欲な大金持ちが住んでいた。

物欲に目のくらんだその男は、財産を増やすことのためなら、どんなに非道なことでも尻込みせずに手を出した。そうした欲の余り、彼はなんと高句麗古墳の盗掘を思い付いた。

古墳の宝を盗めば天罰を受け、一家が死を免れないという言い伝えがあったが、欲に目のくらんだ男は尻込みしなかった。

彼は早速下男たちを先立たせて、高句麗古墳の散在する山へ向かった。

あれこれの墓を見て歩いた末、彼は松の生い茂った山の端にぽつんと離れている古墳に目を付けた。人目を忍んで掘るには打って付けの場所である。

日が西に傾くのを待って、彼は下男たちに墓を掘るよう指図した。

しばらく掘っていると、古墳の南側に大きな石の門が現れた。みんなしてその門を開き、ぞろぞろ中へ入った。奥には石造りの墓室が２室あった。

ろうそくの明かりに照らされた室内の模様に男は目を見張った。

やや湿りを帯びた壁面には彩りも鮮やかな絵が描かれている。美しい天女たちが雲に乗り、昇り下りして遊ぶ絵もあれば、馬にまたがった騎士たちが武技を競う絵や祝日を楽しんで遊ぶ人たちの絵もある。

怖さを忘れて、それらの壁面に見入っていた男はやがて我に返り、副葬品を物色し始めた。

そこにはひとかかえ以上もする箱が一つあった。男は下男たちを押しのけて、自ら蓋を開け、中をろうそくの灯で照らしてみた。

一瞬男の目は喜びに輝いた。

そこには黄金色の２振りの大剣が納まっており、それらの間には真珠や宝石がぎっしり詰まっている。

彼はその箱を誰かに横取りされるのではと恐れ、いち早く蓋をして用意した縄をもって固く縛り、下男たちに担がせて外へ出た。

わが家に帰った男は、宝の箱を奥の間に入れ、一切人々の出入りを禁じた。

（あの金装飾を施した２振りの宝剣を売れば、間違いな

く平壌第一の長者になれるわい)

　胸がわくわくして一晩中眠れずに夜を明かした男は、朝日が部屋に射し始めると、箱の中の宝を今一度見たくて、家の出入り口の戸をしっかり閉めてから、箱を部屋の真ん中に置き、蓋をそっと開けた。

　ところがその途端、箱の中の2振りの大剣の下に敷き詰められていた宝石の帯がぴくぴく動き、つやつやした、腕の太さのその帯が伸びて男の手首を巻き始めた。

　仰天した男は腕を振り回して帯を振りほどこうとした。ところがそれは振り離されるどころか、今度は男の全身をぐるぐる巻いて所かまわず噛むのである。

　恐怖にかられて床に倒れながら見ると、それは宝石の帯ではなく、何匹もの蛇だった。

「ぎゃっ」

　男は気が動転した。

　思いもよらぬ悲鳴に驚き、家族や下男たちが部屋に入ってみると、床には何匹もの大蛇がとぐろを巻いており、男の体には毒が回り、青黒く腫れている。

　かすかに正気を取り戻した男は、うわごとのようにあえぎあえぎ言った。

「箱を持ち出せ。元の場所へ戻せ」

　下男たちが箱の始末を始めようとすると、とぐろを巻いていた蛇はみな自ら這って箱の中へ入った。

驚きあわてた家族や下男たちは、箱を古墳に運んでいき、元通りにきちんと始末した。

それから数日経って、腫れは引いたが、男は床を上げることができず次第に痩せ細り、とうとう世を去ってしまった。

葬式の日、村人たちはみな舌打ちをして、あざ笑った。

「欲があまりにも深すぎて、とどのつまりは天罰を受けたのだ」

「世の道理もわきまえないような男だったから、先祖様の罰だけでなく、天罰まで受けたのさ」

この噂が広まってからは、あえて古墳に手を付けようとする者はいなくなったという。

神秘な普通門

平壌城の西門普通門は住民の間でいろいろと他の名で呼ばれてもいたが、その中には神門というのもある。これは神秘な門という意味であるが、その由来は壬辰祖国戦争の際の出来事によるとされている。

平壌城を占領していた侵略軍の総帥小西行長はある日、諸城門を守っている守備隊の隊長を指揮処に急遽呼び集めた。

その頃、平壌城を取り囲んでいた朝鮮の義兵隊が不意にあちこちの城門から城内に攻め入っては、日本兵を殺傷して悠々と城を抜け出すという出来事が相次いでいたが、その原

因を城門の防備をおろそかにしていると見たからである。
「今後、朝鮮軍や義兵隊が城門から攻め入るのを防げなかったら、その方どもの首がこの大刀ではねられると思うがよい。城門を守れないような部将は生きていられないと覚悟せよ」
大刀を抜き放って叱咤する総帥の剣幕に恐れをなした普通門の守備隊長が膝を屈めて床に手を突き、恐る恐る弁明した。
「普通門は閉じるべき時は閉まらず、開けるべき時は開かないのです。これをいかようにすべきか、それがしは対策に困っております」
「なんだと？その方は命惜しさにそんな世迷い言を並べておるのだろう。城門というものは、城内の人間が開けたい時は開け、閉じたい時は閉めるようになっておる。城外の者が勝手に開け閉めできるようになってはおらん」
小西行長は大刀を振り回して一喝した。
「いや、そうではございませぬ。普通門は人力を以ってしてはどうにも出来ない不思議な門です。何か妖怪のごときものが守っているのではと思えるほかありません」
守備隊長は声を震わせて言った。
「ふん、その方はおのれの卑怯なことは棚に上げて、普通門は敵方の妖怪が守っているなどと言うのか。よし、そちの首一つをはねるのは別に急ぐまでもないことだから、

予がそちに妖怪が普通門を守ってなどいないことをじかに見せた上で、その首をはねてやる」
　小西行長は大刀を鞘に納め、この手で普通門をじかに開け閉じしてみせると言った。
　ところが、わざわざ普通門に出掛けて門を開けようとしたが、かんぬきはびくともしない。
　その後、軍糧が乏しくなり、兵士たちが飢えに苦しみ出すと、小西行長は熟れ始めた田の稲を刈ってくるようにと命じた。
　けれども城門は固く閉まったままで、どうしても開かない。是非もなく城壁に穴を開けて雑兵を送り出したが、いくら時間が経っても帰ってくる者は一人としていなかった。城内の兵士たちは、普通門を守る鬼神が外へ出るなとして門を開けなかったのに、その意に反して無理矢理出ていったせいで、鬼神の逆鱗に触れて皆殺しになったと、こそこそ言い合った。
　さらにその数日後、普通門の方から義兵の一隊が攻め寄せてくるという急報を受けた小西行長は、自ら強兵を率いて出陣し、門を固く閉ざして待ち構えた。
　ところが、義兵隊のときの声とともに城門は風に吹かれる紙のように、自ら軽々と開かれ、義兵は一斉に城内になだれ込んだ。
　あわてふためいて馬首をめぐらし、牡丹峰の茂みに逃げ

込んでかろうじて命拾いをした小西行長は、腹立ちまぎれに普通門を焼き払ってしまえと命じた。
　雑兵どもが火薬を幾箱も背負ってきて、城門の前に積み上げ火を放ったが、煙は城内一杯に広がりながらも普通門には一切炎が届かなかった。
　それどころか、普通門の門楼の柱や梁の美しい丹精はその炎に照らされて燦然たる光を放ちさえした。
　これら神秘なほどの有様を目の当たりにして小西行長は気が動転し、ふらふら宿所に帰り、そのまま寝付いてしまった。
　数日後、ようやく気を取り直した彼は、普通門の守備隊長を呼んだ。
　今度こそ命はないとおののきながらやって来た隊長は、恐る恐る口を開いた。
「殿様、殿様は普通門が妖怪に守られてはいないと確かめた上で、それがしの首をはねるとおっしゃられました」
　小西行長は床を蹴って立ち上がる気力がなく、鞘をつかんだり置いたりしながらいまいましげに怒鳴った。
「そちは、普通門は只の門じゃないと泣き言を並べるだけで、厄払いをしようともしなかった。その罪だけでも万死に値するわい」
　守備隊長は真っ青になり、弁明のしようがなくひれ伏していた。

「厄払いをするなら、今日中にその対策を講じ、直ちに予に知らせるがよい。さもないと容赦せぬ。分かったか」

ほうほうの体で退散した守備隊長は、その夜遅くになって、白髪の老人を一人伴ってやって来た。

老人は部屋の周りを見回してから小西行長に目を向け、長いあごひげをゆっくりなでながら口を開いた。

「普通門は元来、鬼神とは縁もゆかりもありません。普通門はその名の通り、どこにでもある普通の門にすぎません。

普通門がそんなに不思議に見えるのは、ほかでもなく、あなた方日本の魔神が取り付いているからです。その魔神は朝鮮をないがしろにして勝手気ままに振舞っていますがね。そんな魔神に取り付かれて、あなた方は平壌城内に囲われているにもかかわらず、平壌城を占領したと勘違いしているようですが、普通門が神秘なように見えるのもそんなせいでしょう。たとえて言えば、牢獄につながれている囚人が、牢獄の門がわが家におけるように自由に開け閉めできないとして、暴れているようなものですわい」

老人のこの厳しい言葉に小西行長はもとより、居並ぶ部将たちも怖気をふるい、四肢が硬直して、互いに顔を見合わせるばかりだった。

老人はそんな彼らをさげすむように一瞥して、言葉を続けた。

「その魔神を追い出すために厄払いをしようとして供え物を準備する必要がどこにありましょう。ただ今夜のうちにでも早く平壌城を抜け出して、本国に帰ればそれまでではありませんか」

こう話し終えた老人は悠然と立ち上がり、外へ出て行った。

小西行長も部将たちも、その老人が人間なのかそれとも神霊なのか訳が分からず、茫然としてゆっくり立ち去るその後ろ姿を見つめていた。

やがて我に返った小西行長は、すぐさまあの老いぼれを引っ捕らえてこいと命じた。

しかし、老人の姿はもはやどこにもなかった。

一日も早く平壌城を出て行けと言った老人の言葉に怒りがこみ上げた小西行長は、平壌城を明け渡してなるものかと防備に奔走したが、空しい努力だった。

その数日後、小西行長がわが右腕と頼む部下の一人が、平壌の名妓桂月香の手引きで城内に忍び込んだ金応瑞将軍の手に掛かり落命した。

翌1593年1月、侵略軍は朝鮮軍と義兵隊の猛攻を受け、おびただしい死体を残して南方へ逃げ去った。

それ以来、人々は普通門を神門とも呼び、平壌地方の義兵の戦いを誇り高く語り伝えるようになった。

漂流してきた綾羅島

平壌の名所清流壁と牡丹峰を横手に見る大同江上の中州綾羅島は、その形勝に加え、いろいろと伝説も多い。

その代表的な伝説の一つが「漂流してきた綾羅島」である。

綾羅島は元々、大同江の上流成川郡の沸流江上にあったと伝えられている。

綾羅島が成川地域にあった当時、土地が肥沃で五穀が良く実り、年々豊年を迎えた。そうしたわけで近在の貧しい農民がここへ移住し、島にはかなり大きな村落が形成された。

村人たちはここで毎年豊作に恵まれていたが、両班ら当地の支配者たちがこれに目を付け、村人たちから良く実った穀物や果物、野菜などを毎年過酷に取り立てた。年々各種の名目で厳しくなっていく収奪に、村民は貧苦にあえぎ、封建支配層への憎悪の念はつのるばかりだった。

島民の膏血を誰よりも悪辣に絞ったのは成川府使（府の長官）朴某であった。彼は、1斗の穀類、1個の果物でも余計に取り上げようとして、下役たちを先立たせて家々を回り、台所や物置きを掻き回した。

村人たちは憤りを抑え切れず、陽徳や孟山の山奥から虎が現れて、朴府使を噛み殺してくれと念じ、島が成川府からどこか遠くへ流れていってくれないものかと、囁き合った。

島民のこうした怨恨や渇望が天に通じたのか、ある年の

夏、当地に思いもよらぬ変事が生じた。

雨期を迎えたその夏のある日、沸流江の上空に黒々とした雲が押し寄せて、しのつく雨が降り出した。

やがて沸流江の水は赤黒く変じて怒涛のように荒れ、島がゆさゆさ揺れ出したかと思うと、下流に向かってそろそろ動き始めた。

漆黒の闇の中を、漂流する船のように、綾羅島が濁流に乗って行き着いた所は、牡丹峰の下、清流壁前の大同江の中程であった。

夜が明けて、辺りを見回した村人たちは大喜びした。

大雨に打たれながら濁流に乗ってどこともなく押し流されている時は生きた心地がなく観念していたが、島も生命も無事であったばかりか、悪辣極まる成川府使の魔手の届かない別天地に移されてきたからである。

彼らは豪雨により崩れた家の屋根や壁を手入れし、荒れた畑も元通りに直して、新しい生活を始めた。

しかし、彼らの喜びは長続きしなかった。

肥沃な島を失った成川府使は、島を捜せとして府中の人々を駆り立てた。1年余り経ってようやくそれが平壌城の前まで流されてしまっていたと知った府使は、取る物も取りあえず島へ駆けつけた。

彼は島の人たちに、この綾羅島は成川府の管内にあった土地だ、それに住民もわが官庁の戸籍に登録されているの

だから、当然租税は成川府に納めなきゃならんとして、その間未納の貢租を早く出せと督促した。こうして島民は再び、膏血を絞られる羽目になったが、その苦労は以前とは比べようもなく大きかった。というのは、官庁に納める穀物や果物、野菜などの年貢を船や荷車に載せ、時には背負い子にしょってはるか遠くの成川まで運んでいかなければならなかったし、納入日が遅れたり、年貢の中にわずかでも変質したものがあると、いささかも容赦せず、杖刑の罰が加えられたのである。

次の年も、またその次の年もそのような状態が続くことにたまりかねた島民は、この苦境から少しでも抜け出せる方法はなかろうかと相談した末、平壌の平安監司に訴えてみることにした。

綾羅島は以前成川に属していたが、数年前の豪雨によりここまで流されてきて、今は平壌の地にある。それ故当然島は成川の管轄下ではなく、平壌府に属するべきである。したがって、国に納める租税も成川府ではなく、平安監営に納めるのが至当ではなかろうか。……

平安監司は、肥沃な綾羅島に食指が動いていた矢先だったので、島民の訴えに直ちに応じ、成川府使に綾羅島を平壌府に移せという書状を送った。

書を読んだ朴府使は驚いて平安監営に駆けつけたが、平安監司が自分より地位が高い官僚であるので、頭から拒絶

する訳にはいかず、煮えかえる怒りを抑えて平静をよそおい、綾羅島は古来成川府に属しているのだから手放すわけにはいかないと執拗に主張した。
朴府使の黒い腹のうちを見透かした平安監司は、厳しい表情をして言った。
「よろしい。どうしても平壌府へ移管できないと言うなら、今日のうちにぐずぐずせず、綾羅島を成川管内に移してしまうことだ。それが不可能なら、明日以後は平壌府の管轄下に入るから、しかとそう心得るがよろしい」
成川府使は返す言葉に窮し、島を奪われたのを悔しがりながらすごすご引き返した。
こうして綾羅島は平壌府に属し、島民は租税や貢ぎ物を平安監営に納めるようになった。

美しさで聞こえた平壌

牡丹峰に降りた天人

錦繍山中最高の峰である牡丹峰は、山勢が今まさに開かんとする花のつぼみのように美しいばかりでなく、昔から松が濃く茂って絶景をなす、平壌の誇りである。
色とりどりの鳥が集い、さえずる峰には、大昔、天女だけでなく、男の天人たちも良く降りてきて遊んだという。

雲に乗って降りてきた彼らは最勝台の松林で終日遊んでいたものだが、ある日、野良で働く農民たちの生活に興味を覚え、羨ましくなり、その中に混じって一緒に働き遊ぶようにもなった。

そんなある日、牡丹峰のふもとに住む農民の娘が原因不明の病気にかかり、長い間苦しんでいることを知った若い天人の一人が、天上の世界で使っている霊薬を求めてきて与えた。

こうして彼女の病気はすっかり治ったばかりか、容貌も美しくなり、健康な身で野良仕事に励めるようになった。

若い天人は美しい彼女に惹かれて、足繁く訪ねて行って遊び、遂には何日も天界に帰らず、農民の野良仕事を手助けもすれば、娘を伴い秀麗な最勝台に登り、楽しい時間を過ごしもした。

そんな事が続くと、天帝は彼を呼んで厳しく叱り、二度と地上へ降りていくなと申し付けた。

けれども麗しい土地やその中で労働を楽しみ、豊かに暮らす人々の生活が誇り高くも楽しいものであると感じていた彼は、天界に留まっている気になれなかった。

そこで彼は人知れず地上に降り、牡丹峰のふもとの農民の家を訪れ、結婚を申し入れ、野良仕事も一緒にしたいと言った。

快諾した農民は、結婚式を挙げた後、舟を１隻与え、大

同江のほとりの気に入った土地を見つけ、2 人仲良く暮らすようにと言った。
　新郎新婦は言われた通り、大同江の岸辺に居住地を定め、田畑を耕し、魚も捕りながら、子宝に恵まれて、共に白髪まで幸せに暮らしたという。

扇子岩

　烏灘が望まれる大同江のほとりに立っていると、蒸し暑い夏の盛りにも、とりわけさわやかな思いがする。
　この辺りの夏はこのようにさわやかであるばかりでなく、冬はまた思いのほか暖かいことでも知られている。それは朝鮮西海の温和な風が吹き寄せて、北方の寒冷な気団の南下をさえぎっているからである。
　こうした平壌の自然現象と関わって、この岸辺にある奇岩についての伝説が生まれた。
　昔、烏灘の岸に扇子岩という大岩があった。
　この岩を叩くと、岩の下から夏はさわやかな風が、冬は暖かい風が吹くという妙な現象が起こるので、人々はこれを扇子岩と呼ぶようになった。
　当地の住民は、夏季、野良仕事をする最中、蒸し暑くて汗を流すと、この大岩の上に座り、岩を叩きながらさわやかな風を起こして涼み、寒い冬は柴刈りなどをして帰る時、ここに上がって岩を叩き、暖かい風に吹かれながら一

休みしたものである。

道を行く人たちもここを通る時はしばらくこの上に座り、夏は涼しい風に、冬は暖かい風に当たって疲れをいやしたりした。

このように、扇子岩は平壌の農民や旅人にとってまことに重要な存在で、いつしか平壌の住民ばかりでなく、全国にも広く知られるようになった。

そんなある年の夏、平壌に新しく赴任した平安監司が、平壌城内の巡察に先立って、噂に聞いていた神秘な扇子岩を先に見ることにした。

評判に違わず、叩けば叩くほどさわやかな風が吹き続けることに感嘆した彼は、この神秘な岩をなんとか独り占めしたいものだと考えた。思案の末思いついたのが、この岩にくっつけてわが屋敷を建てることであった。

そうすると、部屋の中に夏は涼しい風が、冬は暖かい風が吹き込んでくる、世にこんなに素晴らしい岩はまたとなかろう。……

工事は直ちに開始された。鍬入れが行われた日、建築場に現れた監司は、早くも屋敷が出来上がったかのような思いで大いに満足し、人夫たちの基礎工事をあれこれ指図しながら見張った。

ところがそんな時に一大事が起きた。

人夫たちが土台石を置く場所となる岩のすぐ下をつる

はしで掘っている時、不意に「ぼこっ」という音がし、岩がぐいと持ち上がって、その下から爆風が噴き出した。

砕けた岩のかけらや土くれが飛び散ったのはもちろんであるが、人夫や近くに立っていた監司まで爆風に飛ばされ、辺りは朦々たる土ぼこりで覆われた。

翌日になってやっと風は収まり、土ぼこりも消えた。岩の下には大きなくぼみが出来、その底にはさらに深い穴が見えていた。

風に飛ばされた監司は腰を傷つけて、官庁に出仕もできず寝ついていたが、そのしばらく後、都の漢城に召還されていくばくもなくあえなく死んでしまった。

こんな出来事があってから、扇子岩をいくら叩いても、風は起きなかったという。

脱衣を余儀なくされる一隅

清流壁の下の大同江畔には、厳しい寒さの続く冬の最中にも、上着を脱いで歩かなければならないほど暖かい所があって、昔から脱衣隅と呼ばれていた。

その名がいつ付いたのか定かではないが、広くそう呼ばれるようになったのは、高句麗時代に平壌城を築いた頃からだとされている。

当時、平壌城の建設に従事したトゥルボという若者が工事の終了後、そこからさして遠くない村のわが家に帰る

と、村人たちが引きも切らさず訪ねてきた。

平壌城についていろいろと知りたかった彼らは、平壌の地勢、新しく築かれた城市の規模や構造、平壌の人たちの暮らしぶりについてこまごまと尋ねた。近くの土地平壌に素晴らしい城市が築城されたことに大きな喜びを覚え、さらに昔から国の興亡盛衰や人々の和睦は国都の地勢に大きく関わっていると言い伝えられていたからである。

そんなある日の夕方、タクスという名の金持ちが訪ねてきて、いろいろと質問した。

トゥルボは、彼にも平壌城の規模、構造について説明し、寒い冬にも上着を脱いで通るほかない奇妙な所があると、身振り手振りを混じえながら興味深く話した。

するとタクスは、「あんたの話はどれもみな間違いなかろうが、寒い冬にも上着を脱いで通るほかない所があるなどとはとんでもない話だ」と言った。

「とんでもないなんて……。わたしは工事の最中、何度もそこを行き来した人ですぜ」

「そりゃ、重い石をかついで歩くので、くたびれて汗をかき上着を脱ぐだけのことで、そこが特別に暑いから脱いでいるわけじゃない。そうじゃないかね」

タクスはどうだと言わんばかりに座中を見回し、ほほほと笑った。周りの人たちも、もっともな言葉だとしてうなずいた。

誰一人として自分の話を信じようとしない人たちを納得させるに足る説明のしようがなく、トゥルボはこれは本当の話だと頑強に繰り返すだけだった。

2人が、ある、ないと言い合うのを見て、人々の中で真偽を確かめるにはじかに現場へ行ってみるほかないという意見が出された。

うなずいたタクスは、では平壌見物がてらに脱衣隅なる所へ行き、じかに確かめてみることにして、賭けをしよう、あんたの話が本当なら1カ月分の食糧をただで与え、嘘だったら自分の家の仕事をひと月の間手伝ってもらう、どうだ、と。

こうして 2 人は、真冬の冬至の日に大同江の水が厚く凍っている現地に向かった。両人共に防寒帽をかぶり、綿入れを引っ掛け、足袋の上に毛皮の靴を履いていた。

彼らはひとまず平壌城内を見物し、そのあと脱衣隅に向かった。

大同江に根を下ろしている清流壁に通ずる岸辺の道に足を踏み入れたタクスは驚いた。

城内に吹き込んでいた寒風はどこへやら、肌を刺す冷気は消え失せ、体が暖まってくる。まるで温突部屋に座っているような快さである。

この不可思議な日和に唖然として、その一帯を見回したタクスは、なるほどとうなずいた。

清流壁が冷たい北風をさえぎり、しかもその壁面が大きく弓なりに湾曲していて、空から差し込むさんさんたる陽光が大地を熱しているのである。
彼はこれまで冬の道を少なからず歩いてはいたが、こんな変わった道を歩いたためしは一度としてなかった。
顔に汗がにじみ、身体がほかほかしてくる。
見ると通行人はみな防寒帽と綿入れを脱いで歩いている。
けれども賭けをしたタクスは防寒帽も綿入れも脱ごうとはしなかった。たまらない程の暑さだったが、最後まで頑張り抜こうとした。
あまり丈夫でないトゥルボはとっくに防寒帽も綿入れも脱いでいたが、肉づきの良いタクスは体中汗をかき、暑さにあえぎながらも痩せ我慢を張って、ようやく脱衣隅を通り抜けた。
トゥルボが脱衣隅はここでもう終わったと言うと、タクスは「ふうー」と吐息を突き、「どうだ、わしが勝ったろう」と言って、はあ、はあと苦しげな息をした。
「よろしい。あんたの勝ちです」
トゥルボは意地っ張りなこのけち臭いタクスに負けたと認めてしまった。
村に帰ったトゥルボは約束通り、タクスの家の仕事を無報酬で手伝うほかなく、翌日、その家を訪れると、なんと彼は床に伏せて呻吟している。トゥルボはやむなく、その

まま引き返した。タクスはその時の暑さに負け熱射病にかかったのか、それともひどい風邪を引いたのか、そのまま寝こんでしまった。

ひと月余り経ったある日、タクスが呼んでいるという知らせを受けたトゥルボは、夕方出掛けてみると、そこでは何事か祝い事でもあるのか、酒肴を用意して村人たちを招いていた。

来客たちは、訳が分からず、タクスが平壌見物から帰って１カ月余りも寝込んでいたにもかかわらず、賭けに勝ったことを喜んでか、さもなければ、頭がちょっと変になったのではなかろうかと、ひそひそ呟き合った。

部屋に入ってきて、室内のそんな雰囲気に気づいたタクスは、２度ほど空咳をして、こう挨拶した。

「このたびわたしはこのトゥルボさんと連れ立って平壌城を見物しましたが、確かに地勢が妙な所でした。脱衣隅一つを見ても、平壌城こそがまさにわが国で太陽に最も近い、国の中心に位置する地であることがはっきり分かりました。このような平壌がわが国の都に定められたのは、国が栄え、人々が泰平に生きるきざしなのです。なんという幸いな喜ばしいことでしょう。わたしは今回の平壌見物を通して感慨も大きかったのですが、他方、トゥルボさんとの賭けでは、わたしが負けたことがはっきりしました。それでトゥルボさんの勝ちを祝うべく、みなさんをお招きしたのです」

村人たちはタクスの真意が理解できたとして、互いにうなずき合った。

「平壌はそれほどにも素晴らしいわが国の都なのだ。あの強情な男が、自分の負けを認めてこのような宴を催すほどだからな」

以上のような噂まで広まり、平壌の脱衣隅はいっそう有名になったという。

大同江の錨

昔、朝鮮西海に起こる満ち潮と引き潮の影響で大同江の水は膨れ上がったり、減少したりし、平壌城の住民に危害が及ぶことが少なくなかった。

雨期の豪雨で増大した川の水が、満ち潮に流れをさえぎられると黄色く淀んだ大水がたちまちにして堤を越え、平壌城内を水浸しにしてしまうのである。

大同江の起こす異変に関わる伝説は少なくないが、「大同江の錨」もその一つである。

昔から人々は平壌城を１隻の船と見立てていた。

平壌城は南北に長く伸び、東西の幅は狭いので形態そのものが船のようであり、しかも北側は合掌江、東南側は大同江がくねり流れ、西側の城壁に沿って流れる普通江は大同江に合流するので、文字通り水上に浮かぶ船の観を呈しているのである。

それでいつの頃か平壌の人たちは、水上にある船のような平壌城が海に流されてはと危惧して大きな錨を作り、大同江に沈めたという。

この錨が初めて世に知られたのは、日本侵略軍により平壌城が一時占領されていた壬辰祖国戦争（文禄･慶長の役）の時だとされている。

日本軍は平壌城を攻め落としたが、朝鮮軍の清野戦術（城市内外の食糧、塩などをすべて隠してしまう戦術）にかかって、入城初期から食糧難にあえぎ、遂には大同江の魚を捕って飢えをしのぐ羽目になった。彼らは諸方から大小の漁船を掻き集めて大同江に浮かべ、魚を捕り始めた。

そんなある日、彼らは大同江の深い底から思わぬほど大きな錨を引き揚げた。長さ 20 余尺、太さは周 1 尺ほど、形態は底部が三つまたで頭部は環をなしている。

彼らは世にも珍しい錨を発見したとして、城内に持ち込んだ。

避難ができず城内に残っていた年寄りや子どもたちはこの噂を聞いて憤り、手に手に斧や鍬などをつかんで、日本軍の兵営に押し掛け、すぐ錨を元の場所へ戻せと抗議した。

彼らは口々に叫んだ。

「貴様らは今どんな由々しい事を仕出かしたか分からんのか。錨を今すぐ元の場所へ沈めておけ。でなかったら、平壌城が水中に沈没するか海に流されるんだぞ。さあ、ど

うだ。みんな水におぼれて魚の餌食になりたいのか」

日本軍は彼らの抗議に驚き、首をかしげていたが、平壌城の錨についてのいわれを聞き、大同江の元の場所に錨を戻したという。

清流壁

清流壁はその上に浮碧楼を持つ断崖で、大昔のある日突然生じたとして、次のような伝説が生まれた。

大同江畔のある村に、ソルという姓を持つ人の好い働き者の農民がいたが、彼には人一倍大きな心配事が一つあった。それは夏の豪雨で大同江が氾濫し、村がそのたびに大きな被害を受けることであった。

そんなある年の夏も例にもれず村は大水の被害を受けた。その時水に押し上げられてきて口をぱくぱくさせている1匹の鯉を発見した農民は、それを大同江に戻してやった。

そのあと、壊れた家をざっと手入れし、雨もりを防ぐ幕を張って寝ていると、深夜、外で誰かの呼ぶ声に目を覚まされ、戸を開けてみると、見知らぬ少年が一人立っている。

誰だろうかといぶかり、目をこすって見ていると、少年は龍王の使いの者だと言い、龍王がお呼びですから、一緒に参りましょうと促す。

農民は呼ばれた訳も分からぬままその後に従っていくと、なんと大同江の水が二つに別れて大きな道が出来、そ

のしばらく先に龍宮が現れた。

少年に導かれて中へ入ると、そこに宴席が設けられていて、龍王が待っていた。

喜んで農民を迎え入れた龍王は、あなたはわが子の命の恩人です、だからあなたの願いはどんな事であれ、お叶えしましょうと言う。

農民は、自分たちの村は大同江の際にあって、大水が出るたびに大きな被害をこうむり、みな難儀していると話した。

龍王は、良く分かったとうなずき、彼を存分にもてなしたうえで送り帰した。

帰途、不意にしのつく雨が降り出し、雷鳴が轟いた。と思うと、大同江の岸辺に屏風のような断崖が生じ、水の流れを防いだ。

こうして出来た断崖が有名な牡丹峰の清流壁である。

平壌人民の愛国心

大城山城南門の花壇

歴史の記録にはないが、伝説によると、高句麗の一時代、外交術に長けた金槐という人物がいた。

国の北方はいろいろな国と接触していた関係上、しばしばその侵入を受け、いざこざも絶えなかった。

そんな場合、金槐が談判に乗り出すと、いかに複雑困難な問題もスムーズに解消された。それで彼は早くから外交の手腕家として世に知られた。

その金槐が年を取り、間もなく引退せざるを得なくなると、朝廷は彼の後継者を養うべく、若い官僚を一人付けて、指導を受けるよう措置を講じた。

こうして若い官僚は常に金槐に付き添って動き、彼の振る舞いや外交折衝の仕方、話術などに注意を凝らした。けれども彼から他人より特に優れた外交的手腕を見いだすことはできなかった。

風采が人より優れているわけでもなければ、相手を威圧するような外貌もない。普通どこにでも見られるような人物で、顔容にもとげとげしいところがなく、目つきも穏やかで見るからに淳良な好好爺といった趣である。しかも、外国の使臣を迎えて会見をする際、前もって駆け引きの方向を模索したり、整然とした理論を展開すべく、夜を徹して言語の選択をするでもなかった。

にもかかわらず、外交折衝時に論戦が繰り広げられると、その表情は厳しくもなれば、怒りを露にしたりし、時にはなごやかな雰囲気をかもしもするのである。

外国の使臣はそんな彼の外交手腕に翻弄されて、とどのつまりはその前で屈服してしまうのが常であった。

金槐には他の官僚にはほとんど見られない特殊な趣味

があったが、それは花をとりわけ愛することである。
　外国へ使臣としてつかわされる官僚たちは、帰国時、さまざまな物品を車に積んで帰り、家産にもすれば、親戚や同僚に贈るようなこともしているが、金槐が持ち帰るのは常に1、2本の花の木であり、それもわが家や役所の庭ではなく、大城山城南門の辺りに植えていた。その中には根がつかず枯れてしまうものがなくはなかったが、ほとんどが良く育ち、年々美しい花を咲かせ、城門一帯の景色に彩りを添えた。
　一部同僚の間には、金槐が国の名にし負う外交官らしくもなく、婦女子のように花などにおぼれていると陰口をたたく者もいた。
　ある日、城門前の空き地に花を植えている金槐に、例の若い官僚が一言尋ねた。
　「何を好んでそんな苦労をなさっておられるのです」
　「これが苦労なものかね。ただ他地にはある花がわれわれの城にないと思うと、どうにも気持ちが落ち着かないのだよ」
　「気持ちが落ち着かないですって？」
　「そうなのだ。われわれの平壌城が花の1輪でも外国の都邑より少なかったり、劣るようなことがあってみすぼらしくなるのが嫌でね」
　若い官僚は深く考えもせず、ただ変な趣味の持ち主もい

るものだと思いながら、聞き流してしまった。
　彼が外交術の妙理を会得できないまま、空しく時は流れ、金槐は老衰し世を去った。そのなきがらは遺言により、南門の前方の丘に埋葬された。
　金槐の死後いくばくもなく、北方で国境紛争が生じ、相手国との談判にくだんの若い官僚が臨むことになった。
　出発を前にして、王は言った。
「その間、金槐の外交術を十分に習得したであろうから、今回の談判では彼に劣らぬ手腕をいかんなく発揮し、相手を屈服させて帰るであろうと信ずる」
　若い官僚は相手を打ち負かせうるか否か確信はなかったが、王に弱気を見せるのがはばかれ、ただ最善を尽くしますと答えて国境に向かった。
　どうすれば金槐と同様に相手を手玉に取れるだろうかと、苦慮するほどに先輩が思い返されてならなかった。
　こうしていよいよ談判を翌日に控えた日の夜、なおも思索にふけっていた彼の脳裏にふと、自分を見送ってくれているかのように優しく揺れていた大城山城南門前のとりどりの美しい花が浮かび、それらの花を植えながら言っていた金槐の言葉が思い出された。
「……われわれの平壌城が、花の１輪でも外国の都邑より少なかったり、劣るようなことがあってみすぼらしくなるのが嫌でね」

この言葉を頭の中で繰り返していた彼は、はたと膝を打って立ち上がった。

「そうだ、その心情だったのだ！平壌城が外国の都邑よりみすぼらしくなるのを嫌う気持ち！わが国がいかなる外国からも侮られたり、さげすまれたりするのは許せないという気迫！ほかならぬその心構えこそが、金槐の老練な外交的手腕の真髄ではなかろうか」

彼は熱くなる胸に手を当てて室内を行ったり来たりしながら、こう独りごちた。

翌日、彼は祖国高句麗と平壌への熱烈な愛に燃えて談判に臨み、冒頭から国境でしきりに紛争を起こす相手国の不当な行為を厳しく追及した。

相手側は弁明の余地もなく、二言、三言口をもぐもぐさせただけで、自国の非を認め、二度と再び国境で騒ぎを起こさないようにすると約束した。

国境における談判で若い外交官が勝利したという知らせを受けた高句麗王は、彼が帰ると、その功を大きくたたえた。

「さすがにその方は、わが高句麗の誇りであった金槐の外交的手腕をそっくり受け継いだ有能な外交官だ」

すると若い官僚は、頭を上げて答えた。

「こうお答え申し上げるのはいかがなものかと存じますが、私はわが師金槐の外交的手腕を学び得たのではな

く、祖国と平壌城を愛し、重要視するその精神を学んだのでございます」

こう前置きした彼は、次のように述べた。金槐が外交官として外国に行き来するその多くの日々、それらの国の特産品や貴重な物品を持ち帰ったことは一度としてなく、通りすがる外国の道のはたや山のふもとで平壌城にない花を見かけると、なんとかそれと同じ花を手に入れて国に持ち帰り、大城山城南門前の空き地に植えたものです、と。

その話を聞いて初めて、王や並み居る官僚は、金槐のずば抜けた外交的手腕のよって来るところがなんであったかを理解できたとして感嘆し、称賛した。

「彼の臨機応変の外交的手腕は、なんらかの知略や弁説の巧みさによったのではなく、祖国と国都平壌を思うその心に起因していたのだ……」

この時の話を伝え聞いた平壌城内や近隣の人たちは、金槐の生前の愛国の至情に感動して、南門前に植えられていた花を心をこめて育て、彼の墓地の周辺にはとりわけ美しく育つ月見草を植えて墓を飾った。

月見草は次第に広がり、大城山城のふもと全体に咲き誇るまでになった。外交問題を以って外国へおもむく官僚はもとより、侵略軍との戦いに出で立つ軍人たちも、大城山に咲き誇る花やそれらにこもる物語を頭に思い浮かべながら奮闘し、常に祖国の名誉と尊厳を守ったと語り伝えられている。

梅の花を守った娘

平壌の慶上谷に、麗玉という名の気立ての優しい娘が、男やもめの父親と一緒に暮らしていた。

彼女は花をとても愛し、なかでも梅の花が大好きだった。

親子がともに家の周りにとりどりの美しい花を植え、四季こやしを施し、雑草を除き、丹念に手入れしているおかげで、その草屋は春から秋にかけいろいろな花に埋まっていた。

いつしか、花は麗玉の家からさらに四方へ広がり、牡丹峰はもとより平壌城内も花の香りで包まれるようになった。

ところがある年、朝廷は全国の山野や家の庭の梅の木をすべて切り払い、今後とも民家に梅を絶対に植えてはならないという勅命を下した。

理由は、梅の花は王室の尊厳を象徴する紋章に似ている、それにもかかわらず、平民の庭に梅の花を咲かせるのは、王と平民の身分上の区別を曖昧にする許されざる行為だというものだった。

こうして国の至る所で梅の木を手当たり次第に切り払うという前代未聞の騒動が繰り広げられた。

平壌も例にもれず、監営の役人が鎌や斧を手に手に、城内の家々の梅の木を切って回った。家の庭にたとえ1本の梅の木が残っていても、その家のあるじは体罰を受け、罰金を課せられた。

朝廷と両班支配層の乱行で平壌城内の梅の木は無残に切り払われ、秀麗な山野は殺風景な様相を呈した。

ういういしく清らかな梅の花が平壌城から姿を消すことに胸を痛め、いらいらしたのは、麗玉と父親であった。

（お上のなすがままに見すごしていたら、平壌の梅はすっかり陰を隠してしまう）

麗玉は居ても立ってもいられなかった。彼らの言いなりになってはならないと決心した彼女は、父親と相談して、梅の木一本を人目につかぬ裏庭の隅に移した。

数日後、麗玉の家にも役人が現れ、前庭に続いて裏庭へも踏み込み、ひそかに移植しておいた梅の木を目に止めた。

「おいっ、国王様の勅命に背いても無事に済むと思っているのか。棍杖50遍の刑を受けたくなかったら、今すぐお前が自分の手で切ってしまえ」

役人の強迫を前にして麗玉の父親は、部屋の中でしくしく泣いている娘を思って胸が痛んだ。

（わしが梅の木を切るのは、あの子の体を斧で切り付けるようなものだ）

彼は閉じていた目を開き、沈着な口ぶりで言った。

「反発するようで申し訳ありませんが、この木は梅の木じゃなく、アンズの木です。あなた方が見間違えたようです」

役人たちはきょとんとして、顔を見合わせた。

それもその筈、人の財物を奪ったり、罪のない人に暴力

をふるったりするのは屁とも思わないやからだったが、花の木についてはまるで無知だったのである。
　実際、一定の大きさに育った梅の木とアンズの木は良く似ていて区別がつきにくい上、今この梅の枝は雪を載せていて、子細に確かめないと、玄人にもすぐには判別しにくい状態にあったのである。
　ちょっと考え込んでいた役人の一人が、棍棒を振り回しながら怒鳴った。
　「おい、これがアンズの木だということを、どう証明できるのだ」
　部屋の中でおろおろしていた麗玉が庭へ下りてきて、父親に代わり、はきはきと説明した。
　「それは春になったらはっきりしますわよ。梅の花は白いし、アンズの花は桃色ですもの。その時は誰にでも見分けがつきますわ」
　麗玉の言葉に返す言葉がなく、むしゃくしゃしながら役人は言った。
　「よし、それなら春出直してくる。その時花が白かったら、お前も、てて親も八つ裂きの刑を免れないものと覚悟していろ」
　役人たちが引き揚げると、麗玉は父親のふところに抱かれて身を震わせた。父はしゃくり上げるわが子の肩をなでながら、優しく言った。

「なんて立派な娘だ。花を愛するお前の気持ちに天も感動してお助け下さるだろう」
いつしか冬は去り、暖かい春が巡ってきた。
青空を鳥たちがさえずりながら飛び交い、谷川の水が解けてさらさら流れるようになると、木々の枝にうす緑の芽が吹き始めた。
梅の木の枝にもつぼみがつき、大きくなっていった。
麗玉の胸はおののきざわめいた。彼女は毎日裏庭へ出ては梅の木にしがみつき、肩を震わせて泣いた。
「ねえ、梅の木や、お前はあたしの気持ちを知ってくれているのかしら。白い花でなく、桃色の花になって咲いてよ。でなかったらお前もそうだし、お父さんとあたしも生きてはいられないのよ」
あくる日の朝、遂に梅の花はつぼみを開いた。ところがなんと、その色は白色ではなくきれいな桃色だった。夢かとわが目をこすって見直したが、間違いのない桃色である。彼女は我を忘れて、大声で叫んだ。
「お父さん。梅の花が、花が桃色なのよ」
庭に飛び出した父親も手放しで喜んだ。
「本当だ！アンズの花のように桃色だ」
そのしばらく後、役人たちが検分にやって来たが、桃色の花を見て一言もなく引き揚げてしまった。
「お父さん、一体どうした訳なのかしら」

「昔から、真心がこもれば石の上にも花が咲くと言われているが、花をこよなく愛するお前の真心、至誠が天に通じたのだろう」

喜びにあふれて麗玉は、前にもまして梅の木をせっせと手入れして、毎年採種をし、根分けもして、家の周りや牡丹峰に植えた。

現在牡丹峰の至る所に見られる梅の木は、当時麗玉が命がけで守った梅が繁殖したものだと言われている。

乙密将軍と乙密台

乙密台は、高句麗時代の平壌城内城の北側将台として牡丹峰に建てられた楼閣である。

ここには乙密将軍についての伝説がこもっている。

昔、牡丹峰のふもとに、乙密という勇将が住んでいた。彼は、土地の肥沃・秀麗な平壌を手に入れんものと虎視眈々として狙い、襲ってくる侵略軍との戦いで常に大きな軍功を立て、平壌城民の尊敬を受け、愛された。

歳月は流れて、彼の頭にも白髪が混じり始めた。気力の衰えを感じた将軍は、わが子のナレをはじめ若者たちの武術を指導することにした。けれどもそれは容易でなく力に余った。

考えあぐねた彼は周囲の人たちと相談し、若者たちを遠方の山中に送り、3年3カ月を期して、当地の老武芸者の指

導を受けるようにした。

ナレは出発を前にして、恋人のコビに、父の側近くに仕えて、面倒を見てくれるよう頼んだ。

若者たちが修業場に向けて出立して 2 年が経ったある日、またしても侵略軍が襲ってきた。

乙密将軍は老弱の身体ではあったが、軍隊を指揮し、城を守って勇敢に戦った。けれども形勢は極めて不利であった。

将軍のそばで戦っていた男装のコビは、もどかしさのあまり、遠くで武術の修業に励んでいる若者たちを呼び戻そうと、将軍に何度も訴えた。他の人たちも彼女の提言を支持した。

深い思いに沈んでいた乙密将軍はやがて顔を上げ、「われわれは瞬時の危機に耐えかねて一度立てた大志をないがしろにすべきではない。わが一命より祖国と人民の運命を重んずることこそ、われら高句麗人の精神ではないか。祖国と後の世代の安全に心を致す者は、われに続け」と決然と叫んだ。そして、老いの身に鞭打ち馬にまたがって長剣を振りかざし、軍隊の先頭に立って敵陣に突入した。兵士たちも奮起して勇戦したが、戦いの最中で乙密将軍は敵の矢に当たり、深手を負った。

間者の知らせで、乙密将軍が病床にあると知った敵軍は絶好の機会だとして態勢を立て直し、またしても平壌城に攻め寄せた。

烽火台にのろしが上がり、この事態は病床の乙密将軍にも伝えられた。敵の動きを聞いた将軍は、傷の痛手にもめげず、決然と起き上がり、よろいかぶとに身を固め、輿に揺られて牡丹峰の指揮処に上った。将軍は直ちに有利な山勢に依拠して軍勢を配置し、決戦を指揮した。

平壌城の軍民はこぞって戦いに決起し、押し寄せる敵兵に矢を放ち、岩石を転がして勇敢に戦った。

以外にも平壌軍民の士気がいささかも衰えていないばかりか、指揮処に再び乙密将軍が現れたと知った敵軍は狼狽したが、なんとしても平壌城を攻め落とさんものとあがいた。

激戦は牡丹峰の谷間や普通が原でも連日繰り広げられた。

ある日、乙密将軍は輿に乗り、コビら数人の配下を従えて戦場を視察した。ところが、ここで思いもかけない不祥事が生じた。

指揮処の間近にまでひそかに這い登り、木立の茂みに潜んでいた敵兵に襲われ、将軍はその刃にかかり、意識を失った。

群がる敵兵を激戦の末ことごとく打ち退けたが、将軍の意識は回復しなかった。知らせを受けて駆けつけた人たちも懸命にその名を呼び、体を振り動かしたが、応えはなかった。

この危機にあって、コビは武術の修業に励む若者たちを

呼び戻すほかないと決心した。
彼女が夜に日をついで馬に鞭打ち、修業場に到着した時、若者たちは最終の試験を受け終えたばかりだった。
平壌軍民の期待に応え、一心不乱に修業に励んだ甲斐があって、若者たちは全員上の成績をあげ、老いた師を喜ばせた。
修業場が歓声にどよめいていた丁度その時、息を切らして到着したコビは、危機に直面した平壌の状況を告げ、気を失って倒れた。
驚いたナレら若者たちは、よろいかぶとを着替えるいとまもなく、平壌に向かって馬を飛ばした。
翌日の明け方平壌に到着した彼らは牡丹峰の指揮処を見上げて、ほっと胸をなで下ろした。
敵軍はまだ撃退されてはいなかったが、わが軍の指揮処には将軍旗がはためき、周りには槍剣の刃が朝日に照らされてきらめいている。
「コビ、乙密将軍は生きておられる。あの旗を見ろ！」
勇気百倍したナレら若者たちは一斉に敵陣に突入し、獅子奮迅の勢いをもって侵略軍を撃退した。
若者たちは凱歌を上げて牡丹峰に上がった。指揮処に至った彼らは将軍の前に膝を突き、頭を下げて報告した。
「私どもは平壌軍民の意を違えることなく、修業を終えて帰って参りました」

ナレはこう言って返答を待ったが、なんの反応もなかった。

若者たちは不吉な思いにとらわれて、将軍を見上げた。

血の気の失せた顔、閉じたままのまぶた。乙密将軍はもはやこの世の人ではなかった。

ナレら若者たちは驚愕し、ただ将軍の姿を見つめるばかりだった。

この時、一人の老武将が進み出て、涙を飲み下して言った。

「乙密将軍は2日前に世を去られた。ところが将軍は、臨終を前にして、敵軍を撃破し追い払うまでは御自分の身体をここへ立てておくようにと遺言されたのだ」

彼は悲しみがこみ上げ、あとの言葉を続けることができなかった。

「父上……」

若者をはじめ居合わせた人たちは涙にむせび、将軍の名を呼びながら、その志を立派について行くことを固く心に誓った。

それ以後、平壌城には数百、数千の「乙密将軍」が育ち、城の守りを固めたので、いかに狂暴な侵略軍もあえて攻め寄せようとはしなかった。

平壌の人たちは、乙密将軍の偉勲を後世に永く伝えるべく、彼が指揮処に定めていた場所に楼閣を建て、乙密台と名づけたという。

白銀灘

白銀灘は、大同江の綾羅島と半月島の間にあった瀬で、今は砂に埋もれて両島が一つに合わさってしまった。

昔、この灘の底には白い岩が敷かれていて、その上を流れる清い水があたかも数々の玉が競い流れているかのような美しさだったという。

当時、牡丹峰の頂には、いつ誰の手により製作されたか分からないが、美しい紋様入りの大きな銀の鐘があった。この神秘な鐘は、平壌城のまたとない宝物であった。

というのは、敵兵が平壌城近くに侵入すると、この銀の鐘がひとりでに鳴り響いて危険を知らせ、また国に慶び事が生じても、鐘の音が鳴ったからである。

鐘の音は柔らかくもほのかな温かみを帯びて、人々の気持ちをなごませ、喜びを抱かせもした。

銀の鐘は国内はもとより、近隣の国にも広く知られるほど有名になった。それで、この銀の鐘見たさに、数十里の遠方からわざわざ見物にやって来る人も少なくなかったし、隣国の人たちも平壌に来ると、牡丹峰の銀の鐘を見物することが通例になった。

人々が驚嘆し、羨むこの鐘をなんとか手に入れたくて、大量の宝物と交換しようと申し出る国もあれば、なかにはひそかに兵員を送り込んで銀の鐘を盗んでいこうと企む国もあった。

平壌城の人たちは、不測の事態に備えて、清流壁の下の大同江に沈めておいて敵国の手から鐘を守り、平壌城を堅固に固めた上で、鐘を牡丹峰の元の場所に戻すことにした。

ところが、ここで一大変事が持ち上がった。

清流壁の下、大同江の底に隠しておいた銀の鐘が、どうした訳か無くなったのである。

人々は国の宝が紛失したと大騒ぎし、大同江の底を捜し回った。そのうち練光亭の前、トク岩の下の淵の中で、巨大な黒龍が鐘をくわえ下流へ引きずっていくのを発見した。

この黒龍は西の海に棲む怪物である。人々は鐘を取り戻さんものと、槍や剣を振るって戦ったが、黒龍を傷つけることができなかった。それでも鉦や太鼓を鳴らし、喊声を上げながら休みなく攻め立てたが、黒龍は一向に弱まらず、奇声を発し、速度を速めて西へ西へと逃げていく。

一部の老人や女たちは、代々受け継いできた神秘な銀の鐘を取り戻すことができなくなったとして、声を上げて泣いた。

とその時、大同江の上流からこれまた巨大な赤龍が水しぶきを飛ばしながら追いついてきて、黒龍に襲いかかった。赤龍と黒龍はもつれ合って戦い、水面上には水しぶきが上がり、それは霧のように四方に広がった。

平壌城の人たちも赤龍に加勢して黒龍を攻撃した。

激闘は3日間続き、遂に赤龍は水面上に頭をもたげ、弱り果てた黒龍を力一杯投げつけた。黒龍は血を吐き、水に流されていった。

勝利した赤龍は鐘をくわえて川をさかのぼり、元の場所に戻した。

城内では、銀の鐘を取り戻したことを喜び、同時に赤龍の手柄をたたえて、酒岩沼のかたわらで盛大な宴を催した。

平壌の人たちは銀の鐘を清流壁の下の大同江の底に保存し、その守護を赤龍に一任することにした。こうして銀の鐘は、いつまでも平壌城の人たちの宝として残されることになった。

やがて銀の鐘は白い岩に変じ、綾羅島と半月島の間の水の中に敷かれて銀白の光を放つようになったという。

乙密台の松

壬辰祖国戦争当時、平壌城の守備軍の中に普通門の近くにわが家を持つ、崔七星という若い兵士がいた。

激戦が続き、形勢が不利になると、彼は年老いた父親が気にかかり、ある日戦いの合間にわが家に寄り、日本軍との戦闘は城内でも行われるかも知れないから、早く避難するようにと言った。

父親はむっとして「なんだと？日本軍を城内に入れると言うのか」と怒り、平壌の軍隊がなんとしても侵略軍を撃滅せずにはおかないと決心せず、城を開け渡すことばかり考えているのはもってのほかだと叱った。

息子を送り返した老人は、平壌城に危機が迫っている今、いかに老いてはいてもじっとしているわけにはいかんとして、隣家に住む同じ年配の朴某に会った。

「平壌が危険だという。そうとも気づかずにのうのうとしていてよかろうか。早く城壁へ行ってみよう」

ふだん外出もままならず、ほとんど家の中に閉じこもっていた２人は、斧を握り、杖にすがって戦場へ向かった。

彼らが万寿台に立って見おろすと、牡丹峰の谷には、侵略軍と戦うべく駆け付けた城内の平民で埋まっていた。

軍人の食事を用意しているのか、あちこちの野外炊事場では煙が昇り、女たちは水がめを頭に載せて立ち回り、老人や子どもたちも石をかかえて城壁に上がり、兵士たちを助けている。

２人の老人は自分たちが後れてしまったと悔やみながら、急いで城壁に向かった。

この時、軍民の戦闘準備状況を見て回っていた義兵隊長高彦伯が２人に目を止めて、どこへ行くのかと尋ねた。老人たちは苦しい息を静め、自分たちも侵略軍と戦いたいから、槍でも剣でも頂けまいかと言った。

「御老人方のその衷情には私の胸もただ熱くなるばかりです。けれどもそれ程の御老体ではどう武器を取って戦えましょうか。御老人方が矢を射る前に敵の矢が飛び込んできます」

「わしらはもう死んでも惜しくない年ですから、敵の矢に当たっても悔いはしませんわい。それに命を落としても敵の矢を１本奪ったことになるじゃありませんか」

「わが身を盾にして矢を１本奪うんですって？」

高彦伯は豪快に笑い、「そんなことになったら、そばで戦う兵士たちが落ち着けず、そわそわしてまっとうに戦えません。どうか城壁に上がるのはお控え下さい」ととどめた。

高彦伯は口をすっぱくして説得したが２人は聞こうとしないので、やむを得ず兵士たちを付けて無理に送り返した。

２人はしぶしぶ引き返したが、途中疲れがひどく、道ばたの草原に座って休んだ。そのうちに牡丹峰に茂っている松の木がふと目に止まった。

「あれらの松の木がみなわが軍の兵士だったら、どんなに素晴らしいだろうか」

深い考えもなく無心につぶやく朴老の言葉を聞いていた崔老が不意に自分の膝を叩いた。

「あの小松にかかしのように服を着せて、敵兵にわが軍

の兵士だと見せかけたらどうだろう」
「うん、それがいい。そしたら敵は本物の軍隊だと思い、矢を放ってくるだろうから、大変な矢が手に入ることになる」
「それだけじゃない。わが軍が小勢だと見くびる敵軍をあわてさせることにもなろう」
2人はうなずき合い、城壁に引き返して高彦伯に会った。
彼らの意見を聞いた高彦伯は大きくうなずき、直ちに一部の兵士や城民を住宅地帯に送り、大量の古着を集めてくるようにした。そしてその夜のうちに、敵陣からもよく見える乙密台の下方の広い山腹に茂る小松に服を着せ、大勢の兵士が牡丹峰に集結しているように擬装した。さらにその上、葛のつるを以ってかかしを適当につなぎ、一方の端に結び付けて引っ張ったり放したりすると、かかしの群れはせかせか動く兵士のようである。こうして夜が明けるまで小松の枝に古着を着せ終えてみると、遠くからは本物の軍隊が乙密台の一帯に集結しているように思えた。
朝、川向こうに陣取っていた敵兵は、乙密台のふもとにおびただしい軍勢がたむろしているのを見て驚き、一斉に火縄銃を撃ち矢を射始めた。
「守備軍」がいささかも動揺しないのに業を煮やした敵軍は、数百名ずつ隊を組み、交替で丸2日間銃や矢を撃ち続けた。

こうして、乙密台一帯の松はどれ一つ傷付かぬものはなく、枝が折れ、樹皮がはがれたが、日本軍の弾丸や矢の半ばは無駄に使われ、その攻撃を破綻させる上に大きな役割を果たした。

日本軍を追い払った後、城内の老人や若者たちは、毎年春と秋、乙密台にやって来て松を心をこめて手入れしたという。

王城灘

大同江の中州綾羅島のすぐ北に浅瀬が一つあるが、それは王城灘と呼ばれている。

この名は次のような伝説に由来している。

昔、日本が朝鮮を侵略した際、北上する日本軍が平壌に迫り、大同江の向こう東大院が原に陣を構えると、平壌城内は緊張した。敵軍が早くも平壌城を攻め落とすべく渡河を準備し始めたのである。

ところがこの時、空がにわかにかき曇り、しのつく雨が降りしきって、大同江が氾濫した。

敵軍の渡河がいっとき阻止されたのを見て、平壌城の人たちは、「これこそ天のお加護だ」と言い合って喜び、敵軍のぐずついている間を利用して、城壁を補強し、槍や剣を作り、軍糧米も蓄え、敵軍を痛打する準備を整えた。

そのうちに雨は止んだが、大同江の膨れ上がった水は何

日経っても引かなかった。川向こうの敵は渡河ができなくなると、東大院地帯の農家を荒らし、牛や豚を奪って腹を肥やし始めた。農民たちの惨状を知った平壌城内の軍民は気持ちがおさまらず、怒りに震え、復讐を誓った。

「奴らの油断に乗じて奇襲を加えれば成功は疑いないのだが、……」

こういう言葉が交わされている時、一老人が深い意味を込めて一言言った。

「今度の大水は大同江が怒って起こしたものだが、未だに水が引かないのは、平壌城の近くで横暴を極めている日本軍への怒りが収まっていないからに違いありません。その怒りをなだめて水を引かせるには誰か若者が一人水中に飛び込んで、許しを乞わなければならんようです」

この言葉を聞いて、1人の兵士が城壁の上に上がって叫んだ。

「みなさん！侵略軍を撃破する道が開かれるならば、どうしてこの一命を惜しみましょうか。私が、平壌城近くまで日本軍の進攻を許した罪のあがないを致しますから、今に侵略軍を撃破する道が開かれたら、私の分も加えて戦って下さるようお願いします」

彼は平壌生まれの、王孫という名の兵士だった。

若者はこう言い終わると、人々の引き止める間も与えず荒れすさぶ大同江に身を躍らせた。

すると、にわかに天地が揺れ動き、水が勢いよく引き始め、またたく間に川底の上に石橋が現れた。

平壌城の軍民はこの好機を逃さず、一斉に川を渡り、ときの声を上げて敵陣に突入した。

大同江の水が引き始めたことにも気づかず、飲み食いにふけっていた日本軍は、平壌軍民の奇襲にあって屍の山を築いた。

この戦いの後、平壌の人たちは愛する故郷の地を守るために一命を惜し気なく捧げた若い兵士王孫の功を末永く伝えるべく、彼がわが身を投じた瀬を王孫灘と名付けたが、歳月の流れの中で孫が城に変化して王城灘と呼ばれるようになった。

斧勇士

普通江の上流に沿って北方にしばらく行くと斧山という名の山がある。

この山が斧山と呼ばれるようになったのには、次のようないわれがある。

昔、平壌城内のある村に貴成という少年が洪という姓の母親を助けて貧しく暮らしていた。

幼くして父に死なれた貴成は、近くの山で柴を刈って売り、母親を助けながら大きくなっていった。かなり成長してからも相変わらず、斧を持って山を登り降りするわが子

の姿を見かねて、母親はある日こう言った。

「ねえ、柴を刈って売り歩くのは子どもや年寄りのすることで、一人前の男のすることじゃないよ。もう嫁を貰うほどの年になってまで柴を刈っているお前を見て、隣近所の人までさんばら髪の木こりだなんて言っているのよ。あたしは嫌よ。そんなことを聞くのがね」

続けて彼女は、世の人の尊敬を受けるほどの職業は無理だとしても、一人前の男にふさわしい仕事をすべきじゃないのかねと言った。

母親の言葉を黙って聞いていた貴成はこう答えた。

「お母さん、ぼくは小さい時から習い覚え、身に付けたのは斧仕事だけです。ぼくにこれ以上にうまくできる仕事はありそうに思えません。ただ一つの仕事でも立派にこなして生きていけたらそれまでで、他人の陰口が怖くて自分の好きなことを止めるわけにはいきません」

母親はわが子の主張をあえて制止しようとはしなかった。けれども内心、もう大きくなったわが子に嫁も貰ってやれず、他人に劣らぬほど立派に世に立てることもできない自分が恨めしくてならなかった。

そんな事があってからしばらくして壬辰祖国戦争が勃発した。日本軍は朝鮮全土の占領をもくろみ、漢城を攻め落とすや、直ちに平壌城をめざして北上した。

この消息が伝わるや、平壌城の青壮年は我も我もと奮い

立って義兵隊を組み、侵略軍を迎え撃つ態勢を整えた。
　貴成も、義兵隊に加わり侵略軍と戦うと母に告げた。母親は喜び、一日も早く志願するようにと言った。国の民として敵と戦うのは当然の道義、本分であるが、それにも増して、わが子が背負い子と斧を捨てて、槍や剣を握り、誇りある義兵として出で立つのがなんと頼もしいことかと思ったのである。
　わが子を送り出した母親は、その日から貴成が大きな手柄を立てたという消息が届くのを今か今かと待った。
　そうした頃、平壌の軍隊と義兵隊は城を持ちこたえることが難しくなり、一時城を明け渡し、周辺の山地に依って戦いを続けることにした。城内の老人や女子たちも避難せざるを得なくなった。
　軍隊や義兵隊が城を抜け出すべく普通門に向かったが、母親は避難する前に普通門の近くに駆けつけて、長く続く義兵隊の列に目を凝らした。槍や剣をたずさえた勇ましい義兵隊の中に混じったたくましいわが子の姿をひと目見たかったのである。
　その場に群がって義兵隊の行列を見守る老人や女たちが、わが子や夫の姿を見つけては、その名を呼んで手を取り、しっかり頑張って戦うようにと励ます光景があちこちで見られた。
　貴成の母親も、いまに息子の姿を見たら、人に劣らず誇

らしげに名を呼び、抱きしめてやりたいと考え、今か今かと待った。

ところが、長い隊伍が通り過ぎ、最後に部隊の給食を担当した炊事隊が現れるまでも、わが子の姿は見えなかった。

どうしたことだろうとそわそわしていると、不意に後ろで、「お母さん！」と呼ぶわが子の声がした。「あらっ」と喜び、振り向いた彼女はおやっと思った。

刀を腰に差し、槍を握っているものとばかり思っていた息子が、背負い子をしょっている上、牛の手綱を取り、他の手には斧を握って走ってきているのである。

「まあ、お前は義兵隊に入ってまで、斧なんかを持って歩いているの」

母親は周りの人に知られてはと思い、小声で聞いた。

「ぼくが進んでこの仕事を引き受けたんです。木を伐ったり、まきを割ったりする仕事をぼくより上手にする人がいないんです」

母親はきっと言ってやりたかったことをひと言も言えず、その場に立ち尽くして、遠ざかっていく息子を眺めてばかりいた。

わが子を見送った母親はすぐさま家へ帰り、必要な荷をまとめて、城外のある山の中へ避難した。そこではもう息子の消息を待つ考えも失せていた。義兵隊でたきぎをとったり、火をくべたりしているようでは、手柄話など聞こう

にも聞ける筈がないではないか、と。

　義兵隊の炊事を担当した貴成は、一日として休まず熱心に働いた。

　義兵たちが兵器を作り、武術の練磨に励む時、彼はまきを割り、彼らが敵軍との戦いに向かう時は、斧を手にして山の奥深くへ入っていった。

　そんなある日、平壌城に閉じこもっている敵の一部隊が北方の某地域に出撃するという通報が届き、義兵隊は途中の通路に伏兵を敷いた。

　その日も貴成は斧を手にして山に登り、うっそうと茂る樹林の中で枯れ木を探して歩いていたが、不意に近くで人々のざわめく変な音が聞こえた。立ち止って声のする方に目を凝らすと、山のふもとから日本軍の一隊が木々の間を縫って赤蟻の群れのように這い上がってきている。驚いて目を見張った貴成は、すぐ我に返って怒鳴った。

　「野郎ども！ここをどこだと思って恐れもせずに這い上がってくるのだっ」

　こう叫んだ彼は、斧を力強く握りしめ、敵兵の只中へ躍りこんだ。

　驚いた日本軍は一瞬たじろいだが、相手が一人と見るや気を取り直して襲い掛かった。

　ところが、人間一人がやっと通れるほどの木が密生した山の中では動きがままにならず、火縄銃も槍も木々にさえ

ぎられて使いものにならず、山中の動きにも不慣れな日本兵は、数が多いにもかかわらず、巨木に身を守られながら駆け回り、斧を振るう貴成の相手になれず、ばたばた倒れて屍の山を築いた。

日本兵は間者の通報で義兵隊が待ち伏せをしていることを知り、秘かに回り道をして樹木の茂った山を這い登ろうとしたのが仇になり、全滅する憂き目に遭ったのである。

日本軍が回り道をしていると知って、義兵隊がその樹林に馳せ付けた時は既に、貴成の振るう斧の餌食になり、敵兵が全滅した後だった。

訳が分からず茫然としていた彼らは、ややあって谷間で木を切っている貴成を発見した。こうして事の真相を知った彼らは、ただ炊事だけを担当し、人の目にもほとんどつかない貴成に一騎当百、一騎当千の力、胆力と勇猛心が備わっていることを知り、舌を巻いて止まなかった。

この出来事があってから、彼は義兵たちだけでなく、日本軍の間でも斧将軍として知られるようになった。

日本兵は戦場に出ても、馬にまたがり、まさかりを振るって突進してくる貴成を見ると、「斧将軍だ！」と悲鳴を上げて逃げまどうのが常となった。

遂に侵略軍を追い出し、平壌義兵隊が城内に帰還することになった日、平壌城民は総出で歓迎し、有名な斧勇士をひと目見たいと爪先立ちになって騒いだ。

よろいかぶとに身を固め、腰にまさかりを着けた名にし負うその勇士が、ほかならぬ平壌っ子の貴成だと知った人々は、わあっと歓声を上げた。

若い勇士の姿にどうも見おぼえがあると思いながらも、まさかわが子だとまでは考え及ばなかった母親は、周りの人たちの話し合う声を聞いて、はっとした。目をこすってよく見ると、間違いなくわが子の貴成である。

彼女は懸命に人波を掻き分けて前へ出た。

「まあ、あの有名な斧勇士はお前だったのね」

2人の様子を見ていた人たちは、立派な息子を持った彼女を羨ましげに眺め、口々にたたえた。

その時一人の老人が進み出て、彼女に声を掛けた。

「お宅は、どのようにしてお子さんをこんなにも立派にお育てになられたのですかな」

彼女は自分に羨望のまなざしを向ける人たちを見渡して、おもむろに答えた。

「どんな事でもただ一つ、それを投げ出さずにひたすら努めることじゃないでしょうか。そしたら家庭では孝行な息子、国には忠義を尽くす人間になれるのだと思います」

彼女はいつだったかわが子が言ったことをふと思い出して、このように答えたのである。

その後、斧勇士貴成は義兵の一人として、日本軍を南海まで追い落とす戦いを続け、大きな手柄を立てた。

平壌城の人たちは、貴成の勲功を後世に永く伝えるべく、彼が最初の戦いで日本兵を掃滅した例の山を斧山と呼ぶようになった。

ネズミのほこら

乙密台に立って南側のふもとを見下ろすと、その前に平らな広い空き地が見える。

今はなくなっているが、昔この空き地の一隅に、ネズミを祭るほこらがあった。

牡丹峰にネズミを祭るほこらが生じたのには、次のような出来事があったからだという。

錦繍山の清流壁には無数のネズミが棲んでいた。それがいかに多かったかというと、餌を求めて移動する時は、錦繍山の谷という谷がネズミで埋まったという。

ある年の夏、数万の侵略軍が平壌に押し寄せて激しい攻防戦が連日繰り広げられ、守備軍の矢が乏しくなり、兵士は疲れ果てた。

毎朝夜明けとともに攻撃を掛けてきていた敵軍が、ある朝、日がかなり昇ったのにもかかわらず、じっとして動かず、静まり返っていた。

妙な事もあるものだと不審に思い、斥候を一人出してみた。適中に忍び込み、敵兵の動きを探っていた彼は驚いた。敵兵の持つどの弓にも弦が一本もなく、太鼓の皮までもみ

ななくなっているのである。

やがて、この周辺の森林にネズミが隙のないほど群がっていることに思い至った斥候は、なる程と思った。昨夜それらのネズミが敵陣を襲い、弓の弦や太鼓の皮をすっかり食い荒らしてしまったのである。

思いもよらぬネズミの襲撃で戦力を失った敵軍は、あわてふためいて退却を始めた。

平壌城の守備軍はすかさず追い討ちを掛けて、敵軍を殲滅した。平壌城に棲むネズミの大軍も「故郷」を守って大功を立てたわけである。

平壌城の人たちは、ふだんは自分たちの生活に害を及ぼしているが、侵略軍との戦いで大きな手柄を立てたとしてこれを奇特に思い、乙密台のふもとの空き地にネズミのほこらを建てた。

彼らは祝日には毎年欠かさずこのほこらの前で武術を競って侵略軍と戦う力を養い、世々ほこらを守ったという。

平壌人民の道義心

于稜と小緋

大城山城は高句麗の古城で、これには侵略軍との戦いで勇猛を馳せた人たちの数々の物語が伝えられている。

于稜と小緋の物語もそうした伝説の一つである。

大城山の渓谷は深くて樹木がうっそうと茂り、山容が秀麗で、いろいろな鳥やけものが棲んでいた。平壌の若者たちはこの大城山を格好の修業場として武術の練磨に励んだものである。

昔、平壌のある村に于稜という若者が住んでいたが、ある年の春、有事の際、国の守りに一役買おうとの固い決意を抱いて先祖代々わが家に伝わる宝剣を背にし、馬にまたがって大城山の修業場に向かった。

城門をすぐ間近にした時、道を横切ろうとした娘が、馬を避けてたたずんだ。彼女を見て于稜ははっとし、にわかに胸が騒いだ。こんなにも初々しく麗しい娘を見るのは初めてだった。

その前を通り過ぎた于稜は馬を降り、しとやかに歩く彼女の後ろ姿を凝視した。手には数本の絵筆が持たれている。

すぐ我に返った于稜はかぶりを振り、馬に飛び乗って大城山に向かった。

修業を始めて数十日経ったが、娘の姿がどうにも脳裏を離れなかった。

ある日のこと。乗馬して山中を駆けていた于稜は、高い崖に沿って流れる小川のほとりに、大きな画布を立てて絵を描いている娘を目に止めた。

時はのどかな春の日で、青々とした山や川辺にはさまざ

まの香しいきれいな花が咲きこぼれていたが、そんな中で深い思索にふけり、鶴の白い羽のような袖を軽く動かしながら筆を運ぶ娘は、この世の人間のようではない。

首をかしげ、好奇心も手伝ってゆっくり馬をその前へ進めた于稜は、驚いて振り向いた娘と目を見合わせ、どきっとした。いつの日か平壌の城門で見かけた娘だったのである。彼は喜びにあふれた。

彼女もそれと気づいたのか、顔に笑みを浮かべて会釈した。

于稜はまたとない機会に巡り合ったとして言葉を掛けた。あなたの住まいはどこで、名はなんというのか、それにどうしてこんな遠い山の中へまで来て絵を描いているのかと尋ねた。

彼女は丁寧に答えた。

自分は平壌のどこそこの農家の娘で、名は小緋と言い、老いた母親と2人で暮らしている。父は自分の幼い頃、侵略軍との戦いで戦死した。母は自分が成長すると、大城山に入って武術を学び、いずれは父の敵を討てと言った。そういうわけでここ大城山に入ってきたが、師は道術の修業を始める前に絵を習えと言うので、森の動物が水を飲みに来るここ絶壁の前の川辺へ来て絵を描いている。……

彼女の話を聞いた于稜は、自分もここで武術の修業を行っているとして、その事情を語った。

2人はなおもいろいろとむつまじく話を交わしながら小川の岸辺を歩き、きれいな花を摘んでは交換したりして、楽しいひとときを過ごした。

日が西に傾き、夕焼けが峰々を赤く染め始め、いよいよ別れることになった時、于稜は思い切って彼女に愛を告白した。

うつむいていた娘は、促されて答えた。

わたしにはほかに異見はありませんけど、一生の重大事である結婚を親の同意も得ずに、本人たちだけが勝手に決めてもよいでしょうか、修業を終えて帰る日、双方が親の許しを得た上で決めましょう、と。

若者は彼女の言葉にうなずき、修業を終えて帰る時まで待つことにしようと言った。

こう約束した 2 人は互いに手を取り合って別れを惜しんだ。

翌日、若者は彼女への情にひかれて、きのうの川辺へ出掛けた。ところが、そこに彼女の姿はなかった。何か事情があって後れているのだろうと思いながら、馬術の練習を続けていたが、待っても待っても娘は現れない。日が傾き、夕闇が迫っても同じことだった。このようにして 3 日間を過ごした末、彼女は心変わりをしたのだと考え、恨めしく思った。

（小緋はぼくをもてあそび、だましたんだ。娘心は日に

12回も変わるというが、彼女もそんなたぐいの女だったのだ。そうだ、あれはぼくを真剣に愛したんじゃない。だからひとことも告げずに姿を隠してしまったのだ）

こう思って、二度と彼女のことを考えず、きっぱり忘れてしまおうとしたが、そうはならず、頭は重くなり、胸が痛んだ。

于稜の小緋を思う心はつのるばかりだった。なんとしても彼女に会うほかないとして何日も考えているうちに、ふとあることが頭に思い浮かんだ。

小緋は師の言葉を違えず、動物の絵を描くためにこの山のどこかにいる筈だと思ったのである。そこで、ノロの首に手紙を結びつけて放してみることにした。

彼はノロの通り道にわなを仕掛けて子ノロを１匹つかまえ、１通の手紙を人の目につき易いように、首に結びつけて放した。

成功を祈りながらも彼は、小緋への思いを振り切って武術の練磨に精神を集中し、やがて馬術の修業を終え、弓矢の練習を始めた。

弓術の練習は固定した的に次いで移動する目標へと移り、特に空を飛ぶカラスが多く群れ飛ぶ山のふもとで行った。やがて矢を次々に放って空飛ぶカラスを一気に何羽も射落とせるほどになった。

ある日、そのようにして落とした何羽ものカラスを拾い

集めた于稜は、その中の１羽の足に何かが巻きついてあるのを見た。短剣を抜いて切り取ってみると、それは小緋の返書で、そこには次のような内容が記されていた。

まず、自分の消息は一切知らせまいと決心していたが、ノロの首に結ばれたあなたの手紙を発見してみると、わたしの決心も崩れて、筆を執ったとし、自分がひとことの説明もなしに姿を消した訳を語っていた。

会えば会うほどまた会いたくなり、日々深まる恋情におぼれていては、2 人共に初志を貫くことはおぼつかなくなる、大志を果たすためには、心の苦しみに耐えなければと思って取った行為です、ですからあの日に誓い合った志を成就するまで、わたしのことはお忘れになって下さい、と。

手紙を読み終えた于稜はおのれを深く恥じた。

（ああ、彼女はなんてけなげな女性だろう。ところが武芸の修業を志して山に入って来た自分は恋情におぼれて親の念願にも平壌の人たちの期待にも背き、敵愾心も失せるほどになったのだから、このおれはなんて浅ましい人間だろう）

考えるほどに小緋の人となりに頭が下がる思いがした。

（よし、武芸の極意を会得するまで、彼女のことは一切考えるまい）

こう決心した于稜は、その日以来、武術の練磨にいっそうの精魂を傾けた。

こうして月日は流れ、3年3カ月が経ったある年の3月3日、于稜は国家が催した武術競技大会に出場した。

彼は各種目の予選競技で他者を制し、決勝競技に進出した。

この最終の競技は馬に乗って走りながら野獣を捕り、その優劣を競うものである。

于稜は馬を鞭打って山や谷を駆けたが、どうしたわけか普段見慣れていたその多くのけものが一匹も見当たらない。樹林のさらに奥深くへ馬を進めたが、そのうっそうとした山林地帯にも小動物の影さえなかったし、木々の間を走るのも容易でない。

（これでは一匹のけものも捕れずに終わるのではなかろうか）

こういらいらしながら周囲を見回していると、前方に子牛ほどの大きな鹿が目についた。

彼はしめたと思って馬を走らせ、続けざまに矢を放ったが、鹿は木々の間を右に左に抜けながら走るので、一本の矢も当たらない。

そのうち他の競争者もその鹿を見つけて何人も近づき弓矢を射るのだが一向に当たらず、みな矢が尽き、やむなく引き返してしまった。けれども于稜は剣を抜いてあくまでも鹿を追った。

（なんとしてもあれを仕留めなくちゃならん。ここで失

敗したら競技で敗北する。そしたら親に合わせる顔がなく、愛する小緋にも会えなくなる。彼女は成功した日にやって来ると言ったではないか）

彼は馬に拍車をかけて鹿を山上に追い上げた。尾根の上で鹿は逃げ場に迷い、于稜が襲いかかると崖の下へ飛び降りた。見ると崖の底まで数十丈はある。

馬を降りた于稜は危険をものともせず、崖上から身を躍らせた。深く積もった枯れ葉の上に落ちた彼は、剣で茨を切り払いながら鹿を捜した。

鹿はヤマブドウの蔓に首を巻かれて身動きひとつできず、悲しげに于稜を見上げていた。

于稜は剣を振り上げて鹿を殺そうとしたが、鹿のそんな様子に哀れをもよおして剣を鞘に戻し、両手でしっかりつかまえた。大鹿は抵抗ひとつせず、その肩に担がれた。

于稜は崖を這い上がり、馬に乗って広場に引き揚げた。

子牛ほどもの大鹿を生け捕りにして意気揚々と帰ってきた若者の姿を見て、人々は太鼓を鳴らし、ラッパを吹いて歓迎した。

その中には競技場入り口のすぐ近くに立って手を振る両親の姿もあった。

于稜は勝利者の誇りを抱いて群衆の前を一巡しながら、もしや小緋も来ているのではと注意して見たが、彼女はい

なかった。今日のこの成功を彼女は知らずにいるのか。早く彼女に会って喜びを共にしたかった。

于稜は王の前に進み出て膝を折り、問われるままにわが名を告げ、そのあと捕らえてきた鹿を差し出すべく、立ち上がり、後ろを振り向いた。

ところが鹿の姿はなく、その場に天女のようにあでやかな娘が立っている。狐につままれたのではとわが目をこすって見ると、娘は自分の名を呼びながら近づいてきた。なんと彼女は小緋である。

驚き目を見張ったのは束の間で、彼は嬉しさのあまり、王の前であることも忘れ、その名を呼んで駆け寄り、彼女の手を強く握った。

その間修業に励んで変身の術を習得していた小緋は、この日、鹿に姿を変えて谷間に現れたのであった。

王は武術の修練を積み、今回の競技で優勝した于稜と、変身の術を立派に会得した小緋に手ずから賞を授け、それぞれ高位の武官に任命した。

2人は約束した通り、自分たちの意向を親に語り、両家は共にこれを天の配剤として快く婚姻を許した。

晴れて夫婦となった于稜と小緋は、その後平壌の人たちとともに国の守りで大きな功を立て、子宝にも恵まれて幸せに世を送ったという。

幸福の門——七星門

平壌の牡丹峰の西南側に立つ七星門は、古くから幸福の門と呼ばれてきた。その由来は、辺境の地で国防に尽力したある若者の物語と結びついている。

昔、平壌城内にトルボムという若者とシネという娘が隣り合った村で暮らしていたが、トルボムは柴刈りに、シネは山菜を摘みに、幼い頃から牡丹峰に毎日のように登っていたので、いつしかお互いに親しむようになった。

こうして成長したトルボムは、しとやかで心根のやさしいシネに深い愛情を覚え、思い切って愛を告白した。

シネもトルボムに心を惹かれていた。壮健な体格、義侠心の強い彼にまさる若者はもうざらにはいないと考えていたのである。

黙ってうつむいている娘に若者は返答を促した。

シネは顔を赤らめ、それが本心なら、わが家に仲人を寄こして欲しい、この場でわたしに催促しても、わたしの一存ではどうにもならないと、穏やかに答えた。

その日の夜、トルボムの母親はわが子の話を聞いてとても喜び、翌日、早速仲人を送った。

シネの家から戻った仲人はがっかりした面持ちで、七星門の出入りもしていないような男には、たとえ娘が婚期を逸してもやるわけにはいかないと彼女の父親が答えたと言うのだった。

思いもよらない回答にトルボムはもとより、母親も茫然自失した。七星門を出入りしていないということは、武術の修業もせず、辺境の防人として国防に従事することもないような若者をあざけって言った言葉である。

実際は、トルボムにそういう志がなかったわけではないが、老母を一人残して長年わが家を後にする決心がつかなかったのである。

彼は何日も考えた末、武術の修業を行わなければと決心して母の許しを得た。シネにも会ってそのことを告げ、3 年間待ってくれるようにと言った。

修業場で師にその意向を語ると、師は大きくうなずき、「武術は国の守りに役立つ武術でなければならぬ。武術のための武術に終わってはならん」と強く言った。

トルボムは師の格別の関心のもとで、3 年間一心不乱に修業し、数日後にはわが家へ帰ることになった。

ところで当時、辺境では敵国の侵入がひんぴんと続き、国は大勢の兵士を送り込んでいたが、彼らを訓練し統率する指揮官の不足を訴えていた。

こうしてトルボムはシネに約束した 3 年を守れず、戦地へ直行することになった。

辺境の情勢は安定したが、新たな事情が生じた。国境沿いに強固な防御陣地を築くことになったのである。そうした中でシネと約束した 3 年の上に 2 年の歳月がさらに流れた。

そんなある日、防御陣地の構築に余念のないトルボムの前に故郷を同じくする一青年が現れて、シネがしばらく前に嫁に行ったという驚くべき話をした。トルボムは目の前がくらくらした。

防御陣地の構築後、トルボムは昇級して平壌に呼び戻された。従卒を従え、馬にまたがって新たな陣所に到着し、その指揮任務を引き継いだ彼は、老母一人がわびしく暮らしているわが家へ向かった。

母親は屋外の畑で草取りをしていた。馬を降りたトルボムは母親の前に近づいて深々と頭を下げた。彼女は不意に目の前に現れた武将姿のわが子に目を見張り、やがて家の中に向かって叫んだ。

「おまえっ！来たよ。帰ってきたわよっ！」

トルボムはわけがわからず、家の方へ目を向けると、中から一人の女がせかせかと駆け出してきた。ところがなんと彼女は、ほかならぬ忘れようにも忘れられない愛するシネだった。

2人は強く両手を取り合った。

「シネ、一体これはどうしたわけだ」

シネは、自分はわがいるべき家にいるだけなのに何が不思議でそんな質問をするのかと、笑って言った。母親は、トルボムが武術の修業を終えて辺境に向かった際、彼の師が訪ねてきて事情を説明してくれ、他方シネの父親は、一

人わびしくすごしている自分のことを思い、世話を焼くようにとしてシネをわが家へ送って寄こしたとして、その間の話をして聞かせた。

トルボムとシネはこのようにして幸せな家庭を築き、母親にも忠実に仕えた。

平壌の人たちはその後、武将トルボムが七星門を出入りしたせいで両人の幸せ、希望が成就したとし、幸せを念願する若者は、彼のように幸福の門――七星門を出入りして、武術の修練に励めと勧めるようになったという。

王の婿となった武士

昔、大城山のふもとに建つ安鶴宮に住む王には、目に入れても痛くないほど愛する美しい娘がいた。

王は娘が婚期に達する前から婿にすべき適任者を選ばねばと気をつかった。けれども美しい王女の夫にふさわしい品格と才能を共に備えた貴公子はどうしても現れなかった。容貌に優れてはいても、才知は凡庸であり、知能にたけても気品がない。

高官の御曹子の中には王の婿に選ばれたいとして、外貌を整え、文武共に備えた人物だという評判を広めようとあくせくする者もいた。けれども、人品と才能の審査に合格する者はなく、彼らは誰一人王の眼鏡にかなわなかった。

こうして、王の愛娘、大勢の高官の御曹子に目をつけら

れていた王女は、婚期を迎えながらも1、2年と空しく時をすごした。

そんなある日の夜、宮殿に大火事が起きた。思いもよらぬ深夜の大火は、またたく間に全宮殿を包み込んだ。

王は夢うつつに臣下におぶさり、外へ出てからぼんやりと燃えさかる炎を眺めていたが、はっと我に返り、辺りを見回して家族がみな無事かどうかを確かめたが、最愛の娘の姿が見えない。周りの者に姫はどうなったかと聞いても口を開く者がなかった。王女は宮廷の後宮に住み、侍女すらも用もなく出入りすることを許されていないほどだったので、この倉皇とした騒ぎの只中で、つい王女のことを失念していたのである。

王はわが子が後宮の中に取り残されていると知り、早く救い出せと命じたが、誰一人動こうとしない。火の手は既に後宮に移り、炎を高く吹き上げている。そんな中へ入っては生きて帰れぬと恐れていたのである。

そのことを知らぬわけでない王は、命令ではどうにもならぬと思い直し、いたたまれずに言った。

「あの炎の中へ入り、姫を救い出した者を婿に迎える」

すると静まり返っていた臣下の中から一人の武官が一歩進み出た。すがすがしい顔立ちの頑丈な体つきをした若者である。

「それがしが必ずや姫君をお助けしてまいります」

彼は全身に水をかぶって宮殿を通り抜け、後宮へ駆け込もうとした。とその時、炎を吹いていた天井が崩れ落ちた。

「ああ、もはやこれまでだ」

気力が失せ、彼は悄然として引き返した。衣服を焦がし、顔に火傷を負った武官の言葉を聞いて、王は痛嘆した。

「ああ、姫や。お前は本当に死んじまったのか」

臣下たちまでもみな涙に暮れていた時である。突然、「お父様っ」という声がした。

嘆き悲しんでいた王や臣下が顔を上げて見ると、一人の武士が引いてきた馬に王女が乗っている。

「なんと、お前はわしの娘じゃないか！」

王は、馬から滑りおりた王女を抱きながら叫んだ。

愛する娘を胸に抱き、嬉し涙を流していた王が尋ねた。

「あの炎の中をどう抜け出してきたのじゃ」

王女は、馬の手綱を取って少し離れて立っている武士を指し、「あの兵士が炎の中へ飛び込んできて、あたしを救ってくれたのです」

「なにっ、兵士が？」

この２人の言葉を聞いて、臣下たちが武士に目を向けてささやき合った。

「とすると、あの兵士が王の婿になるわけか」

「一介の兵士が王の婿になれるわけはなかろう」

王は、そんなひそひそ話を聞いたか聞かなかったか知る

よしがないが、その武士に近づいた。
「その方が姫を救い出したのか」
浅黒く日焼けした強健な体つきの武士がひれ伏して答えた。
「この私は、あの大騒ぎの中で王女を救えなかったと悲嘆しておられる陛下のお声を耳にし、後宮へ駆けつけてみると、幸いにも炎がお部屋に広がる直前でしたので、無事にお救いできました」
「ところで、その方は、わしが姫を救った者を婿にすると言ったことを聞き、救い出そうとしたのか」
「滅相もございません。そのお言葉は今初めて聞きました」
「じゃあ、その方が死を覚悟してまで姫を救おうとした時に望んだのは一体何なのだ」
「武士の努めはなんでございましょうか。生命をなげうって対外的には侵略軍を撃ち退け、対内的には国の民の生命、財産を守ることが武士の本分ではないでしょうか」
「ただ本分を果たそうとして取った行為だというのか」
「さようでございます」
「ふうむ、その方は確かにわしの婿になる資格がある」
王は、感激に身を震わせ、平伏している武士の両手を取って立ち上がらせた。
「折角のおぼしめしではございますが、私は賤しい百姓

のせがれ、庭の踏み石のような身にすぎません。どうしてこの一介の武士が王の婿になれましょうか」

「いや、そうではない。国の高禄をはむ者すら姫を救うべく火の中へ飛び込もうとはせず、婿に迎えると言ってもやっと一人が応じたにすぎない。そんな者たちの中で、どこに婿を見出せようか。その方がわしの婿となって国事に尽くしてくれるならば、対外的には敵国があえて手出しはできず、対内的に国の民は泰平を謳歌するだろうに、その方のような婿をまたどこで見出せようか。これ以上辞退せぬよう望む」

こうして、わが生命をなげうって侵略軍を退け、国の民の安全を守ることを本分として生きてきた武士が思いもかけず美貌の王女を妻にめとり、王の婿になったという。

応国橋

昔、普通江の西の方に客山という小山があった。

この小山は、西方から平壌城にやって来る旅人がしばらく休息したり、城門が開かれるまでひと寝入りするなど、常に客が絶えない山だとして客山と呼ばれるようになった。

この山のふもとの村に趙応国という人物が住んでいたが、彼には錫雲という可愛い一人息子がいた。かなりの年でもうけた子だっただけに、愛情はひとしおだった。彼は、

息子が成長して優れた人物になることを願っていたので、わが子に日常こう言い聞かせていた。

「虎は死んで皮を残し、人間は死んで名を残すのだ。お前は将来きっと優れた人物になり、世に名を輝かすのだ」

このような訓示を耳にたこが出来るほど聞かされた錫雲は10歳の年のある日、父親に向かって、世に名を上げる偉人になるために道術の修業をしたいと言った。

可愛いわが子から修業に出たいと言われ、いつ成功して帰るか先の知れない道に送り出すのを心もとなく思いながらも、わが子の将来を思い、快く承諾した。

錫雲は、世に名を成すまでは決して帰るまいと固く決心し、父親に別れを告げてわが家を後にした。

それから5年が過ぎて父親は、そろそろわが子が帰る時が来たと考え、朝夕家の外へ出て、大通りのかたわらに座って待った。

そうした日々に彼は、村に通ずる大通りの一部が大きくくぼんでいるために、雨が少し降っても雨水がたまって池のようになり、雨期の大雨の際は水があふれて道を浸しもするほどなので、道行く人が大変不便な思いをし、通行が難しいと、水が引くまで村に泊まっていくこともしばしばあることを目にした。

昔からこのように村に宿泊していく旅人が多いとして、この裏山の名も客山と呼ばれているのはよく知られ

ていることであるが、それにしても自分たちの村道をきちんと手入れせずなるがままに放置しているのは、自分たち村に住む人間が主人らしい自覚に欠けている現われではないかと、彼はおのれを省みた。そこで、自分がなんとしても人々の便をはかり、広くて堅固な橋を架けようと決心した。

彼はわが子の帰りを待ちながら、そこかしこからせっせと大石を集め、時々山から樹木を切り出したりもして、数年の間、橋材を準備した。そうした上で家財を投じて人夫をやとい、数カ月にして広く長い橋を立派に作り上げた。

荒れた道路のくぼみの上に大きな橋が出来、通行が大変便利になって大喜びした行商人たちは、わざわざ趙応国の家を訪ねて謝意を表した。彼らの挨拶を受けるたびに応国は大通りのそばの村に住む人間としての道義を果たせたとして誇らしく思い、同時に、世に名を成したわが子がその橋を渡って帰れば、親の面目も立つとして限りない喜びにひたった。

ところが、待ちわびてやまないわが子は出立後 10 年の歳月が流れたにもかかわらず、一切便りがなかった。こうして彼は、成功して帰る筈のわが子を見ることなく世を去った。

彼の死を惜しんで、一家親類や村人だけでなく橋のお陰

にあずかった他地方の人たちも喪家を訪れておくやみを述べた。

　その後村人たちは、趙応国の美挙を後の世に伝えるべく、橋のかたわらに大きな碑を建て、橋の名も、元来客山のふもとにあるとして客山橋としていたのを、応国橋と改めた。

　他方、道術を磨いて世に立つべくわが家を後にした趙錫雲は最初、有名な道場がある深山に入って武術の修業に励んだ。ところがわが家で苦労というものを知らずに育ったせいか、それとも生来素質に恵まれていないためか、訓練が苦しく、上達も人より後れた。5 年後平壌城における武術競技に参加してみたものの、どうにか最下位を占めたにすぎなかった。

　こんな有様ではわが家に帰れないと悲嘆していると、相弟子たちがなぐさめて言った。

　「君は顔立ちが女のようにきれいだし、性質も温順だから文人に向いている。だから、今からでも学を志す方が良くはなかろうか」

　彼らの言葉に一理があると思った錫雲は、すぐに書生たちが集まり学問に励んでいるという金剛山に向かった。

　彼は文筆をもって世に立とうと決心し、10 年を目標にして聖人君子の書に通暁せんものと努めた。

　こうしておよそ 6 年の歳月が流れたある日、彼は数人

の友と連れ立って、休息がてらに九龍の滝の見物に出掛けた。

たまたまここで彼は、金剛山の遊覧にやって来た行商人たちと雑談した。四方山話の末、彼の故郷が平壌城の西側、普通が原の客山のふもとであると知った一人が、ほうと膝を打って話した。

「実に素晴らしい土地を故郷にお持ちですな。わしらもその村の応国橋のお陰にあずかっているのですよ」

「応国橋ですって？」

趙錫雲が訳が分からず、不審に思っていると行商人たちは、趙応国という人が通行人の不便を取り除こうとして家財を売り払い、精力を尽くして大きな橋を大通りのくぼみの上に架けてくれたとし、彼の死後、その善行を後の世に伝えるべく、橋のかたわらに碑が建てられるまでになったと話した。

趙錫雲は自分が 10 余年もの間修業に励みながらも志を遂げ得ず、父親の念願を叶えることが出来ないでいると悔やみ、その夜は一睡もできなかった。

思い余った彼は修業を断念して、翌日平壌に帰った。故郷の村に到着してみると、果たして以前になかった橋があり、そのかたわらには父親の生前の美挙をたたえる碑が建っていた。

彼は碑を抱いて、とめどなく涙を流し号泣した。

「ああ、父上、父上はどうして幼い私に、人間が真実に生きる道を教えて下さらなかったのですか」

道行く人も村人もその泣き声があまりにも痛ましく、それに叫んでいることが腑に落ちず、気持ちを静めるようにと言って尋ねた。

「あんたは一体どういう人なのだ。それにどうしてそんなに大声を上げて泣いているのだ」

彼は、自分は趙応国のせがれだと言って、こう続けた。

「父は私が出立する際、人間は世に出て名を残さなければならないと教えてくれました。ところが父の言葉の深い意味を理解できなかったこの不肖の子は、功名心にとりつかれ、10 年もの間無駄に世を送りました。私が家を出る時、父が、誰からなんと言われようと、どこで何をしようと、国と民のために、たゆまずに努め励むようにと言い、そうしたら世に名を成すことができるのだとひと言教えてくれたならどんなにか良かったでしょうか」

この彼の言葉に人々は、それが人ごととは思えず、みなため息をもらした。

遅まきながら、人間が世に生まれて名を成すにはどうすべきかを今さらのように悟った趙錫雲は、勉強をしたいと願う子どもたちには読み書きを教え、武人を志す若者たちには自分が身に付けた武術を教えるべく精力と知恵を傾けた。

感動した村人たちは、あの父親にしてこの子ありだとたたえた。

のちに、彼の私心のない指導を得て優れた文人や武人に育った弟子や平壌の人たちは、趙錫雲の名を後世に語り伝えた。

酒岩山

牡丹峰から東北方に向け、大同江沿いに伸びる尾根の先に酒岩山という名の小高い山がある。

酒の湧く岩がある山だとしてこの名がついたのは非常に古い時代である。

昔、大同江の岸辺の村に父親と2人で暮らしている若者がいた。

幼い頃母親を亡くした彼は大変な父親思いで、朝早くから日暮れまで野良仕事に精を出しながらも、暇を見つけては山で柴を刈ってきて売り、その金で米や肉を買って父親を養った。

彼は、自分は草粥で飢えをしのいでも、父親の膳には白米の飯と肉を載せ、父親が食べたいという物はきっと求めてきて与えた。

ある日のこと。

いつものように柴を刈り、背負い子でしょって山を降りていた若者は、喉が渇いて、ある岩の割れ目から水が湧い

ている小さな泉に目を止めた。背負い子を下ろし、膝を突いて飲もうとすると、香しい匂いがする。両手ですくって何度か喉をうるおすと、気持ちがせいせいとしながらも頭がくらくらした。

背負い子をかついで立ち上がり、山を降り始めたが、目まいが大きくなり、足がふらついてまともに歩けず、ちょっと休んで行こうとして地べたに座り、背負い子を下ろして横になると、正体なく眠り込んだ。

目が覚めたのは日の暮れる少し前だった。

彼はその時になってはじめて、自分が飲んだのは水ならぬ酒だったと気づき、父親に隠れて先に酒を飲んだと悔やまれて、そのまま帰るのは良くないと考えた。それで、山際の農家で小さな酒樽を借り、それに酒を詰めて帰り、父親に勧めた。

父親は思いもかけず息子が香しい酒を小樽に一杯入れて帰ってきたことに驚き、不審に思って酒に口をつけようとしなかった。貧しい自分たちにこんなに香しい酒を小樽一杯も手に入れるなどということは到底不可能だと思ったのである。

「おい、正直に言え。この酒をどこで手に入れたのだ」

息子が山のある岩の割れ目から湧いている酒の泉を見つけて汲んできたと口をすっぱくして繰り返し説明したが、父親は頑として信じない。最後に彼は息子を先立たせ

て現場へ行き、その味を確かめてからやっと納得した。
　彼は、この香しく神秘な酒を自分独りで飲むのはもったいない、村の老人をみな呼んで一緒に味わおうと言った。
　若者が家々を巡って村の年寄りをみなわが家に招いてくると、彼らはその神秘な香りの良い酒を飲んで上機嫌になり、口々に若者の孝心をほめた。
「なあ、みなさん。これがどうして岩から訳もなく湧き出た酒だと言えようか。このお酒は親孝行な若者の真心に感心した天が、岩から湧き出すようにしたのに違いありませんわい」
　それ以来、若者が発見した酒の泉は、彼の父親のみならず村人たちすべてを喜ばせる共有の泉になった。
　こうして酒の湧き出る岩は酒岩、その岩のある山は酒岩山と呼ばれるようになった。
　平壌の人たちは、酒岩山にこもる若者のまれに見る孝心をたたえて、世々語り伝えるようになった。

子鹿を救った娘

　昔、普通江畔の村に万玉という娘が欲深い地主の家に奉公していた。幼くして両親を亡くし、地主の家に売られて子守や皿洗いその他の雑用にこき使われる毎日だった。
　ある年の中秋の朝、地主は家族と共にぶらんこ乗りや相撲大会の行われる広場へ見物に出掛けることにし、小娘の

万玉には山へ入って柴を刈ってくるよう命じた。
　万玉は嫌な思いをしながらも、金に売られた下女の身では命令に従うほかなく、虚弱な肩に背負い子を掛けて、蒼光山に登った。万玉は、遠くから聞こえてくる中秋の佳節を楽しむ人たちの声に、こみ上げる悲しみをやっと抑えながら、薪用の枯れ木を集めた。積み上げる柴の上には、涙がぽたりぽたりと落ちた。
　柴がもう十分に集まったと思われた時、不意にガサガサと枯れ草を踏む足音がし、いばらの中を子鹿が走ってきた。
　何かあわてふためいているらしい子鹿は、娘の姿を見ると、その足もとに近づき、彼女を見上げて自分をかくまってくれと訴えているかのような目つきをしている。荒れた息づかい、可愛い両の目にたたえた涙の露、いばらに傷ついてにじんだ血……。猟師に追われているに違いなかった。
　万玉はとっさに哀れな子鹿の上に枯れ木を積み上げて隠した。とその時、猟師が一人息をはずませながら走ってきた。
「鹿がここへやって来たろう。どちらへ逃げたのだ」
　万玉は谷の方を指差し、向こうへ走っていったと教えた。
　猟師の姿が見えなくなるのを待って枯れ木を除き、子鹿の体についた血痕をきれいにぬぐってやってから、早く母

鹿を捜していけと言った。

　ところが子鹿は自分を助けてくれたことが嬉しくて涙を流し、やがて万玉のチマの裾をくわえて引き始めた。娘はどうしたわけだろうかと不審に思いながらも、その後について行った。

　子鹿に引かれていった場所は、清い谷川が流れ、前方が明るく開かれた、景色のよい、真っ赤な花が咲き乱れている草原だった。

　子鹿は草原の中ほどで立ち止まり、彼女を見上げた。その目はこんなことを語っているようであった。

　「わたしの命を助けてくれたこの恩を何をもってお返しできましょうか。十分な物とは言えませんが、ここは野生人参畑ですから、存分に掘って持ち帰り、借金を全部返して自由の身になり、これまで世話になった人たちにも挨拶をすると良いでしょう」

　じっと娘を見上げていた子鹿は、やがてどこともなく立ち去った。

　あまりにも不思議な出来事に茫然として目をこすり、花に目を向けると、それらは明らかに野生人参で、一面に数え切れないほど咲いている。

　彼女はそれらを丁寧に一つひとつ掘り、背負い子に一杯載せ、柴はそのままにして帰った。

　万玉は野生人参の一部を恩人たちに分け与え、地主には

要求どおりに借金の返済をして自由の身となった。

こうして万玉は村人たちと助け合いながら、幸せに一生を送ったという。

恩返しをしたノロと蛇

昔、大同江のほとりに老人が一人わびしく暮らしていた。妻と息子が共に病気で亡くなり、一人身で野良仕事をしたり、大同江で魚を捕ったりして貧しい生活をつないでいった。

ある年の夏、2週間余りも大雨が降り続き、川が氾濫した。土手を越えて流れ込む水はしぶきを上げて岸辺の物一切を呑み込んでしまった。

轟々と流れる激流の中で、板や丸木にすがり、助けを求める人たちの絶望的な叫び声、家畜やけものの哀れな鳴き声、かめや行李などの家具がぶつかりあって砕ける音……。大同江とその岸辺は人間や動物の悲鳴に満ちた。

やっとのことで危機を避け清流壁の上に這い上がった老人は、そんな有様に見入っていたが、どうにもじっとしていられなくなった。

元来人情深く義侠心の強いことで人々の尊敬を受けている彼は、水に流されている生命を救おうとして、わが身の危険をかえりみず、荒れる川の中へ舟を漕ぎ出した。

奔流は水しぶきを上げて舟にぶつかり揺さぶるが、老人

は足を踏んばり、綱を投げて数十名もの人たちを救った。

　こうして岸に戻ろうとした時､けもののの鳴き声を耳にした。見ると、１本の丸木の上にノロと蛇が乗って流されている。老人はそれに近づいてノロと蛇を舟に移し、無事岸に着いた。

　ノロと蛇はただのけものにすぎなかったが､命の恩人である老人に感謝を表してか何度も振り返りながら茂みの中へ消えていった。

　助けた人たちをみな送り出してから引き揚げようとしたところ、少年が一人涙を目に浮かべてじっと立っている。

　少年は大同江上流のある村の地主の子だが､今度の水害で家族はみな溺死し､自分一人が生き残って頼っていくべき所がないと言う。

　老人は少年を引き取って暮らせるほどのゆとりがないし､とりわけ貧しい百姓の子でもない地主の子を家に連れ込むのはどうにも気が進まなかった。

　（だが頼れる人間もなく､住む家もない子を見捨ててもよかろうか）

　こう思い直した老人は､自分には将来頼りにできる子がいないのだから、この少年を養子にして一緒に暮らすことにした。

　やがて雨が止み、大同江の水も清くなったので、老人は

少年と一緒に魚を捕り、野良仕事も始めた。

数カ月が経ったある日のこと。

朝、老人が鍬を手にして畑へ出掛けようとし、垣根の外へ出た時、不意に大きなノロが現れた。ノロは老人の周りをぐるぐる回り、鼻をくんくん鳴らし、頭を上げたり下げたりして何か挨拶をしているようすである。不思議に思ってよく見ると、どうもあの大雨の時に助けてやったノロらしい。

（いや、お前がどうしてここへ……）

なつかしさのあまり、老人はノロの首を抱いてなでさすり、肩を叩きもして喜んだ。するとノロは老人の袖をくわえて引っ張り、体を左右にゆすった。

そんなノロの動作がいぶかしくてしばらく眺めているうちに、自分をどこかへ連れ出そうとしていると気づいて、その後に従い、深い樹林の中へ入っていった。

ノロは振り向き振り向きして老人が付いてきているかどうかを確かめながら、清い水の流れる谷間の大きな岩の前で立ち止まった。そして、岩の下の土を盛んに掻き始めた。

その下を掘れという意味だろうと思い、老人は注意深く鍬を振るった。するとそこに大きな壷が現れた。そっと壷を開けて中をのぞいた老人は目を丸くした。

なんとそこには目にまばゆい光を放つ金銀の細工物や

真珠、宝石が一杯入っていたのである。驚いてノロを振り返ると、ノロは何度かうなずいてから茂みの中に姿を消した。

老人は壷を注意深く取り出し、肩にかついで家へ帰った。金の指輪や腕輪、金のかんざしなどの一部を村人たちに分け与え、残った物は暮らしの足しにすることにした。

老人は一夜にして平壌城内の指折りの長者になり、一生遊んで暮らしても余るほどの財宝を持ちながらも、野良仕事や魚捕りに精を出し、つつましく生活した。

ところが養子が悶着を起こした。

地主の子としてわがまま一杯に育ったが、災難に遭って貧しい老人に引き取られ、しようことなしに労働生活を余儀なくされていた少年は、にわかに金銀財宝が生じると、翌日から一切仕事には見向きもせず、金づかいが荒くなり、自由奔放に振る舞った。

見かねた老人は養子を前に座らせて、じゅんじゅんとさとした。

「なあ、人間の根本は労働であって金ではない」

だが、元来人の金品をしぼり遊惰な生活をこととしていた地主の家の生まれである養子は、命の恩人の忠告をどこ吹く風かと聞き流して勝手なことを言った。

「有り余るほどの財物を持ちながら、何を好んで汗水たらして苦しい仕事をせにゃならんのです。それにこの宝は

お父さんが苦労して働いて貯めたものですかい。ぼくたち親子を助けて天から降ったものだから、その半分はぼくの物ですよ。なんでぼくが自分の物を自由に使うのが悪いと言うんですか」

養子はふくれっつらをして財宝を使う権利は自分にもあるものを自分が使って何がいけないのかと言い立てた。

それでも老人は穏やかにいさめた。

すると養子は目を怒らせて吐き捨てるように言った。

「そんなにがみがみ言うんなら、ぼくはこの家から出ていくから、財産を半分分けて下さい」

この言葉にかっとなった老人は、腕を振り上げ、養子の横っ面を力一杯引っぱたいた。

「この恩知らずめが」

老人の手は憤りにぶるぶる震えた。

頬を引っぱたかれた養子はここでおのれをかえりみるどころか、ぶつぶつぼやいていた末、戸を蹴って外へ飛び出した。そして悔しまぎれに監営へ駆け込み、養父が金銀細工をどこかで大量に盗み出してにわか大尽になったと申し出た。

こうして獄につながれる身となった老人は、ゆえもなく牢に投げ込まれたこともさることながら、水に溺れて死ぬところを救い出し、わが家に引き取り大事に育ててきた養子に裏切られたことに胸を痛めた。人間の名を持って世に

生をなした身であるなら、そんな非道なことがあえて出来ようか。畜生にも劣る野郎だ……。

どうにも気持ちがおさまらず、あれやこれやと考えているうちにうとうとした。すると、かたわらで何かがうごめいている気配がした。目を開き、薄暗がりの中で床を手探りすると、ぬるぬるした物が手に触れた。

「おやっ、なんだこれは？!」

目をこすってよく見ると、なんとそれは１匹の大蛇である。ぎょっとして起き直ろうとしたとたん、手の甲に痛みを感じた。蛇が老人の手を噛んで逃げたのである。

獄につながれた上、蛇にまで噛まれてむしゃくしゃしていると、傷口がずきずきし、やがて全身に熱が回り、体がかっかっとほてってむくみ、痛みはひどくなるばかりである。

もだえ苦しんでいるうちに、夜が明け始めた。そこへまたまたそばで何かのうごめく気配がした。老人はぞっとして避けようとしたが、体が言うことをきかない。それでもどうにか頭をもたげて音のする方を見ると、なんと昨夜の蛇が近づいてきている。と見る間もなく、蛇はくわえてきた何かの青い草をいくつか老人のかたわらに置いて消えてしまった。

しばらくすると、不思議なことに体のむくみが引き、痛みも取れて、全身がすっきりした。

（この草のおかげで命拾いをした。なんと神秘な草だろう）

老人はそれらの草を丁寧にたたんでしまっておいた。

ところでその日の昼頃、牢の外で官吏たちがせわしなく行き来し、何事かひそひそ囁いている。夜に入ってからもそうした騒ぎは静まらない。

「監営に何事か生じたのか」

老人が何度も尋ねると、牢番はうるさそうにざっと説明した。

「監司が昨夜毒蛇に噛まれて苦しんでいるが、名のある医者たちを呼び集めたものの、薬という薬をみな使ってみてもどれも効き目がなく、医者たちは困り果てている」

老人は昨夜蛇に噛まれ、その蛇が薬草をくわえてきてくれたことを思い出し、自分が監司の病気を治してやるから、そう伝えてくれと言った。

牢番は、何をたわけた野郎だとして相手にしなかったが、やがて監司の死はもはや免れなくなっていると聞き、老人の申し出を上役に伝えた。

そのことを聞いた監司は、自分を助けてくれる者なら、それがどんな人間であろうと構うことはない、早く獄中の老人を連れてくるようにと促した。

牢を出た老人は薬草をたずさえて、監司の部屋に入り、病人の傷口に薬草を付けた。

息絶え絶えに弱り果てていた監司の生気が直ちに蘇り、大きくむくんでいた体も元通りに回復した。

　起き直った監司は不思議でたまらず、この薬草はどう手に入れたのかと聞いた。

　老人は、大同江が氾濫した時に大勢の人やノロと蛇を救ったことや自分が獄につながれるに至った経緯、蛇が自分の手を噛んでから不思議な薬草をくわえてきたことなどを話した。

　その話を聞いた監司は、直ちに養子を捕らえて獄につなぎ、老人を釈放するよう命じた。

　　このようにして善良な老人は晴れて無罪の身としてわが家に帰り、養子は重刑に処せられたという。

平壌の逸話と伝説

編　集: 張香玉
翻　訳: 金時習
発　行: 朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
発行日: チュチェ111(2022)年9月

E-mail: flph@star-co.net.kp
http://www.korean-books.com.kp